
彼女の向こう側

香住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の向こう側

【Nコード】

N0655G

【作者名】

香住

【あらすじ】

高校二年の春。あたしの好きなひとは、親友の彼氏になった——
ひっそりと育んでいた想いはひっそりと葬られるはず、だった。

01…偶然から始まる、必然

クラス換えの発表は、あたしにとって衝撃的だった。まさか、だ。まさかそんなことがあるなんて。

「結^{ゆう}ちゃん、また同じだね、嬉しいなー。今年も一年、よろしくね！」

隣で背伸びしながら張り紙を見ていた亜矢がにっこり笑う。両の頬にきゅっと笑窪がひっこんで、あたしは毎回、そんな笑顔を持つ亜矢が本当に可愛いと思う。

亜矢は可愛い。背が小さくて華奢で、もとか栗色の髪は柔らかく高い声は涼やかだ。性格も悪くない。甘えっ子素質はあるけれど、亜矢が我侬を口にしたり拗ねた態度を取ったりすると嫌味がない。

『女の子』のイメージを全部抱え持ったような子だった。

あたしは内心、そんな亜矢が羨ましくてならなくて、一年の最初の頃は意図的に避けもしていたのだけど……ちょっとしたトラブルで亜矢を助けることになってしまった結果懷かれてしまった、というのが正しい。

「まーた一年、亜矢のお守りかーあ」

だからそんな風にからかうのは日常茶飯事だ。そして亜矢がぷくっと頬を膨らませるのも、「結ちゃんひどーい」と軽く腕を引っ張るのも、何もかも。

日常茶飯事じゃないことがひとつだけ、あった。あたしが言わなくともたぶんそろそろ、亜矢が口にする。

「ふふ、亮くんも同じなんだよー、見た？　びっくりだよね！」

そう、そのとおり。本当にびっくりだ。まさか亜矢と——それから本宮亮輔、彼と同じクラスだなんて。

どちらか片方だけとなら良かったのに、と思わないといえは嘘だ。せめて亜矢とだけなら、せめて彼とだけなら——

人ごみの向こうに本宮の横顔が見えて、あたしの胸がどきんと跳

ねる。たぶんこっちを見る。亜矢を見つける。そして、笑う――あたしは、本宮のその笑顔が好きだ。

亜矢が本宮に気づくとその笑顔は照れくさそうに引っ込む。だから亜矢は気づかない。どんな顔で本宮が亜矢を見ているか。

それはつまり、どれだけ本宮が亜矢を思っているかに比例している。

「亮くーん！」

亜矢が大きく手を振って本宮に近づいていくのを、あたしは呆れたような顔で見送る。けれどついていかないと亜矢はまた膨れっ面をするから――亜矢のその顔は、本宮に見せたくないくらい可愛いから、だからあたしは数秒遅れてその後に続く。本宮はいつもの穏やかな表情を取り戻して、駆け寄る亜矢を見下ろした。

二人が付き合い始めてから三ヶ月、あたしはたぶん亜矢の次にその顔を見てる日数は多いだろう。

「亜矢、一年よろしく」

「うん、こちらこそ！ あ、ねえねえ、結ちゃんも一緒なんだよ！二年は楽しくなりそうだよね！」

亜矢の言葉に、本宮がふいと視線を上げてあたしを見た。その視線の先で、あたしはわざと大袈裟に溜息をつく。

「……ホーント、二年もうるさくなりそうだワァ」

「結ちゃん！」

横目でちらと亜矢を見ながらおどけて言うと、案の定ぐいと腕を引っ張られてよろめいた。

あははは、とひと通り笑いで誤魔化したあたしに、本宮がにっこり笑う。

「紺野、よろしくな」

「うん、亜矢のお守り任せるからね、本宮。あー肩の荷が下りた下りた」

「ひっどーおーい！ もう結ちゃんなんか結ちゃんなんか！」

「なんか、なにさ？ あたしなんか？ なに？ なになになにー？」

ニヤリと口角を上げて詰め寄ると、「うつ……」と言葉を詰まらせてたじろぐ亜矢。その仕草が可愛くておかしくて、あたしと本宮は声を揃えて笑った。

02…彼女の親友

あたしが本宮と初めて会ったのは、一年の時の委員会。お互いがクラスの文化祭実行委員になったことで知り合い、委員会のたびに顔を合わることになった。

そしてある委員会で、気の強いあたしが三年生の先輩の理不尽なやり方に反発して険悪なムードになった中、穏やかながらもきっぱりと本宮は言ったんだ。

「紺野の言い方はともかく、主張は正しいと僕は思いますが……紺野、言い方は考えた方がいい」

あたしに注意をすることで、先輩の面子を立てながらも筋を通すやり方に、あたしは素直に従うことが出来たのを今でも覚えている。けど、あたしが本宮に惹かれたのは、そのあとのことも含めてだった。

その委員会が終わったのはもう日も暮れて下校時間ぎりぎりだった。あたしは本宮の言い分にも一理あると思ってその場で謝りはしたけど、結局翌週に持ち越された話合いに満足がいくはずもなく、ぶすつとした顔のまま学校を出た。

校門を出たところで突然、闇から「紺野」と呼び止められてびっくりして足を止めた。振り返ると本宮が立っていて――

「今日は、悪かったな」

「別に……いーよ、本宮の言うこと正しいもの」

「来週、うまく行くといいよな」

不機嫌に答えるあたしとは裏腹に、本宮は笑っていた。

今日の嫌なことを考えているあたしと、来週うまくいくことを考えてる本宮。

ああ、もしかして、とそのとき初めて思った。本宮は元々女子に人気があったけど、あたしはその理由を外見だとばかり思ってた。すらりとした長身、短く切られた髪、整った顔立ち――たまに笑

うと、あどけなさが残る。本宮は優しい。ただ優しいだけじゃなくて、しっかりと主張も出来る。人の気分を害さずにうまくまとめることが出来る。嫌味じゃないし、それをひけらかすこともしない、どちらかというと遠慮深い方だ。たぶんそういうところが、女子たちにも好かれるんだろう。

結論から言うと、翌週その先輩の主張に言い負かされはしたものの、文化祭はそれなりに楽しかった。委員会が解散するときはその先輩にっこり笑って握手を求められたし、そんな風に人間関係をもううまくいったのは本宮が仲裁してくれたからだとあたしは思っている。

気になり始めたのは、それから。いつのまにか、目で追っていた。クラスが違うから廊下でとか、体育館でとか、それから例えば、弓道場を盗み見たりして。目が合うと本宮はいつも、「お、おはよう」とか「もうすぐテストだなー」とか「気をつけて帰れよ」とか、他愛ない言葉をかけてくれた。

軽口にも気安く付き合ってくれて、たまには真面目に話をしてみたりして、あたしは、いつのまにか、本宮のことを――

亜矢が、サッカー部の先輩と別れたのはその頃だった。

あたしが知るところの亜矢は、彼氏を欠かしたことがない。亜矢自身が乗り換えることもあれば、別れた噂を聞いた男子にすぐに告白されることもある。

あたしと亜矢が仲良くなったきっかけのトラブルも実はその辺にあって、聞くところによるとどうやら中学の頃からそれはずっと、らしい。亜矢の家は両親がうまくいってなくて、って言う話は誰かから聞いたことがある。

そのせいなのかどうか、とにかく亜矢は毎回、付き合っている彼氏にべったりになる。学校の行き帰り、お昼休み、休日。だから皆亜矢の彼氏が変わったことがすぐわかる。時々信じられない早さで変わるときもある。それがあからさま過ぎて女子には不評なのもわからない。

ただ、亜矢は——どうやら淋しいらしいのだ。あたしにわかるのはそこまでで、それ以上の踏み込んだ話はまだしたことがない。

でも、あたしにとっての亜矢はいい友達だ。傍から見ている限り、確かに恋愛のサイクルは早いけれど——でも、二股をかけることはないし、都度都度、付き合ってる相手のことを思ってるのもわかる。それが気に入らないというわけじゃない。でも、さすがにあの時はあたしもちょっと絶句した。

「結ちゃん、知ってるかな……弓道部のネ、本宮亮輔くん。ちょっと大人っぽい、優しい人なんだー」

サッカー部の先輩の次に亜矢の彼氏になったのは他でもなく、本宮だった。

それを亜矢から聞かされたとき、あたしはうまく笑えていたかどうかわからない。でも、口はきちんといつもどおりの反応を返していた。

「へーえ、今度は随分また……」

サッカー部の先輩のときは確か、『すっごく明るくって面白いんだよ!』だったかな。

あたしが濁した言葉を亜矢は敏感に感じ取って、拗ねて頬を膨らませる。

「もう、結ちゃんたら……!」

そう言いつつも嬉しそうに笑う亜矢はいつもの「恋する亜矢」だった。

噂じゃ、本宮が結構押したとか聞いた。あたしは自分の思いを押し殺して、「彼女の親友」の立場を貫いている。——たぶん、今も。

03..はじめまして

亜矢が膨れるのを本宮と二人で笑っていると、急に背中から声が振ってくる。

「あーあ、亜矢ちゃんて遊び過ぎだろ、亮輔。よしよし、姫はオレが助けてやろう」

その見知らぬ声を見上げると、どこかで見た顔……な、気がする。茶髪をかきあげながら登場したそいつは、気安く亜矢の頭を撫でると「ねー？」と言いながらその顔を覗き込む。

「希くん、優しいよねー」
のぞみ

「そりゃーね、オレは女のコには優しいの。知らなかった？」

本宮と一緒にいるところを何度か見たことのある男子だ、とあたしがそいつの外見的特徴を認識したとき、ふと目が合って、あたしはどきりとするよりにと笑ってみせる。

「良くないなー、下手な鉄砲になっちゃうよー？」

「まーさか！ オレだって選ぶしねー」

喋るのは初めてだけど、そんなことを感じさせないくらいそいつは軽く返してくる。亜矢がもう機嫌を直してくすくす笑う。

「希くん、選ぶって言うより手当たり次第だよね？」

「お、それってちょっと心外。オレは亮輔みたいにムツツリ君じゃないだけだってー」

「おいおい、人聞きの悪いこと……あ、紺野、初めてじゃないか、希？」

本宮がさらりと気づいて話を振ってくれる。そういう小さい優しさをさりげなく持つてるのも、知ってる。だから――

茶髪がぱつと笑顔を浮かべてあたしを見、にっこりスマイル。

「あ、初めまして？ ヨロシクねー、オレ、若原希でっす」

「わかはら……？ え、若原って、あの……？」

あたしは思わず素で聞き直した。

わかはらのぞみ。そう、名前はよく知ってる。女にかまけてバスケ部退部寸前だとか、先輩の彼女にちょっかい出してボコられたとか、いっつも連れてる女の子が違うとか、繁華街で遊んでるとか……まあいわゆる、それ系の噂話で。

あたしが思わず漏らしたそれに本宮が深く溜息をつき、そしてほんとその手を肩に置く。

「……名前、売れてるな、希」

「みたいだなー。オレって有名人？」

本宮の皮肉を知ってか知らずか若原、気にしてない声音で返答。そしてニヤリと笑って、わざとらしく髪を撫でつけてみたり。

本宮が、カッコつけた仕草を連発している若原を見えますます白けたように横目で睨んだ。

「……いろんな意味でな」

「うわー、亮輔ってたまにキツイよなー」

「お前にだけな」

「歪んでる愛情表現ってなわけね」

うんうんうんと頷きながら悦に入っている若原と、それをじっとり睨む本宮。

へーえ、本宮って穏やかで落ち着いた印象だったけど……こんな面もあるんだ。大人っぽい雰囲気が一転して、まるで子供みたいに幼い。それがなんだか可愛くて、くすりと僅かに笑みを漏らすあたしの隣で、まさしくその、思ったとおりの言葉が飛び出したのが聞こえた。

「亮くんて、希くんと一緒だと幼く見えるよねー」

ニコニコしながら亜矢が言う。あたしはまるで心の中を覗き見されたような気分がしてさっと笑みが凍りついた。

ううん、亜矢はそんな子じゃない。鈍い、というところちょっと語弊があるけど……あたしが本宮に惹かれてたなんてこと、気づいていない。亜矢はあたまから相手を信じるタイプだし、あたしのことを親友として大事に思ってくれてることも知ってる。「結ちゃんも早く

彼氏作りなよ」なんて、他愛なく言っちゃうタイプだ。

そしてあたしは人一倍、そういうコトを素直に口に出すのが苦手、と来ている。秘密主義とよく言われてきたけれど、こればかりは仕方ない。どうしたら亜矢みたいに屈託なく、且つ自然に好きな人の話が出るのか――あたしが教えて欲しいくらいだ。

あたしが真顔になったのはきつと刹那のこと。

「違う、こいつはいつもガキなの。カッコつけなんだよ、亮輔」

雰囲気は変わらず、本宮を殴る真似をして若原が言う。その拳を本宮がさりげなく逸らして、そして軽く亜矢の腕に触れた。

「さ、教室行こうか」

言葉はどちらかというと亜矢よりあたしに向けて放たれていたけど、その手は亜矢をエスコートしていた。

「そーね、そうしましょ」

あたしはわざと本宮に乗って若原を軽く横目でチラ見して、二人の後に続く。

「皆、ツメタイ……」

わざとらしく大袈裟にうな垂れる若原を残して、あたしたちは教室へと向かった。新しい一年を紡ぐ、二年C組の教室。

04…インスピレーション

五月、本宮の誕生日。亜矢に言われる前に知ってたけど、何か出来る筈もなく。

——ただこうして、亜矢の買物に付き合うだけ。

「ねえ結ちゃん、コレどうかなあ？」

「……それはちよつと……本宮には可愛過ぎるんじゃない？」

「えーじゃあ、こっちは？」

「うーん、ちよつと子供っぽいかな？」

亜矢は嬉しそうにあれこれと手にとってその都度訊いてくる。

まあ、そんな風に一生懸命なところが可愛いとも思うんだけど、でも、もうそろそろ決めて欲しいかなあ。朝から出かけてもうすぐ十五時、回った店は何軒か数える気力も、もうない。

「結ちゃん、あたしちよつとあっち見てくるね！」

返事を返すより先に、亜矢の残り香だけがそこに残る。ふんわりと女の子の香り。亜矢は普段香水使ってないはずなんだけど、何故かいっつもいい香りがするんだよね。シャンプーかなあ…女の子っぽい香り。

ちよつと溜息をついて、改めて店をぐるりと回る。まさかあたしから本宮に何か贈るわけに……いかないよね。そんなわけにいいのは勿論わかってるけど、つい、本宮に似合いそうなものを探してしまう。

さっきから亜矢が選ぶのは可愛いものばかりだけど、本宮にはなんていうか……もう少しシックなものが似合うと思うんだよね。

眼で店内を探して回ると服屋さんの棚の一番下に小物が並べられているのに惹かれてあたしは立ち止まり、ていねいに眺める。そのなかのひとつ、銀色のキーホルダーに手を伸ばした。

光り過ぎない銀色に、軽過ぎない重み。流れる水の線のようなデザインに埋め込まれているのはたぶん、クリスタルの粒。

きれいで、欲しい、ってまず思った。それから次に、ああこれ、本宮のイメージだ、って。落ち着いていてしつかりした、そんな本宮のイメージに似合ってる。

手のひらに載せて重みを確かめながら、迷う。一瞬で買うことは決めたけど――それを誰のためにするのか、まだ決めかねてる。どうしよう。買うのはいいけど、あたし、これ本宮に渡せる？

――ううん、いいや。もし渡せなかったら気に入ったんだもの、自分で使おう。

あたしは銀色のキーホルダーを握り締めて、レジに向かう。亜矢は、まだ戻ってこない。もし亜矢に買うところを見られたら……本宮には、渡せない。

妙にドキドキしながらレジを済ませ、ラッピングはせずに小さな紙袋に入れてもらう。そしてその袋をバッグに滑り込ませようとしたとき……慌てて身体を捻った拍子に、誰かにぶつかった。

05：ひとりなの？

「す、みません……！」

「あー、ゴメンゴメン、大丈夫？」

聞いたことのある声だ、と思った瞬間、あたしの手から紙袋が滑り落ちる。かしゅーんと床に落ちた音が、妙に大きく聞こえた。

「あつれー、ぐうぜーん。お買物？　ひとり？」

落ちた紙袋より先にそうかけられた声の主を見あげた。――わか
はらのぞみ。

驚いて咄嗟に返事が出来ずにいると、若原はちよつと笑って肩を
竦めて床の紙袋に手を伸ばす――落ちた拍子に止めてたテープが剥
がれて、銀色の一部がちらりと見えている。

「あ、ごめんごめん」

若原が拾おうと腰をかがめようとした一瞬前に、あたしはぱつと
紙袋ごと拾い上げた。

「だ、いじょぶ」

ぎこちなくそう言うと、若原はちよつと驚いたように何度か瞬き
をして、「あー、うん」と生返事を寄越す。でもすぐに、「ひとり
なの？」っていつもどおりの軽めな口調で聞いてきたけど。

「亜矢の付き添い」

さつき亜矢が消えた方角を指してそう答え、ちよつと溜息をつい
てみる。若原が振り返って遠目に亜矢を認めると、頷きながらニッ
コリ笑った。

「そっかそっか、仲良しだねー、二人してさ。オレなんて、淋しく
ひとりでお買い物」

若原が何かを探すようにしながら店の中をゆっくり歩くのへ、あ
たしはなんとなく付いて歩く。さつきキーホルダーを見つけた棚で
若原は立ち止まり、ひょいと一番下の棚に気づいて覗き込む。

「あー、こんなトコに置いてんだ！　オレ、超ラッキ」

言いながら若原は手を伸ばしてそこから銀色のキーホルダーを取り出した。さっき買ったばかりの流線型をしたキーホルダーと同じシリーズ、でも丸みを帯びた優しいフォルムのついたもの。

若原がそれを摘み上げ、あたしに良く見えるように「ほら」と差し出す。

「これさー、前亮輔と来たときに一目惚れしたんだけど、目の前で買われちゃったノヨ。もう入荷しないかもって聞いてたから、ひやひやしたぜ」

嬉しそうに、大事そうにその丸い飾りを手のひらにのせた若原は、ふと気づいたようにもう一度、棚を覗き込んだ。

「あー、もいっこの方は売り切れか」

「もう一個？」

「うん。こーゆー形の、綺麗な流れる感じのヤツ。亮輔はそっちのが気に入ってたんだよね。もうねーや」

言いながら、若原の指がああの流線型をなぞる。あたしのバッグに今入っている、あのキーホルダー。空に描かれた流線型のさきに、本宮の顔が浮かぶ。

嬉しそうにレジに向かう若原を苦笑で見送って、あたしはバッグにしまった包み紙をもう一度覗き込む。……もしかしたら本宮、喜んでくれるかも？

06：日ごろの行い

「あれえ、希くん？ どうしたのー？」

ちよつと大きめの紙袋を手に、亜矢が戻ってくるなり若原を見つけた。レジ最中の若原が「おー」と軽く片手を上げてそれに答える。小走りにあたしに駆け寄る亜矢の手の紙袋から、赤いリボンがこぼれている。

「決めたの？」

「うん！ 可愛い置時計があつてね。それにしちゃったー」

「あーよかった、これでゆっくり出来る」

わざと溜息をついてそう言っていると、亜矢はニツコリ極上の笑顔になった。

「あはっ、ありがと結ちゃん、お礼にケーキセットご馳走する！」

「……クロスハウスのね」

「えー、あそこ高いよ。でもおいしいよね、クロスのチーズケーキ！」

このあたりで一番人気のあるカフェの名前を挙げると、亜矢は唇を尖らせて抗議したあと、思い出し笑いをふふ、とした。

「亜矢ちゃん、もしかして亮輔の？」

レジを済ませた若原が亜矢の手の紙袋を覗き込んでそう聞いた。

「そう！ 来週だもんね、亮くんの誕生日。希くんは？ もしかしてひとり？」

亜矢がわざとらしく周囲をキョロキョロと見回す。大概、若原は誰かと一緒だ。それも女の子。学校でも、登下校でも。……しかも、同じ子じゃないのがすごい。

「何その意外そうな顔。たまにはひとりがイイときもあるんだって」「ふうん……んじゃ結ちゃん、二人でカラオケ行こっ」

亜矢があたしの腕に自分の腕を絡めてそう言っていると、若原が「ツメタイ……」とがっくり肩を落とした。

「たまにはひとりがいいんでしょー？」

「んーなつれないこと言わないで、亜矢ちゃん」

「そーだよね、若原っていつも女の子と一緒にだし」

「ちょちょ、紺野ちゃんまで！」

「あたしたちが相手しなくても、いーっぱいいるんだもんねえ」

「うわあオレ、何気に酷い言われよう……」

「残念、若原。日ごろの行いって大事だね」

「ううう、酷い誤解だ……」

泣き真似をする若原を亜矢と二人でクスクス笑って、あたしたちは腕を組んだまま歩き出す。途中でくると亜矢が振り返る。

「希くーん、ホントに置いてっちゃうよーお？」

07…モテる男のスケジュール

結局、あたしと亜矢と若原っていう異色の組み合わせで行ったカラオケで散々笑い、時間はあっという間に過ぎる。途中、若原がケータイを持って部屋から出て行ったときに亜矢がその背中を見送りながらあたしの隣にくっついて、囁くように言った。

「また女の子だよー、きつと。希くんてマメだよねー」

あたしがドアの外でケータイを耳に当てている若原をちらりと見ると、横顔が楽しそうに笑ってる。

「一種の才能かもね」

「ホストの？」

呆れたようなあたしの返事に亜矢が悪乗りしてそう答え、二人で顔を見合わせてニヤリと笑う。

亜矢がソファの背もたれにもたれてうーんと伸びをした後、「でもさー」と続けた。

「希くん、カッコいいしマメだからモテるのもわかるよねーえ」

「カッコいいかは置いといて」

すかさず突っ込みを入れると、亜矢が肩を揺らして笑う。

「確かにいつも女の子と一緒にイメージだね」

「わかるー！ 特にA組の内沢さんとかね！」

亜矢がはしゃいで口にした名前はあたしも聞いたことがあった。同じクラスになったことはないけど、若原と付き合ってるんじゃないかって噂のあった人。

……確かに若原と内沢さんはよく一緒にいるのを見かけるけど、結局のところなのかはよくわからない。

「この前は三年の先輩とごはん食べてたし、一年生にもファンが多いみたい」

間口広いなあ、若原。

「ごめんごめん」

噂の主はパタツとケータイを折りたたみながら戻ってくると、ひよいと上着に手をかけた。

「悪い、オレ、一抜けな」

言いながら財布を尻ポケットから出すと、紙幣を数枚無造作にテーブルに置いた。

「あー、また女の子だなー？」

「まーね、モテるオトコって辛い」

亜矢が横目で睨んでそう言うのと、若原はニカツと笑って片手を上げ、「んじゃな、また明日！」と言って出て行った。あっけにとられて見送ってたあたしは、そこでふうつと溜息をつく。

「忙しい人だねー」

「ねー。亮くんできえなかなかつかまらないってボヤいてたよ」

唐突に亜矢の口から本宮の名前が出て、咄嗟に返事に詰まった。

「そ、う、なんだ」

「ぎこちない返事に、亜矢は気づかない。」

「うん。『俺、希の中で優先度最下位だから』って言ってた」

「でも、若原って本宮と一番仲いいよね？」

「男子ではね。それより女子の方がはるかに仲良しだって、亮くん呆れてた」

そのときの本宮との会話を思い出したのか、亜矢はくすくすと笑った。

08…ハッピーバースデー

本宮の誕生日、当日。亜矢と本宮は一緒に登校してきた。プレゼントは駅のロッカーに入れてきたと亜矢はこっそりあたしに耳打ちする。

そしてあたしのカバンには――あのキーホルダーが小さな紙袋にリボンと一緒に入ってる。

もしチャンスがあったら渡したい。そう考えてたあたしは、授業が終わるまでずっとドキドキしていた。けれど亜矢はずっと本宮にべったりで、結局あたしは何も出来ずに二人が帰るのを教室で見送っただけだった。

「じゃーねー、結ちゃんお先に！」

「紺野、じゃあな」

二人で仲良く手を振られたら、あたしだって振り返さないわけにいかない。

「また明日ねー」

ニッコリ笑って手を振ったあたしに、思わせぶりに亜矢がウィンクして教室を出て行く。その腕が、さらりと本宮の腕にからみつくのが僅かに見えた。

ドアが閉まると、あたしは小さく溜息をついて机に突っ伏した。何人かのクラスメイトたちがじゃあねーと言いながら教室を去っていく中、あたしはしばらくそうしていたけれど人の気配がなくなっただのを感じてむくりと起き上がる。

あーあ、やっぱ無理だよね。フツーに渡せばよかったかなあ。友達だもん、『ハイコレ！』って。……無理があるかなあ。

カバンから紙袋を取り出す。中のキーホルダーに紺色のリボンを結んだだけで、紙袋はその辺にあるような無骨なやつだ。これなら、亜矢に見られても良かったかなあ。

ちらりと中を覗こうとしたときに、突然ドアが開く音がしてあた

しは咄嗟にそれを握り締めた。

「あれ、紺野、まだいたのか」

「ど……したの？ 忘れ物ー？」

心臓が破裂しそうだった。瞬きが多かったかもしれない。普通の声が出たのだろうか。

本宮は「ああ」と言って自分の席から数学の教科書を取り出した。それをあたしに掲げて見せ、「俺、明日当たるからさ」と照れくさそうに笑う。

その次の言葉は『じゃあな』だろうと感じたあたしはがたと立ち上がり、「あのさ」と最初の一言を口にする。

「ん？」

「あ……えっと、亜矢は？」

本人がいないところで亜矢の話になるといつも本宮がみせる、恥ずかしそうな笑みが浮かんだ。そして教科書でヒョイとその方向を差した。

「校門のところで待っててもらってる」

「そか」

あたしはさっき握り締めてしまった紙袋の皺を丁寧に伸ばしながら、まだ迷っていた。

どうしよう、どうしよう。でも、今しかない。今しかないけど、でも、どうしよう。

「っ誕生日……なんだよね。おめでどう」

やっつとで、そう言えた。なんだか詰まったけど。そして一歩、本宮に近づく。本宮は教科書をカバンにしまいながら「ああ」と笑う。

「亜矢に聞いたの？ サンキュー」

本宮はちよつと照れた風に笑った。いつも亜矢を見つめてる視線が、あたしに留まる。思い切って、包みを持った手を本宮に差し出す。ほら——言わないと。早く。

本宮はそれを見てちよつと不思議そうにしてたけど、ふいとあたしを見た。

「俺に？」

「そ……う。本宮に」

訊ねてくれなかったらあたし、何も言えなかったかもしれない。
本宮はいつもどおりに受け取った。

「何かな」

「家で、見て」

「ん」

今にも覗き込もうとしていた本宮の行動をそう制すると、素直に
頷いてくれてあたしはほっとする。

「サンキュ！」

本宮は袋を掲げてじゃあなの代わりにそう言うと、教室を出て行
った。小さくなっていく足音に、あたしはほっとして表情が緩む。
良かった、渡せて。ひとりニヤニヤしてる自覚はあったけど、構
わずそのまま自分の席に戻る。

——と。

がたんと扉の音がする。そうだ、前の扉、立て付けが悪くて時々
うまく開かない。

09：目撃者は語らない

そこには、若原がいた。あたしと目が合うと、若原はニツカリと笑った。

「お邪魔だった？」

「何してんのよ」

自分でも驚くほど、声に刺があった。

本宮にプレゼントをあげたこともそうだけどさつきニヤニヤひとりで笑ってたのを見られたのは――死ぬほど恥ずかしい。自分の頬がかつと熱くなるのがわかって、あたしは口にブレーキが利かなかった。

「何コソコソしてたワケ？」

「……オレ、カバン取りに来ただけなんだけど？」

あたしのキツイ台詞に若原は動じず、いつもどおり軽い口調でそう言うとう自分の席へ向かう。ガタガタと響く音が、嫌に耳にうるさい。顔、熱い。

若原がカバンを手にする音の後、ちょっと間があって、そしてぽつりと続けた。

「渡せてよかったじゃん」

「な―――！」

あたしが振り返ると、若原はもう背を向けて後ろの扉に向かっていた。

「若原！」

あたしが怒鳴ると、若原はぴたりと足を止めた。そしてちょっと振り返ると「何？」と聞く。

「――ずっと、見てたの？」

押し殺した声は、自分でもわかった。震えてる。怒りで震えてる。「んー、まあそんなところかな」

軽く答えてまた出て行こうとする若原に、あたしはカッとして拳

を握り締める。

「盗み聞き、してたってコト」

歩き始めてた若原の足がぴたりと止まる。けど、あたしの口は止まらなかった。

「あんたってサイテー！ 裏でコソコソ盗み聞きなんて……ッ！」
言い過ぎた、とすぐに思った。自分で言った言葉を口に押し戻したいとも思った。

ごめん若原、と口にしようとした矢先に飲みこんでしまったのは、今まで見たこともないような冷やかな若原の視線のせいだった。
いつもの若原じゃない。軽くてお調子者で女の子が大好きな、いつもの若原は笑顔しか知らない。こんな風に――酷く強く睨まれるなんて。

「……悪かったな、コソコソしてて」

聞いたこともないような冷たい声だった。

若原はぼそりとそれだけ言うのと、くるりと踵を返す。その背中あたしの言葉も、手も、謝罪も、何もかもを拒否しているように見えた。

事実あたしは、若原に謝るどころか呼び止めることすら、出来なかった。

10：不在の理由

翌日、あたしは珍しく寝坊した。……というか、ぜんぜん眠れなかった。朝方うとうとしたような気がしたけど、若原のあの冷たい視線が思い出されてすぐに飛び起きた。

もちろん自分が悪いのは百も承知してる。あんな風な言い方ってない。たとえ相手が若原だからって——ううん、あたし、甘えてたんだと思う。若原ならきつと、『しょーがねーじゃん、聞こえちゃったモンはさ』とか、そんな風に軽く受け流してくれるって思ってた。

溜息をついてる間も惜しく、あたしはダッシュで学校へ向かう。あーんもう、出来るなら朝イチで若原に謝ろうと思ったのに！

後悔しながら教室に着くと本鈴ぎりぎり、亜矢に口パクで『おはよう』というのが精一杯だった。ちらっと見ると——若原が、いない？

一時限目が終わるのをじりじりしながら待った。チャイムと同時にあたしは立ち上がってずんずんと本宮の席に向かう。もちろん亜矢もすぐに寄ってきて、「結ちゃんおはよう」とにこやかに言った。

「おはよ、本宮」

「遅かったな、紺野。寝坊した？」

ニコニコしている本宮の笑顔にちよつとどきりとしたけど、今はそれよりも。

「若原、休み？」

唐突なあたしの質問にも、本宮は落ち着いて若原の席を振り向くと、「さあ」と言った。

「聞いてないんだ。連絡もなかったみたいだし」

「サボリかな？」

亜矢がいたずらっぽい笑顔でそう付け足した。確かに、時々若原

は学校を休むけど——でも、昨日の今日、だもんね……

「またバイトがキツくてサボりかも。どうかしたのか？」

本宮がぼろりと零したそれを、あたしは鸚鵡返しに問う。

「バイト？」

「ああ、夜ね。見つかることやばいから辞めろって言ったんだけど」

本宮がちらっと周囲に目をやったのは、先生の耳に入るとまづいから。バイトそのものは禁止されていないはずだけど、学校に来ないとなれば問題になる。当然、深夜は法律的にもNGだし。

「人がいないと閉店までいなきゃいけないみたいで」

「ああー、だから希くん、時々おっきな欠伸してるよね！」

確かに、亜矢の言うとおり。授業中寝てる人も少なくないけど、若原は突然一限サボったりしてる。一度、『何してるのよ、サボって』と呆れて聞いたら『睡眠学習』とか言ってたっけ。

「バイト先、知ってる？」

あたしがそう訊ねると、本宮は軽く頷いてノートの最後のページに地図と、店の名前を書いてくれた。

11…夕刻の繁華街

当然、その日の放課後、あたしはカフェバー『シャンテ』に向かった。

繁華街の一本裏手、夜はあまり使わない通りの角の店がそこだった。夕方でまだ暗くなる前だったのもあって、制服姿のあたしでもそんなに目立たない。

本宮が書いてくれた地図は正確で、あたしは迷いもせずに『シャンテ』の看板を見つけた。入口のドアだけで、中は見えない。外の明かりはまだ点いていない。

「……誰もいないのかな」

独り言を呟いて、店の前を通り過ぎる。角を曲がってちょっと立ち止まり、もう一度ゆっくりと店の様子をうかがうけれど、わからない。

「どうしよう……」

勢いで来ちゃったはいいけど、どうしよう。やっぱり着替えてくればよかったかな。店に入って若原のこと聞くにしても……コレじゃ、無理かも。

制服のスカートの裾をつまんでそんなことを考えてると、通りを行く中年男にじろじろ見られてあたしは慌てて角を曲がった先で壁にもたれかかる。はあ、と溜息をつくも中年男は無遠慮にあたしを観察し、そして足を止めると近寄ってきた。

「ねえ、誰か探してるの？」

ニツカリ笑う男に、あたしは「えっ、あ、はい……」と思わず頷く。

「そっかー」

男はそう言ってまたもあたしを頭のとっぺんからつま先までじろじろと見る。逃げ出そう、と思った瞬間、左手をぐいと掴まれた。「なにすんのよ……!」

「まあまあ、探してるんでしょ、お相手」

お相手って……ちよっと、何勘違いしてんのよこのオヤジ！

「違う！ 離してください！」

「だいじょーぶ、オレの店、けっこ健全よおー」

「違ったら！ 離してよ！」

ずるずる引きずられるように連れて行かれそうになったとき、すぐ傍の扉が開いた。

誰か――！

「……何してんの、女子コーサーに手出しちゃダメでしょーが」

扉から出てきた背の高い男の人があたしとオヤジを見るなり、呆れたように言った。

オヤジがぴたりと足を止め、あたしを掴んでた手から力が抜ける。急いで手を引っ込めると、あたしは二歩あとずさった。

そんなあたしの前に、すいっと男の人が入ってくれる。これで、オヤジが直接あたしに何かすることはない。

「コウダさーん、またもめちゃったらマズいでしょ？ ほら、行っ
た行った」

「違うってえー、オレはさあー、カノジョが誰か探してるって言う
から」

「ハイハイハイ、未成年に手出したらダメダメ」

男の人はオヤジをくると回れ右をさせてぽんと背中を押した。

オヤジはぶつぶつ言いながらも渋々歩いていく。あたしは男の人の背に隠れながら、ほっと息をついた。

12…夜はコーヒーの香り

「――で？ キミはどうしたのかな、こんなところで？」

くると振り返り、その人はあたしを見下ろす。……かなりの長身。あたしも女子にしてはデカイほうだけど、この人、百九十くらいあるんじゃないだろうか。

「あーいう輩もこのくらいの時間から増えてくるからねー、気を付けて帰って」

「あつ、あの、この店の人ですか」

角にある『シャンテ』、入口は向こうだけど、ここ、たぶん勝手口っぽい。さっきちらっと見た中は倉庫みたいだった。

「ウン、そーだけど……何？ バイト希望？」

にっこり笑って訊ねる彼に、あたしは思い切って聞いてみた。

「友達がここでバイトしてるって聞いて来たんです、けど……」

あたしの言葉に、彼はあたしの制服をざっと見た。そしてああ、と明るい顔で言った。

「希かな？」

「はい！ ……今、いますか？」

「いるよー。あー、あいつ今日サボったからお迎えにきてくれたのかな？ のっぞみー」

彼は勝手口らしき扉を開くとその中に向かって若原を呼び、「ついできて」とあたしを振り返った。

軽く会釈して、あたしは彼の後につく。暗い倉庫みたいな場所は野菜や缶詰やお酒の瓶が置いてあって、その棚をすり抜けると正面は調理場、右手が店内だった。彼は右手側の黒いカーテンを引いて、その中に「希！ 起きろオイ！」と言うとあたしに向き直り、

「そっち、どーぞ。もう店開けるから」

と言って店内の明かりをつけた。仄暗い店内がオレンジ色に染まる。カウンターと小さいテーブルが二組ほどの店内に足を踏み入れ

ると、あたしはカウンターの真中に座った。

「希く、起きねーとカワイイ女子高生、食っちゃうぞ」

「じよしこーせー……？」

寝ぼけた感じの若原の声が聞こえた。彼は調理場でなにやらカタカタやっていたけれど、すぐにコーヒーのいい香りがして、「ハイ」とカウンターにひとつ、置かれた。

「……何？」

「お迎えがきてるぞ」

楽しげな彼の声に、若原が訝しげに「うーん？」という声が聞こえてあたしはどきりとした。

そしてすぐ、若原が店の方へとひょいと顔を出す。

「あれ、なんだ、どしたんだよ。モリさーん、オレにもコーヒー」

白いシャツに黒いジーンズ姿の若原があっさりあたしを認めてそう言うのと、奥に向かってコーヒーを頼んだ。奥からは「自分でやれー」とさっきの男の人の返事。

あたしは目の前に出されてたコーヒーを差し出してカウンターの端に置くと、若原は「サンキュ」と呟いて立ったまま半分飲んだ。

「で？ どしたの？ こんなとこ来て」

眠そうに髪をかきあげる若原から、アルコールと煙草の匂いが僅かに香る。あたしがちよつと眉を寄せると、ちらつとあたしを見たものの、若原は気にせず残りのコーヒーを飲み干した。

「亮輔から聞いたの？ ココ」

「あ……うん、そう」

「んなカッコでよく来たな」

若原の視線があたしの制服に注がれる。あたしはさっきの不快なおヤジを思い出してますます眉根を寄せて「べつに……」と素っ気無く呟いた。

——違う違う、あたし、謝りに来たのに、若原に。

13…合わない視線

若原と、目が合わない。声は普通だけど、いつもの楽しげな若原じゃない。

「んで、何？」

「今日、学校来なかったから……」

若原の様子がいつもと違うことが、があたしの言葉を押しとどめていた。そして――まだ、あたしをまっすぐに見てくれない。

「たいしたことじゃないっしょ、サボるのなんて」

「そー、だけど」

若原が調理場のほうへ顔を上げると、「モリさーん」とさっきの人を呼んだ。

「店開けとくよー？」

「ほーい」

『モリさん』の声が奥から聞こえて、若原はそのまま店の入口の鍵を外して外の明かりをつける。その背中へ、あたしは勇気を出して呼びかけた。

「若原、あたし、昨日、言い過ぎた。ごめんね」

一気に言うと、若原はそのまま入口でかちゃかちゃと何か作業を続けている。あたしに背中を向けたままだ。反応が怖くて、あたしはその背中を見ていられない。

「あの……」

「昨日って何のこと？」

若原の声が、いつもみたいに軽くそう返ってきた。俯いてあたしが顔を上げると、若原はくりりと振り返ってあたしの傍を通り抜け、空いたカップを手には調理場へ向かってく。

目は、合わない。

「昨日、あの……」

「オレ物覚え悪いからさ」

かちやかちやと奥で食器の音がする。会話にはなってるけど、若原の声は軽いけど……なんでだろう、なんだか違う。

「若原、あたし——」

「希」

カウンターから乗り出すようにして呼んだあたしの声に、後ろから他の女の子の声が重なって、あたしはびっくりして振り返った。

さっき若原が鍵を開けてた入口から入ったらしいその子は、どこかで見たことがある。たぶん、同じ学校の子。名前は、ええと……その子はあたしを見て——いや、正確にはあたしの制服を見てちよっと眼を瞞ったけど、じろりと一瞥だけ寄越すとフイと顔を背けた。

「ハイ、これ」

いつのまにか若原がカウンターまで出てきていて、その子からなにやら受けとると「サンキュ」と笑った。その笑顔はいつもの若原だったけれど——あたしには、さっきから一度も向けられていない。つい二人を見つめていたあたしに、女の子が振り返ってきくと睨んだ。

「帰ったら？ そんな格好でこのあたりうろついてて、先生にでも見つかったら困るから——希が」

最後、若原の名前のところをまるで念を押すようにゆっくりと、はっきりと発音した彼女の口調は明らかに攻撃的だった。

「雪緒」

若原の低い声が、たしなめるように彼女の名前を呼ぶ。そしてやっとなあたしは思い出す。

そうだ、A組の内沢さん。内沢雪緒。若原とよく一緒にいるよねって、亜矢が言ってた。あたしもそれはそう思ってた。付き合ってるんじゃないかって噂も、あったっけ。

若原はあたしを見ずに、そのまま奥へ入ってしまう。内沢さんの冷たい視線がまだあたしを見てるのが、わかる。そのままくると踵を返してそこから駆け出す以外、あたしには選択肢がなかった。

14…ホワイト・ゴールドの誓い

あたしは、憂鬱な気持ちでいた。『シャンテ』に行った翌日、若原は何でもない顔で登校してきてあたしにもいつもどおり、

「オハヨー、オレがいなくて淋しかった？」

などとおどけていて、結局ちゃんと若原と話す間もなく日常に戻っていた。

そんな中で、本宮のカバンからときどきあたしがあげた銀色が覗くのがわかって、あたしはちょっとどきりとしつつも嬉しくそれを感じていた。亜矢になんて言ったのかは気になるけど、亜矢からあたしは何も聞いていない。

「結ちゃん？ どうしたの、なんかコワイ顔してる」

亜矢がチーズケーキを食べ終わってきょとんとあたしを見ていた。

「ケーキも食べないし。もらっちゃうぞ？」

亜矢の指差す先はあたしが注文したガトーショコラで、まだ最初の一口しか手をつけていない。

「……ビターチョコ、食べられないでしょ、亜矢ちゃん」

無理矢理笑顔を作ってそう言うと、亜矢はぷくつと頬を膨らませる。

「結ちゃんてホント意地悪」

「愛のムチって言って」

そうやり過ぎして、あたしは平然な顔を意識して作りながらケーキを口に運ぶ。

まさか……亜矢に相談出来ないしなあ。亜矢はいい子だし、話せばきちんと聞いてくれるのもわかってる。

けど、今回のことを相談するならあたしが本宮にプレゼントしたことも言わなきゃいけないし、それを若原にからかわれてどうしてそんなにムキになったのかも——説明しなきゃ、ならない。本宮の彼女に。亜矢に。

もしかしたら、普通に最初から話せば亜矢はあっけらかんと聞いてくれるかもしれないけど、時間が経った今ではもう遅いだろう。

「でねー、亮くんたらコレ買ってくれたの！ 亮くんの誕生日なんだからって何度も言ったんだけど、そしたら俺が欲しいものはコレだって。ふふっ」

亜矢が左手を広げる。薬指の輪が銀色に光る。わかってる、ホワイト・ゴールド。

「ホントはシルバーで探してたんだけどお、ペアだとなかなかいいのなくて。そしたら亮くんが『こういうのが亜矢には似合うんじゃない？』って見つけてくれたのがコレ」

この話、実は二回目だったことにきつと亜矢も気づいてる。幸せな話は何度喋っても溢れるようにうまれるものだ。

「ピンクサファイヤなんだって！ 幸運のクローバー型、今人気なの」

ペアリングのレデイスの方にだけ、小さなピンクの石が嵌っているのも何度も見た。今日みたいな休みの日には左手薬指に、学校では右手かもしくはポケットにあるその小さな指輪は、お揃いの柄で本宮の制服のポケットにも入っている。珍しいことじゃない、亜矢がペアリングの片割れを嵌めているのは今までに幾つか見ているし。

けれど――こんなに憂鬱な気分なのは何故だろう。亜矢がニコニコと幸せに笑ってくれることは嬉しい。あたしだって亜矢が好きだし、友達に幸せでいて欲しいと思うのは当然だ。それならこの浮かない気分は、亜矢の相手が本宮だから？

二人が付き合うことになったとき、あたしはやっぱりいろいろ考えた。本当に亜矢を祝福できるか、親友の彼氏として今までどおり本宮と友達付き合いが出来るだろうか。それを考えた末、あたしはずっと亜矢の親友でいることを選んだ……つもり。

なのに、なんだろう、この重い気持ち。

「ねえ、結ちゃん？ 聞いているー？」

「あ……ああ、うん。なんだっけ？」

亜矢の声に不満が混じる。今までも散々歴代彼氏のお惚気は聞かされてきたし慣れてると思ってたのに……なんだろう、やっぱり相手が本宮だからなの、かな。

「結ちゃんてば！」

右手からフォークが奪われ、あたしははっとして視線を亜矢に戻して「うん」と生返事を返す。亜矢は拗ねた子供のようにな目遣いであたしを見上げ、フォークをガトーシヨコラの一片に刺して口へ運んだ。

「……甘くない」

「だから言ったでしょ、ビターだって」

「結ちゃん、何かあったの？ 今日ホントなんかおかしいよ？」

「亜矢に言われたくないなァ」

「ひっどーい！」

拗ねていたほっぺたが膨れて、わかりやすく亜矢が怒りモードになる。彼氏にだけじゃなくて亜矢はあたしにもそんな風に甘えたりする。

「ヘンな結ちゃん。ここんとこ特にそうだよねー」

ビターなシヨコラに懲りたのか、今度はアップルティーをくるくるとかき混ぜながら亜矢があたしを見つつそう呟いた。

あたしがそれに対してうまい返し方を探していると、その前に亜矢がなんとなく……言った。

「もしかして結ちゃんさー、亮くんが好きだったりして？」

一瞬、カッと身体が熱くなったような気がした。その熱が顔に出てたかもしれない、と思った。

『やーだ、何言ってるの亜矢ったら。本宮はあんたの彼氏でしょ』あたしの頭の中には、いつもの口調で言うべきそんな台詞が用意されている。そのとおりに口にすればいい。笑いながらそう言ってる、そんなこと言っていると取っちゃうんだから、ってふざけて言えはい。

なのに。なのに。

あたしは圧倒的に言葉が足りていない。若原のときにそれは痛感したはずだった。ちゃんと言えばよかった、なんで言えなかったんだろうって。

なのに。

あたし……否定出来なかった。亜矢にああ言われてすぐに、「そんなことない！」って大声で言えなかった。むしろあたし、言っちゃいたかった。亜矢が本宮を好きになるよりずっとずっと前から、あたしは本宮が好きなんだって。亜矢にだって取られたくなかったって、言っちゃいたかった。

あたしはうまく顔を作れず、お茶代だけ置いて逃げるようにそこから帰っただけだった。亜矢が心配そうに何度も覗き込むのから、目を逸らしつつけて。

15..素直さが足りない

足が重い。当然だ、昨日あんな風に亜矢の前から逃げ帰って、あたしは結局逃げてるばかりだった。

今日亜矢に会って、ちゃんと謝らないと。気持ちちはちゃんと言葉にして伝えないと、いけない。はあ、ともうひとつ溜息をつくともう昇降口だ。

「結ちゃん、おはよっ！」

いつもどおりの声、いつもどおりの亜矢。ぶんぶんと手を振って駆けてきた亜矢はあたしの隣で靴を履き替える。

「結ちゃん、昨日ごめんね」

おはよう、と返事をする前に亜矢がちよつと低い声でそう言った。咄嗟に亜矢を見ると、ちよつと照れくさそうに笑う。

「あたし、嬉しくって何度も結ちゃんに同じ話してたよね。ホントごめんね」

ぱん、と目の前で両手を合わせると、亜矢はペコリと頭を下げた。例えばあたしが亜矢に敵わないと思うのはこういうところもだ、と思う。顔のつくりや身体をつくりは仕方ないにしても、亜矢は素直だ。嬉しかったら笑うし、淋しかったらきちんと淋しいと言う。喧嘩しても、自分が悪いと思えばこうやってまっすぐ謝れる子だ。

あたしは——こんな風には言えない。謝ったとしても今の亜矢みたいに会うなりすぐに自分の悪かった点を挙げて頭を下げるなんて、出来ない。

「ううん、いいの。昨日はあたしが悪かった」

やつとでそれだけ言える。亜矢がぱつと頭をあげて、嬉しそうに微笑むのを見て、あたしは勇気を奮い立たせた。

「ごめんね、亜矢」

たった一言のその言葉が、あたしにはとても重くて堅かった。ぎこちなかっただろうとは思うけれど、あたしは真正面から亜矢に謝

罪の言葉を告げたのは、もしかしたらこれが初めてだったかもしれない。

「ありがとう結ちゃん！ だからあたし、結ちゃん大好き！」

腕を絡めながら満面の笑みを浮かべてそんな台詞をさらりと言うのは、まだ追いつけない。亜矢のことは好きだしいい子だと思ってるけど――そこまで素直な台詞は、あたしにはまだ無理だった。

教室に入っても、亜矢はぱっとかばんだけ自分の席に置くとあたしの傍に駆け寄ってきて「あのね」と耳元で囁く。

「希くんがね、今度皆で遊びに行かないかって」「皆？」

「うん。希くん、中学の友達を結ちゃんに紹介したいんだって。どうかな？」

「ふうん……」

亜矢の屈託のない聞き方は、亜矢が素直だからだ。もし同じ話を若原から持ち込まれたらあたしは、それってつまり、と若原を追及したくなるだろう。

ホント、お節介なんだから。それにこんな話、亜矢からされたら断る理由が思いつかない。

「まあ、いいけど」

「ホント？ やったあ！ ねね、この日とこの日、どっちが都合いい？」

早速手帳を取り出して日付を示す亜矢に、あたしは苦笑しながら自分のスケジュールを思い浮かべた。

16：いいひと

善は急げとばかりに亜矢が張り切って、次の土曜日の朝十時に遊園地前の時計塔で待ち合わせになった。亜矢が終始はしゃいでいてくれたおかげで、あたしはちょっと気が楽だった。

そして若原の友人だという彼——倉橋くんは人懐っこい、人に気を遣わせないタイプだったのが幸いで、あたしは一時期ぎくしゃくした若原とのやりとりを気にせず以前のように会話に入っていくことが出来た。

「ねえ、倉橋くんて下の名前、なんていうの？」

初対面でも臆することなく亜矢が話し掛け、倉橋くんはちよつと恥ずかしそうに亜矢に答える。

「和馬です。倉橋和馬。みんな苗字で呼ぶけどね」

「じゃああたし、和馬くんて呼ぶことにするー」

屈託なく亜矢が笑顔で言うと、若原が倉橋くんの首に腕をかけて締める真似をする。

「倉橋ー、亜矢ちゃんに惚れると後が怖いぜー？」

「ん、俺も命は惜しい」

軽く肩を竦めてそう言って笑った倉橋くんは、本宮が焦ったように言う。

「希、余計なこと言うなって」

「コワイ、亮輔、睨まないでー」

「俺、さっきもう睨まれたし」

「そ、そんなことないって！」

本宮は何度か会ったことがあるらしくて、男子三人はすっかり昔からの友達みたいに騒いでいた。

倉橋くんは本宮よりちよつと背が高くですらりとしている。若原と同じバスケット出身で、今は梨木西高校でバスケットをやってるそう。……若原が部活って、あんまりイメージないけど。

そう言うと、倉橋くんはおかしそうに笑った。

「中学のときは若原、結構真面目だったんだ。俺、朝練もよく相手してもらったしさ」

「へえ、意外！ 若原って女の子だけじゃなくてバスケットも好きだったんだー」

「ちよっと何、その間違った印象！」

前を歩いてた若原がくると振り返ってあたしを見た。

「いや、女の子も好きだったよ、あの頃から」

「倉橋、よけーな言うな、よけーなことを！」

若原の抗議に、倉橋くんはくすくす笑いながら「ごめんごめん」と言うと、前に向き直った若原に聞こえないようにあたしの耳元で「ホントのことだけどね」と付け加える。

遊園地は久しぶりで、あたしはすっかりリフレッシュした気分だった。勿論、時々亜矢と本宮のカップルにドキッとさせられることはあるけれど……それはもう仕方がないことだとわかっていたし、今更だもの、特に辛くなったということもない。

それよりどちらかといえば、若原といつもどおり話せたことの方が今のあたしにとってはありがたかった。倉橋くんが溶け込めるように気を遣ってるんだと思うけど……それでも、前と同じように軽いやり取りが出来るようになったのはありがたかった。

夕方、そろそろどこかに食事に行こうかという話になったときにひょいと若原があたしの隣に来てニッコリ笑った。あたしも笑顔を返すと、若原はひょいと耳元に顔を寄せて囁いた。

「どう？ まだあんまそんな気になんない？」

亜矢たちは何を食べようかと言い合っていて、三人とも聞こえていないようだった。

あたしはじろりと若原を睨んで、「別に」と素っ気無く返す。若原はもっと声を低くして、続けて言った。

「亮輔のこと、諦めらんない？」

「な……！」

あたしがカツとして若原を振り仰ぐと、ヤツはニツと笑って

「かーわいいね、ゆーこちゃん」

「若原っ、あんたねえ……！」

大声で怒鳴りつけたいのをぐっと我慢して押し殺した声で言いながら叩こうとするあたしの手をさっと避けて、若原はちよつとだけ笑みを引っ込めた。真面目な顔。

「倉橋、いいヤツだからさ」

ちらり、視線を倉橋くんへ。亜矢と本宮と、三人であれこれと言いつ合っている楽しそうな横顔の倉橋くんは、若原に念を押されなくてもわかる。すごく、いい人だ。

「ん……」

ちよつと穏やかな気分になって小さく頷くと、若原は「でもさー」といつもの声音に戻して、続けた。

「オレのほうがいいヤツだけどねー」

「……自分で言う？ ふっー」

あたしは呆れ顔で若原にそう返すと「で、何食べるってー？」と亜矢たちの話の輪に入った。

「オレ、無視かよっ」

置いてけぼりにされた若原がくさってそう言っていると、がっくりうな垂れる。それを見てあたしたちは顔を見合わせ、声をそろえて笑った。

17…純情なわけじゃないけど

すぐに、夏休みになった。とはいえあたしは、週の半分は部活で学校に行っている。

たぶん本宮もそうだと思うけど、テニスコートと弓道場じゃほとんど見かけることはない。亜矢と若原はバイトかデートだと思う。亜矢からは時々写メつきのメールが来る。今日は本宮とちよつと遠出して日帰り旅行だそうだ。

あの日若原に本宮のことを聞かれて、一瞬詰まったけれど……でも、あたしは亜矢と本宮が付き合い始めた頃からちゃんとわかってるつもり、だ。亜矢から本宮を奪おうなんて思ったこと無いし、それにずっと本宮を見てればわかる。どんなに亜矢のことが好きで、亜矢のことを大事にしているかなんて。

それにあたしにとって亜矢は、大事な友達だから。

あの遊園地の日にアドレスを交換した倉橋くんからすぐメールが来て、その後はほぼ毎日メールのやりとりをしてる。先週は初めて電話をくれて、今日はこのあたりで一番大きなショッピング・モールで待合せ、ゆっくりめのランチをしてから映画を観て来たところだった。

若原が言うように確かにいい人だし、もしかしたらあたしの気持ちにはゆっくり動いていくかもしれない、と思えてきてる。別に無理矢理じゃなくて、あくまでも自然に。

「この五階にさ、穴場のベンチがあるんだ。夕日が綺麗に見えるよ」

映画のあとでお喋りをしながらウィンドウショッピングをしていて、ちよつと疲れたかなってこういういいタイミングで倉橋くんがエスカレータを指す。

「ホントは外の方がいい場所あるんだけど、この時期は暑いからね」苦笑する倉橋くんに、「確かに、暑そうだね」とあたしも笑顔で

返す。

五階フロアの中央部分、少しへこんだ場所に確かにベンチがあった。店内とはついたてで区切られているけれどちゃんと空調が効いていて涼しいし、夏休みの時期で人出は多いけれど、穴場というだけあってここは空いていた。

目の前の大きな窓からは沈みかけた夕日が見えている。

「いいねここ、確かに穴場っぽい」

「でしょ？　ちよつと休憩休憩」

倉橋くんがさも疲れたというようにどさりとベンチに腰掛ける。

……でもたぶん、あたしが疲れたんじゃないかって気を遣ってくれてるんだろうな。倉橋くんはそんなところがちよつと透けて見える、本当にいい人だ。

あたしはくすくす笑いながらその隣に腰掛け、オレンジ色の空を眺めて目を細めた。

亜矢たちは海へ行くんだって言ってたっけ。ビーチの日没はもつと綺麗だろうな。そういえば海に日が沈んでいくところなんて、もう何年も見ていない。

「あ、髪に羽根、ついてる」

ふと、そう言われてあたしは一瞬聞き取れず「え」と隣を見上げる。ぼんやりとしてたのは――亜矢たちのことをついつい考えてたから。

一瞬置いて、倉橋くんの声がもう一度頭の中に響いた。彼の視線があたしの右耳あたりに固定され、そう言いながら彼は長身をかがめるようにしてひよいとあたしを覗き込む。

その意外な近さに思わずどきりとして――声が掠れた。

「え、あ……」

そういえばさっき幾つかの帽子を試着したのを思い出して、あたしは慌てて自分で取ろうと手を動かすも

「待って、目閉じて」

と言われて反射的に「ハイ」と返事をする目目を閉じた。

右頬にさらりと空気が動くのを感じる。髪が指で梳かれて落ちて、頬に触れた。

「はい、取れました」

その声に目を開けると、倉橋くんがニツコリと笑っていた。

「あ……りがとう」

あたしも笑顔で返すと、倉橋くんの笑顔がちよつときこちなく一瞬止まって、そしてふとまた、その上半身をかがめる。

え、と思った瞬間に倉橋くんの右手がそつとあたしの左頬に触れた。

手が、熱い。そう感じた次の瞬間、近づいた倉橋くんの動きにやつとぴんと来た。あたしが反射的に身体を硬くすると、頬に触れていた手にぐつと力がこもり、距離が縮まる。

「……やつ……！」

咄嗟に顔を背けて倉橋くんの胸を押し返した。唇が、微かに触れたような気がする。

あたしは顔を背けたまま立ち上がる。倉橋くんがはつとして、焦った声であたしの名前を呼んだけれど、振り返らなかった。

あたしはこここのところ誰かから逃げ帰ってばかりだ、と階段を駆け下りながら思った。若原からも、亜矢からも、倉橋くんからも。

涙で視界がぼやけてくることよりも、泣き顔を見られたくなくてあたしは俯いたまま人の多いショッピングモールを駆け抜けた。

18…不機嫌の理由

駆け出してすぐ、ケータイがうるさく鳴り始めたのが追われているように感じられて怖くて、あたしはそのまま電源を切った。誰からかはわかってる。

まっすぐ家に帰る気にもなれなくて、あたしはしばらく繁華街をぶらぶらと歩いていた。小一時間もするとだいぶ頭も冷えてきて、少しずつ冷静に考える。

……逃げてこなくても良かった、かな。でもあのとき、咄嗟に本宮の顔が頭に浮かんだ。嫌だ、と思った。

はぁ、と溜息をもうひとつ。あたしやっぱり、まだ本宮が好きなんだなあ。倉橋くんは悪い人じゃないしもしかしたらこれから好きになれるのかもしれないけど……でもちょっと今は、まだ、難しい。なんだか、うまくいかないなあ。

本宮のことはそりゃ好きだけど、本宮は亜矢が好きなのだから……諦めるって言い方はまたちょっと違うけど、あたしはその気持ちに蓋をしてきた。見ないようにしてれば、いつか本宮と友達になれて、そして他に誰か好きになれる人が出来るかも知れない。そんな日をのんびり待つつもりだったのに。こうやって時々かき回しちゃったりすると、なかなか忘れることなんて出来ない。

歩き回るのに疲れたあたしは適当にファストフード店に入る。アイスコーヒーを一気に半分飲み干すと、安堵の溜息をついた。

かばんからケータイを取り出すと、恐る恐る電源を入れる。暗い液晶がゆっくりと光を取り戻し、そして通信中の青いランプがぴかぴか光って、消えた。

来ていたメールは三通。最初のメールはあのとすぐだった。倉橋くんから謝罪と今どこにいろの？の伺い。二通目はそれから四十分後、もう一度謝罪のメールと、夜に電話する、の文字。

あたしは返信ボタンを押さずに最後のメールを開いた。綺麗な夕

日が映っていた。海に沈んでいくオレンジ色の夕日。

『すっごくすっごく綺麗でしょ！ 今日のは楽しかったあー、今度みんなでも来たいな☆』

お土産買ったから、楽しみにしててね！ 追伸・結ちゃんの

デート報告も待ってるよ♪』

亜矢からだった。楽しそうな文面に嫉妬がひとつも無いといえは嘘だけれど、でも、本宮が亜矢という幸せなのはわかってるから、それでいい。

あたしはちょっと笑みを浮かべて楽しげなメールに返信を簡単に打ってケータイを閉じた。その閉じた瞬間、手の中でブルルと震える。着信のランプが光る。

恐る恐るケータイを開くと予想外に若原の名前が見え、あたしはほっとして通話ボタンを押した。

「もしもし」

『ゆーちゃん？ 今どこ？』

「は？ どこって……どうしたの？」

『いーから。今どこにいの？』

若原の声が低い。なんだかぶっきらぼうな感じがして、あたしはちよっと黙ったあとで思い切って聞いてみた。

「なんか……怒ってるの？」

『いーまーどーこ。返事ないから怒ってる』

若原はあからさまに不快そうな声でそう言って、もう一度場所を訊ねた。よくわからないまま、あたしは反射的に店名と場所を答える。

『んー……二十分で着くから、待ってる』

「え？ あー、うん……」

『じゃな』

ツーツーと無機質な音のするケータイをしばらくぽかんと見ていたあたしは、頭の中を整理し始める。

……若原、どうしたんだろう。あんな不機嫌なのって『シャンテ』

のとき以来。あのときのこと、やっぱりまだ怒ってたりするのかなあ。でもこの間はふつーだったのに？

若原ってなんか、よくわかんない。いつものおちゃらけてる若原がホントなのか、『シャンテ』の不機嫌そうな若原がホントなのか――

新しいアイスコーヒーを買ってカウンター席に戻ると、後ろからきた人が無言であたしの隣に腰掛けた。

一瞬、空いてるのになんでき？と思ったあたしが訝しげな視線を送ったその横顔は、頬杖についてあからさまに不機嫌だった。

「若原？ どしたの？」

「……べつに」

「なんか飲む？」

「いらない」

あたしは瞬きを繰り返しながら隣に座ると、アイスコーヒーのストローをくるくると回す。なんかよくわからないけど、不機嫌は不機嫌らしい。

カウンターのテーブルに置いておいたケータイが、ブルルとまた鳴った。着信の赤ランプ。閉じても見えるサブディスプレイには――倉橋くんの名前。

どうしよう、と一瞬迷ったあたしの目の前で若原はケータイを掴み、突然電源ボタンを長押しする。電源が落ちて、ぷつと液晶が消えた。

「……あのさ」

前髪をかきあげながら、若原が初めてあたしをちらと見た。眉のあたりが不機嫌そうに曲がっている。

「な、に？」

静になったケータイをあたしにぐいと返しながら目を逸らし、若原は盛んに髪をかきあげる。あ、もしかして、苛ついてるときの癖なのかな。

茶色に染められた髪はくしゃくしゃになって、それでもまだわし

わしと乱されている。

「どうしたの？ 女の子と喧嘩でもした？」

こんなにあからさまに不機嫌な若原は初めてで——『シャンテ』のときは一見いつもどおりだったけど目が合わなかったり笑ってなかったりだったから、あたしはおずおずとそう訊ねた。

「女の子とじゃねーよ」

「女の子じゃない……？ 誰と？」

テーブルについた腕に顎を乗せた体勢で、正面を向いたまま若原がそう答えた。それきり黙ってしまった若原の横顔を、じっと見つめる。

あたし、こんな風にちゃんと若原を見たこと無かったけど……まっげ、長いんだなあ。カッコいいよね、って亜矢がよく言ってたけど、カッコいいというよりきれいな顔立ちなのかも。

「……倉橋」

若原からぼつりとその名前がこぼれて、あたしは一瞬身を硬くした。ドキんと、心臓が跳ねる。もしかしてさっきのことを聞いたのかも——いや、たぶん確実に聞いたんだろう。

あたしは自分で自分を抱きしめるようにしたまま、細い声で答えた。

「え……なんで」

なんで、とは言ったものの語尾は下がっていて、本当にその理由が聞きたいわけじゃなかった。

ふうん、とでも相槌を打てば良かったとすぐに後悔する。けれど、若原からは次の言葉が返ってこない。ちらっと見ても、同じ体勢のままきゅっと唇を引き結んでじっとしているだけだった。

あたしがどう対応することも出来ずにただじっと若原を見ている視線に気づいたのか、若原はつとあたしを見た。

「ゆーこちゃんさ……」

「え？」

真顔で名前を呼ばれて、ちよつとドキリとしてあたしはふいと目

を逸らす。しばらくあたしをじーつと見ていた若原は、ふうつと溜息をついた。

「オレ、腹減った」

「はあ？」

「なんか食った？ 食ってねーよな、なんか食いに行こーぜ」

その言い方はいつもどおりの若原で、表情も、ちよつと渋い顔はしてるけどいつものだ。あたしはその声音にちよつとほつとして、僅かに笑って答える。

「いいけど……」

「んじゃ決まり！ ホラ」

席を立った若原があたしの腕をぐいと引いて立たせると、店の外へと引っ張った。

「オレ、プリン食いたい」

「プリンで！ ごはんじゃないの？」

「プリンはオレの主食だもーん」

そうやって笑う笑顔は、いつもと同じだった。あたしはそんな若原に、それ以上何かを聞けるはずも無かった。

19：ごめんなさい

亜矢との待ち合わせは、待っても苦痛にならない場所ですべし、というのがあたしの持論だ。半々の確率で亜矢は間に合うか大幅に遅れるかのどちらかだから。あたしは大抵、ファストフードかもしれない本屋で亜矢を待つことが多かった。

今日は、待ち合わせ時間の五分前に亜矢から遅れますメールが入ったので、のんびり喫茶店でロイヤルミルクティー。

カップの半分まで減ったところで亜矢からまたメールが来て、「あと十分！」だそうだ。くすくす笑いながら返信を打ったあたしが、ケータイを閉じようとしてふと、手を止める。

倉橋くんからあのあと、メールがいくつか来ていた。ごめんね、と繰り返される謝罪と、電話に出てもらえるか、という内容と。

若原があんな風に電話を切ってからは、あたしが相当怒ってると思ってるのか電話は無い。あたしにとってはそれがありがたかった。メールはまだ、返事をしていない。なんて返せばいいのかあたし自身もよくわからない。怒ってるわけじゃないし、許せないってほどでもない。でもなんだか、腰が重くなった感じになっちゃってる。電話で話をしたってたぶん、相槌程度しか返せない。

「ごつめーん、なんだか今日は髪がうまくまとまらないの〜」

亜矢が喫茶店に飛び込んで来ると開口一番にそう言い、あたしの憂鬱な思いを吹っ飛ばす。向かいに座ってメニユーも開かずにかフェオレを注文すると、くいっと髪を引っ張ってあたしの方へ身を乗り出す。

「ね、ココがハネちゃってるの。もー切っちゃおうかと思った〜」

「ハイハイ、髪の毛のせいになーいの」

「だあってえー」

ぷっと膨れてみせるのも数秒で、亜矢はすぐにバッグをごそごそと何かを探し始めた。

「ねね、お土産買ってきたの！」

はい、と満面の笑顔で小さな紙袋を渡された。右上に、亜矢の字で『結ちゃん』と書いてある。……ハートマークつきで。

「ありがとう、なあに？」

「開けてみてみて！」

嬉しそうな亜矢の勧めに従って紙袋を開けると、白い組紐に貝殻とイルカ型の水晶、そして白いパールが幾つかぶら下がっているストラップだった。光を透かして、透明な水晶がきらきらと光る。

「へえ、亜矢にしてはセンスいいね」

発した言葉は半分からかいだったけれど半分は本心だ。亜矢の選ぶものはラブリで可愛いものが多くて、こんな風にシンプルできれいなのは珍しい。――あ、もしかして。

「本宮と選んだの？」

「そう！　ホラホラ、見て！」

やっぱり、とあたしがストラップを見て納得していると、亜矢は次に自分のピンクのケータイを取り出した。じやらりと幾つかくつついたストラップの中に、それと同じデザインの貝殻とイルカ、そしてピンクパールが見える。

「結ちゃんが白ね。で、あたしがピンク。亮くんがブラックパールなの」

「へえ」

亜矢とだけじゃなくて、本宮とも色違いってことにあたしはちょっとぎくしゃくと笑った。けれど次の亜矢の台詞で、そんなぎこちなさはすっかり消える。

「でね、これは、和馬くんの分！　結ちゃんから渡してくれる？　ウインクつきの悪戯っぽい笑顔で亜矢がもうひとつ、さっきと同じ紙袋をくれる。亜矢の字で書かれた倉橋くんの名前を見て、あたしは一瞬硬直した。

「和馬くんのはね、グリーンにしたの！」

亜矢の屈託の無い笑顔につられるようにあたしも笑って、「そう

なんだー」と相槌を打つ。差し出された紙袋を機械的に受け取って、どうしようか迷う。

「それとね、希くんがイエロー。ふふっ、なんかイメージ合ってるでしょ？」

確かに、倉橋くんの緑と若原の黄色は雰囲気合ってる……と思う。ついでに言えば亜矢のピンクと本宮の黒も。……っていうことは、あたしの白もそうなのかな。白いイメージ？

「結ちゃんのはねーえ、あたしは赤かオレンジって言ったんだけど、亮くんがね、結ちゃんは白だろうってさ。どお？ 気に入ってくれた？」

「うん、ありがとう」

あたしは早速自分のケータイを取り出してストラップをつける。揺れるパールを亜矢がつまんで、満足そうに笑った。

その日は結局亜矢の「ブーツ見たい！」に付き合ってたちこち見て周り、まだ真夏だって言うのに秋物が並ぶ靴屋で亜矢は結局白いショートブーツを買った。

そのあとで本屋に亜矢をつき合わせ、好きな作家の最新刊を買って女性誌コーナーの亜矢のところに戻ると、亜矢はコーナーから外れた場所でケータイで話している。にこにこ顔から察すれば、相手は聞かなくてもわかる。本宮だろう。

亜矢はあたしに気づくと電話口を押さえて訊ねた。

「あのね、今亮くんから電話があってね。希くんとかこの下のフロアに来てるんだって！ 一緒にお昼食べようって、どう？」

「んー、奢りならいいよ」

「んもう、結ちゃんったら！」

ピンクパールのストラップを揺らしながら、亜矢がケータイを持ち替えて電話を再開し、上のレストランフロアで待合せをする段取りをつけると、パタンとケータイを閉じた。

本宮と若原と合流して最近評判の Pasta 屋さんで遅めのランチを取ったあと、あたしたちはぶらぶらとショッピングセンターをうろ

ついていた。

ぶらっと立ち寄ったゲームセンターで、亜矢がお気に入りぬいぐるみの入ったUFOキャッチャーに夢中になってるのを本宮に任せて端のベンチで休憩していると、若原が「よ」と近づいてくる。あたしの座っているベンチの背にもたれかかるようにして、若原はぼそりとぼやいた。

「あいつら元気だよなー」

「若いんだよ、きっと」

「……オレ、まだ誕生日来てないんだけど？」

じろっとあたしを睨む若原ににんまり笑って、「気が若いんじゃない？」と返してやると、若原は大げさに溜息をついた。そして何気なくポケットからケータイを取り出すと……若原の、イエローパールが見えた。

「若原、黄色可愛いね」

手を伸ばして触れる。きんきらきんな黄色じゃなくて落ち着いた色で、若原の雰囲気合っていた。黒いケータイとのコントラストも悪くない。

「ゆーこちゃんは何色だった？」

「あたし？ 白だよー、ほら」

ダークレッドのケータイに、白いパールが揺れる。若原が自分のケータイをこつんとそれに当てて、「おっそろしい」とおどけて見せた。

そして唐突に、ホントに唐突に、若原が言った。目線は自分のケータイの画面のままで。

「倉橋から、なんか言ってきた？」

あたしは咄嗟には答えられず、若原を見上げた。端正な横顔の、口許はいつものように笑っている。

「あ……うん、まあ……」

曖昧な返事と一緒に、あたしは視線を泳がせる。

「何だその返事。しゃっきりする！」

目が合うと、若原はニツコリ笑う。あたしが笑えてないと、右手でそっと左の頬を包んだ。

「オツケ？」

たとえばあるとき、倉橋くんにそうされてあたしが感じたのは本宮への自分の思い。どきりとして、そして怖かった。

でも今若原にそうされて、怖いとは感じなかった。守られているような安心感。それはたぶん、倉橋くんにはあった下心が、若原に無いからだ——あたしは思っ、て、「うん」と小さく笑った。

20…登校日

部活をやっていると学校に行くのがそんなに苦じゃないけど……亜矢は朝からぶーたれていた。朝起きるのが辛いとか、学校暑いとか、文句タラタラだ。とはいえ、一週間ぶりの友達と会うのは新鮮らしくて、お喋りには余念が無い。

集会の後の短いホームルームが終わると、皆一様に帰っていく。今日は部活もない。亜矢は早々に本宮と一緒に帰っていった。あたしは――このあとの待ち合わせまでもう少し、学校で時間をつぶすつもりだった。

あの日の夜、あたしは初めて倉橋くんにメールをした。

返事が遅れたことを謝って、もう気にしていないからという文章をメールすると、倉橋くんからはすぐに返事が来て、お礼と、それから出来れば会って謝りたいんだけど……という礼儀正しい申し出がくっついてきた。今度の登校日にでもという申し出を了解して、今日の約束になっている。

――気が、重くないとは言わない。でもきつと、倉橋くんの方が重いはず。だから今日は、ちゃんと話をしようと思ってる。

はぁ、と何度めかの溜息がこぼれる。憂鬱な気分は仕方ないにしても、彼の前でこんな顔は出来ない。学校を出る頃にはしゃっきりしないと。

「なーに、これから告白でもしに行くの？」

いきなり近くでそんな声がして、あたしはびくりと飛び上がった。「思いつめた顔しちゃって」

若原が、いつものカルい感じで言うのへ、あたしは「ち、がうよ！」と反論したものの、情けない声になった。

「そんなワケないでしょ、バカ。バカ原」

「うわぁ、低次元なけなし方」

若原は大笑いしながらそう言うと、ぽんっとあたしの頭に手をの

せた。軽く数回叩きながら「よしよし」と笑う。

「――希」

「お、お迎えだわ」

女の子の声に若原はちよつと肩を竦めると、「んじゃな!」と右手を上げて女の子――内沢さんへと歩み寄る。二人の話し声と一緒に足音が廊下の向こうへ消えていったと思うと突然扉ががらりと開いて、あたしは無意識にそっちを見た。

内沢さんはきゅつと唇を引き結んだままつかつかとあたしの傍に早足で近づいてくると、あたしの真正面でぴたりと止まる。

「希が優しくするのは、あんたにだけじゃないのよ」

低く押さえられた声音と、あたしを見下ろす目に怒りが見える。あたしは何度か瞬きを繰り返した。きっと阿呆みたいにぼかんとしているんだろうと思う。言われたことを咀嚼するより前に、内沢さんはなお続ける。

「誰にでも優しいの。希はそういう人なんだから、図に乗らないでよね!」

捨て台詞のようにそう言うと、内沢さんはくると身を翻して教室を出て行き、二度と振り返らなかった。

待合せは、裏通りの小さな紅茶専門店だった。倉橋くんがメールで教えてくれた道順は正確で、あたしは時間の二十分も前に着いてしまったけれど……明るい店内で紅茶を楽しむのも悪くない、と待つことにした。

アイスのロイヤルミルクティを注文して何気なくケータイを取り出してテーブルの上に置く。ちゃらりとストラップが微かな音を立て、あたしは白いパールを見つめた。

……内沢さんはたぶん、若原が好きなんだろう。ま、付き合ってるんじゃないかって噂もあったし、火のないところに煙は立たないだろうから――別にそれはそれでいいけど、あたしに妙に敵対心を持ってるような……気がする。

なんでだろう。あたしも若原も、恋愛感情なんてないのに。むしろ若原が毎回違う子連れ歩いてることの方気にした方がいいんじゃないかなあ。

でも、内沢さんの気持ちはわからない。自分の好きな相手が他の子に優しくするところなんてあんまり見たいものじゃないし、むしろ相手から近づかないでくれるならその方がよっぽどいい。若原がもうちょっとしっかりしてればいいんだろうけど……アレじゃあ難しいだろうなあ。

キツイ言葉を投げかけられたにもかかわらず、あたしは妙に内沢さんに同情してしまっていた。もちろんそんなこと顔や言葉に出したりしたらきつと内沢さんは嫌がるんだろうから、なるべく接しないようにしようとは思うけれど。

待ち合わせの時刻十分前に、倉橋くんが来た。すぐにあたしを見つけてちよつと驚いた表情をしたけれど、すぐに笑顔で正面に座る。

「早かったね」

「あ……うん、ホームルーム短かったから」

倉橋くんはダージリンをポットサービスで頼むと、あたしのロイヤルミルクティのグラスをちらりと見た。

「ここ、結構美味しいんだ。コーヒーは俺、ちよつと苦手だ」

「そうなんだ」

恥ずかしげに言う倉橋くんに相槌を打つと、彼はちよつと居住まいを正した。

どうしたの、と訊ねる前に倉橋くんが「あの……っ」というのと、店員さんの「お待たせしましたー」が同時だった。倉橋くんはバツが悪そうにカップとポットがテーブルに置かれるのを無言で待つと、もう一度切りだした。

「あの、さ。この間は本当にごめん。俺、つい……」

そこで一度言葉を切ると、倉橋くんは迷うように視線を揺らす。ええと、と言おうか言うまいか迷っているのを、彼は「うん！」と自分に言い聞かせるように頷くと、背筋を伸ばしてあたしをまっす

ぐ見た。

「俺、紺野さんが好きだ。だけどあの時のやり方は良くないと思う。ホントにごめん」

そう言っ、ぺこりと頭を下げる。あたしは言われたことを一瞬理解しきれなくて、何度も瞬きを繰り返していたけど……倉橋くんがそのまま動かないので、ちょっと恥ずかしくて「あ、あの」と恐る恐る言いだした。

「ねえちょっと、頭上げてよ」

そう言っても、倉橋くんは動かない。あたしは焦って彼の腕を揺らす。

「ねえってば！ ……あげてくれないと許さない」

最後の手段とばかりにそう言っ、倉橋くんは顔をあげてくれる。あたしを目が合うと、「ごめん」と言ってもう一度、すまなさそうに眼を伏せた。

……そんな真面目なところを見せられたらもう、許さないわけにいかないじゃない。というよりももう、許してる。

「いいよ、もう。気にしてないから」

ふっ笑っ、そう言っ、倉橋くんの視線が合う。

「本当に？」

「本当に。……あたしこそ逃げたり避けたりしてごめんなさい」

倉橋くんと同じようにぺこりと頭を下げると、やっ、と倉橋くんが笑った。それにつられるようにあたしも笑う。そしてすぐにあることに気づいて笑みを消した。

「どうかした？」

「倉橋くん、あたし……」

あたしの表情が変わったことに敏感に気がついた倉橋くんが訊ねるのへ返事をしようとすると、そこで彼は首を振った。

「いいよ、言わなくて。返事はわかってるから」

そしてやっ、と、紅茶のポットに手を伸ばす。金色の液体が香りを放ちながらカップへと注がれる。

「出来ればそれも、気にしないでほしいんだ。これから遊びたいしね——皆で」

どこことなく、すっきりしたような表情で倉橋くんはそう言うのと、カップに口をつけた。どうしよう、と迷うところではあったけど——本人がいいって言うてるからいいかな、とあたしは何とも単純に考えて、「うん」と頷く。

これで良かったんだと思えたのは、そのあと倉橋くんが心底ほっとした表情で「良かった」と笑ったからだ。あたしはそこで亜矢から言付かってきたものを思い出して「あ、そうだ」と鞆から小さな紙袋を取り出した。

「これね、亜矢と本宮から。皆で色違いなんだって」

紙袋を倉橋くんに渡してから、あたしは自分のケータイを取り出して、掲げてみせる。倉橋くんが紙袋から緑のパールの付いたストラップを取り出すと、満面に笑みを広げた。

「へえ！ いいね、俺って緑のイメージなのかな」

「あーうん、似合うね。ちなみに若原は黄色なんだって。似合うよね」

倉橋くんはすぐに自分のケータイを取り出してストラップをつけ始める。

「若原の黄色はらしいよね。——紺野さんの白も、そんな感じだよ」
あたしと同じようにケータイを掲げて揺らしながら、あたしたちは顔を見合せて、笑った。

21…衝撃的、かつ予測の範囲内

部活もお盆休みに入る頃、あたしはそう言えばと思い出した。――最近、亜矢から連絡がない。履歴を確かめてみると……やっぱり登校日に学校で会って以来連絡がない。

亜矢の場合、何かに夢中になってると連絡がないことも多かったけど、本宮と付き合いだしてからは今まで以上にいろんな経過報告をくれるようになってた。たぶん、あたしが本宮のこともよく知ってるからなんだろうけど。

事実、七月の末はよくメールが来てた。デートしたあの、ちょっとした喧嘩したあの、新しい服買ったあの、そんな他愛もないこと。内容が内容だけにたまに返事しないこともあったけど、あたしと亜矢の間では返信が必ずしも必要じゃないやり取りだったから気にしてなかったけど……よく数えてみれば二週間近く連絡がない。

あたしからぽつぽつ日記っぽいメールを送ってたけど……どうかしたのかな。

そう思ってもう一度、亜矢に近況伺いのメールを入れてみるも……返事なし。まあいいか、どうせ二学期が始まればイヤでも顔合わせるし。

そう、思っていた頃だった。深夜の亜矢の返信に、あたしは気づかなかった。

翌朝、ぴかぴか光るケータイのメールボタンを押して……ぴしりと固まった。

『結ちゃん久しぶりー！ 元気？ あのねーえ、あたしねーえ……』
いつもの、亜矢の軽いノリで始まるメール。そのあとの一文を、あたしは二分ほど眺めていたと思う。

『あたし、亮くんと別れちゃった』

……確かに、亜矢の恋愛サイクルが短いのは知ってる。それが遊び半分じゃないって事も知ってる。亜矢はいつも真剣に相手を好き

になって、付き合って、そして――別れる。その理由は今までのほどんどが。

『他に好きな人が出来たの！ 今の彼はね、海の家でバイトしてる大学生♪』

そんなこと知ってた。けど、本宮までもこんな風になるなんて。亜矢が悪いわけじゃないのは良く知ってる。けど……けど、こんな酷い。本宮がどんなに亜矢のことを大事にしてたか――！

メールの返事はしなかった。あたしは部活のないお盆休みをぼんやりと過ごしていた。本宮が今どんな思いでいるのか……あたしには想像さえつかない。それに、亜矢の友達であるあたしが、まさか本宮に連絡をとるわけにいかない。本宮をこれ以上傷つけるわけにいかない。

それでも、どうしているのか気になった。落ち込んでいるのだろうか。少しは立ち直れているのだろうか。あたしが触れるわけにはいかないけれど、出来ることなら少しでも、気持ちを和らげてあげることが出来ればいいのに。

ふと、あたしはケータイを取り上げて電話帳を繰る。わかほらのぞみ。若原なら、知ってるかも。思い切って通話ボタンを押して耳に当てると、何故か心臓がどきんと跳ねた。

『――もしもーし？』

「あ、わ……かはら？ ああ、あたし」

『おおー、元気してる？ あつはなついねえ〜』

どもりがちなたしの声がちよと掠れた。電話の向こうの若原はいつもどおり、軽い口調で返してくる。

『オレなんてもー、日干しになっちゃいそ。水分がなくなるよ〜』

「あのだ若原、あの……最近、本宮に会った？」

『亮輔？ あー、会ってはないねー、オレ忙しくってさ』

若原のちよとした言い方にヒントを得て、あたしは出来るだけさりげなく訊ねた。

「元気なのかなー。最近電話とか……した？」

ちょっと、沈黙。

『あー、週一くらいで連絡はとってつけど……つーかゆーちゃん、いきなり亮輔の話かよー、オレが元氣かどうかとか気にならない？ 傷つくなあー』

いつもどおりの若原の軽口に、あたしもくすりと笑みを零して言い返す。

「あんたはいつでもお気楽極楽、でしょ。聞くまでもないし」

『酷え！ 繊細なオレを捕まえて酷いいぐさ！』

お互いが電話口で笑い合うと、あたしもちよつといつもの調子を取り戻した。だからごくごく軽く、口に出来たのだ。肝心の要件を。「いやさ、亜矢が本宮と別れたらしいって話をちよつと聞いてさ。

……若原、聞いた？」

『ああ、そーみたいね』

「えっ」

若原が『何それ、マツバマツバ！』なんて笑ってくれることを半分予想してた。なのに……さりと若原は続ける。

『登校日の日に別れたって聞いたけど？』

「本宮から……聞いたの？」

『うん』

瞬きが多くなってるのが自分でもわかった。唇を噛む。

「そっか……」としか、返事が出来ない。電話の向こうは少し沈黙をした後、『でもさー』と喋り始めた。

『オレ、バイトとかその他諸々忙しくて、まだゆっくり話聞いてやれてないんだよね。ゆーこちゃん、ヒマだったら電話入れてやってくれる？』

「え……でもあたし」

『だーいじょーぶ。オレも近いうちに連絡すっからって言っというねー』

これからバイトに行くから、と言って電話は切れてしまった。

「まったくもう……そんな呑気な場合じゃないでしょーが！」

ぶつぶつ言いながら電話を切ると、あたしは大きく溜息をつく。
電話……かけてみても、大丈夫かなあ。どうしよう。

夕方まであたしは迷いに迷って、やっと通話ボタンを押した。呼び出し三回で切ろう、とマイルールを決めて、コール音を数える。
いち、にい……さん。

切ろうと耳からケータイを離しかけたそのときに、ぷつつと音がして、『もしもし』と本宮の声が耳に届く。

『もしもし。——もしもし?』

「あつ、あの、あたし……紺野です」

慌ててケータイを耳に戻すと、言おうと準備していた言葉はすっかり消え失せ、バカみたいにあたしは名乗っていた。……出る前にわかってるはずなのに。

『久しぶり。今、部活盆休み?』

「う、うん、やっと休み。……本宮も、休み?」

『ああ、うち厳しくって、盆休みくらいしか休まないんだ』

練習量が多くて厳しいので有名な弓道部。苦笑しながら答えている様子が手にとるように、わかる。

なんて切り出そう、と考えていると沈黙が続き、ケータイの向こうで本宮がくすつと笑った。

『聞いたんだろ、俺のこと。それ気にして電話くれたの?』

いつものとおり、優しい声。そして続く『ありがとな』の柔らかい響き。

「ううん……ごめん、なんか」

『なんで紺野が謝るんだよ。……まあ、しょうがないよな』

「あたしでよかったら、話、聞くから」

ちよつとの間がそこに挟まれたのは、意外だったから? それとも。

『——正直なところ、希もなかなかつかまらなくて、さ。ひとりでもやもやしてる』

「力不足、かもしれないけど……聞いただけなら、出来るから」

『サンキュ。そう言ってくれるだけでもありがたいよ』

声に笑いが混ざるのは、本宮が出来る限り軽く話そうとしてるから。それくらい、あたしにもわかる。愚痴を零したところなんて見たことない本宮が、こんな風に言うなんて今まで一度もなかった。

「――今夜」

『え?』

「今夜、花火しよう?」

あたしがいつになく積極的にそう言えたのは、本宮の意外な面を見たせいだった。

22..重なるのは逢瀬だけ？

コンビニで花火を買って、あたしは約束の公園に向かった。結構な広さのある公園の中では他にも数組の家族連れが同じように花火をしていて、あたしたちは隅のベンチ傍に水を入れた缶を置き、ぽつぽつと他愛ないことを喋りながら花火を消化していった。

本宮は終始いつもどおりで、もし亜矢からのメールがなかったら別れたなんて想像もつかないと思う。ときどき、花火を眺める本宮の横顔を盗み見ては、あたしはちよつと切なくなった。

いつもと変わらないということは、本宮はまだ亜矢が好きなんだろう。そう、本宮が亜矢を本当に好きで大事に思ってたことはたぶん、亜矢の次にあたしが良く知っている。

「……情けないよな」

口数が少なくなったところで、本宮がぽつりと言った。あたしが何か返す言葉を探していると、本宮は笑いを顔中に広げる。

「ああ、紺野が悪いわけじゃないから。ちよつと愚痴、な。聞き流して」

「うん……」

ぱちぱちとはぜる花火が、本宮の頬をオレンジ色に染める。

「青天の霹靂、って、こんな感じなのかも」

「いきなり、だったみたいね」

「ああ」

そつと言葉を挟むと、本宮はいつものペースで返事をする。それ何かを堪えているのかもしくは見栄を張っているのかはわからないけど。

「まあ、しょうがないよな、こういうことはさ。お互いの気持ちの問題だし」

花火が終わると、妙にあたりも暗くなる。あたしが黙って新しい花火を取り出すと、本宮がその先に火をつける。また、あたりが光

りだす。

「亜矢、悪い子じゃないんだけどね……」

「うん、わかってる。わかってんだよなあ」

大きな溜息と一緒に、本宮が空を振り仰いだ。もしかして泣きたいのを我慢してるのかな、なんて思いながら、あたしは本宮の顎から頬にかけてのラインを見つめていた。

終わった花火をまとめて処分し、最後に手を洗っているときにあたしはふと、若原のことを思い出した。昼間の電話で若原が言ったことを。

「そういえば、さ」

「んー？」

本宮がにっこり笑ってあたしを見る。その笑顔がやっぱり……好きだ、と思う。

「わ、若原も心配してたよ。なんか、忙しくてなかなか会えないけど、って」

若原の名前が出ると、本宮はくすつと悪戯っぽく笑う。

「あいつ、なんて言ったと思う？ 『オレ、夏休みはバイトとデートで目いっぱい。悪いな亮輔、試練に耐えろよ！』 ってさ。ついつい笑っちゃったよ」

若原らしい口調を真似たその台詞に、あたしもついつられて笑う。

「ったく、相変わらずだね、若原は」

「ま、それがないと希じゃないしね」

「いえてる」

顔を見合わせてお互いくすくす笑うと、本宮がうーんと伸びをする。

「あーなんか、久々に笑った感じ。……サンキユな、紺野」

本当に、それがいつもの本宮だったから。だからあたしも、いつもどおりに返したつもりだった。ジョークを。

「いえいえ、お礼はクロスのチーズケーキでいいよ」

「ああ、クロスの旨いよな、俺も好き。……んじゃあご馳走するか」

——え。

あたしがちょっと驚いて本宮を見上げると、本宮は何でもないことのようにん？といった表情で見返してきて、あたしは何も言えずに目を逸らした。

「盆休み中、ヒマなんだ。紺野はいつがいい？」

「え、あ、えっと、あたしもヒマだから……いつでも」

「んじゃあ早速だけど明日は？ あー、クロス近くまで出るなら俺見たい映画もあったんだ。……付き合ってくれる？」

正直、どきんとした。緊張してるのを悟られまいとあたしは出来る限り『いつもどおりの紺野結子』を演じる。うまく笑えるだろうか。

「しょーがないなあ。……高いよ？」

翌日は映画とクロスハウスのチーズケーキ、その翌日はカラオケとラーメン、そしてその次の日はボウリング。タイミングよく本宮とあたしの予定が合って、あたしたちはまるで恋人同士みたいに連日会っていた。

ほどなくお盆休みが終わると部活が始まったけれど、ときどき一緒に帰ったり、夜に会って軽く食事をしたりと何度か会ううちに、本宮から垂矢の話は聞かなくなっていた。

あたしからは聞けなかったし、なによりも本宮と一緒にいられることがあたしには嬉しかったから。まるで彼女みたいに。

夏休み最後の日にはコンビニで買ったアイスを食べながら、最初に花火をした公園でぽつぽつと話をしていた。やっぱり花火をする家族連れが数組いて、あたしたちは懐かしげに目を細めてその光景を眺めていた。

「あーあ、明日っからやだねー」

「紺野それ、今日四回め」

苦笑しながらツツコミを入れてくる本宮を黙ってジロリと睨むと、小さく肩を竦める。

「俺も、明日から頑張らないとな」

さりげない一言だったけれど、それが何を意味するのかあたしにもわかった。亜矢のことだ。

亜矢はいつも彼氏べったりだから、新学期が始まって亜矢と本宮が別々に登校するだけで皆は察するだろう。次の相手と同じ学校じゃない分、まだあからさまじゃないけど……でも、しばらくは噂になるだろう。

「あの子、ああいう子だから……普通に接すると思うけど」

もし本宮と亜矢が同じクラスでなければ、顔を合わせる機会もほとんどなかったと思うけれど、たぶん教室で顔を合わせれば、亜矢は屈託なく話し掛けると思う。

「ああ、わかってる。大丈夫だよ。——サンキュな」

本宮のお礼の言葉に、あたしはそつと首を振ることで答えた。そんなあたしをちょっと目を細めて見ていた本宮が、ふっと表情を曇らせる。

「ごめんな、俺、情けなくて」

「ううん、そんなことない」

今度はしっかりと首を振って、否定する。

「いろいろ付き合ってくれてサンキュ。——倉橋に、ヘンな風に思われなかった？」

「倉橋、くん？」

唐突にその名前が持ち出されて、あたしはきょとんと鸚鵡返しに繰り返す。

「喧嘩になんなきゃいいんだけど」

「誰と？ あたしと、倉橋くんが？ ——なんで？」

なんで、と聞いてからはたと思い当たった。もしかして。

「あ、あの、倉橋くんとはそういうんじゃないかって……」

「え……あ、俺、紺野と倉橋は付き合ってるんだとばかり思ってた……」

あたしの驚きが伝染したかのように、本宮が目を真ん丸くしてそ

う言うと、前髪をかきあげながら「そうなんだ」と笑った。

その手がそっと、あたしの左手に重ねられる。どきりとして左手を、そして本宮を見る。

重ねられた手に力が込められ、本宮が近づいてきて……そっと、あたしの唇にキスをした。

23：始業式のぎこちなさ

始業式の日、あたしは夢うつな気分だった。

昨夜、本宮にキスされて……そのあと、「付き合ってくれる？」

と言われた。あたしは胸がいっぱいでただただ頷くしか出来なくて、あたしの家まで送ってくれた本宮が恥ずかしそうに「じゃあ、明日学校で」と言うのへ「うん」と返事をするので精一杯だった。

本宮と、付き合う——ずっと、本宮のことが好きだった。なんだから信じられない。もしかして夢だったんじゃないかと思う。

学校に向かう足取りが重いのは新学期のせいだけじゃなくて、たぶんそのせいだろう。

「おっはよー結ちゃん、ひっさしぶりー」

亜矢は、相変わらずだった。それがちょっと救いになって、あたしはいつもどおりの笑顔を浮かべる。

「おはよ。……宿題ちゃんとやった？」

「それがさー、数学が三問わかんないの」

ちらりと上目遣いで見てくる亜矢に、あたしはすげなく答える。

「写してもいいけど、あたしも数学だめなの知ってるでしょ」

「あーん、じゃあ亮くんか希くんに聞こう」

亜矢の口から本宮の名前がさらりと出て、あたしはどきんとして手が止まる。屈託なく話をしてくれる亜矢が、今日はちょっとありがたかった。

「あ、これこれー、海の家オリジナルお守り！ ピンクの恋愛運アップ、お揃いだよっ」

小さなピンクのお守り袋をふたつ取り出すと、亜矢はひとつをあたしに「ハイ！」と手渡し、もうひとつをかばんから出したケータイに結びつける。

亜矢のピンクのケータイは幾つものストラップがついていて、じやらりと音を立てた。もちろん、ピンクパールのストラップもまだ、

ついたままだ。

「あ、希くーん、おっはよー！」

目ざとく亜矢が若原を見つけてそう声をかけると、若原も嬉しそうに片手を上げてそれに答え、早速寄ってくる。

「あーなに、もしかして数学のためにオレ、呼ばれた？」

亜矢の席に広げられているノートを見て鋭く指摘した若原に、亜矢が「そうなのー」とお願いモードに入る。

「えー亜矢ちゃん、オレがちゃんあんと始業式に宿題持ってくるような男に見える？」

「……見えない」

あたしが横から突っ込むと、若原はニヤツと笑って「ご名答！」とあたしを指差した。

「あーあ、じゃあ亮くん頼みだなあ」

亜矢の独り言に、あたしはどきりとして手が止まる。……本宮、大丈夫かな。

若原はちよつと考える風に黙ったものの、「そろそろくんじゃね？」と言いついて男子たちの方へ向かっていった。

「もう！」と膨れている亜矢の横顔を見ながら、あたしは考えていた

亜矢に……言わないといけない。あたし、本宮と付き合うんだってこと。大事な友達だからこそ、ちゃんと言わないといけない。それはわかっていた。けど。……なかなか、言い出すのって勇気要るなあ。いきなり切り出すのって難しいわ。

そう考えると、亜矢ってすごい。いつでも真っ先にあたしに言ってくれるものね。

「やっぱりさ、数学は亮くんだよね」

と、亜矢がぱらぱらとノートをめくりながら呟く。

「まあ、うん、そうだね。確かに理数強いよね、本宮」

「ん？ 何？」

亜矢に軽く返事をする、急に後ろからそう声がかかってあたし

はどきりと心臓が跳ねた……と思う。亜矢がニツコリと「あ、亮くんおはよー」と笑うのさえも直視できず、振り返れもせず、ただ固まっていた。

「ああ、おはよう……笹木」

僅かに躊躇して、本宮は亜矢を苗字で呼んだ。亜矢はまったく気にしていないように、今までどおりに「ねえねえ」とノートを開く。

あたしは、亜矢のノートを一緒に覗き込んでいる本宮の伏せ気味の瞳を見ていた。

……大丈夫、なのかな、もう。周りのクラスメートたちは別々の登校とそれから今の「笹木」の一言ですべてを悟ったかのように今までどおりだ。まるで本宮と亜矢が付き合ってた事実なんてないみたい。

「あーっなるほどね！　ここでこの公式使えばいいんだー」

「そ。そうすればすぐ解けるだろ」

「ありがと亮くん！　あと二問もこれでバッチリ助かったあー」

嬉しそうにノートを抱きしめる亜矢に苦笑を残し、自分の席にっこうとした本宮がふと目を上げて、あたしを見た。困ったように泳ぎ始める視線に向かって、あたしはやっとの思いで声を出す。

「お……はよ」

「おはよう」

本宮がちょっと恥ずかしそうに笑いながら挨拶を返し、そしてちょっただけ頭を下げた。たぶんあたしにしかわからないくらいに少しだけ。

その、ほんの少しに本宮の気持ちちが込められてる気がして嬉しくなって、あたしはちょっとあったかい気持ちで本宮の後姿を見つめていた。

始業式、うちの部は部活がない。弓道部は当然のようにあって、それはあたしも元々聞いていたから時に気にせずひとりで昇降口を

出る。……亜矢は大学生の彼氏が駅まで迎えに来るからといって超特急で帰っちゃったし。

結局、思ったとおりで、亜矢はまったく今までどおり。本宮のことは亮くんって呼ぶし、くつついたりべったりしないだけで普通に会話をしていた。本宮は、亜矢のことを苗字で呼ぶようになっただけでさして変わってないように見えた。

教室では朝の挨拶以降、特に会話もなかったけど……まあ、明日からは毎日会えるし、ね。

「ゆーうつこちゃん」

振り返る前から声の主はわかってる。あたしは足も止めずに歩きつづけた。

「ゆーこちゃんってば、冷たいなー」

とんとんと駆け来て、若原はひよいとあたしを覗き込んだ。

「なあに？」

「ひとり？ オレとお茶しない？」

「……バイトじゃないの？」

「今日は夜から。ヒマなのよ」

「暇つぶし？」

じろつと睨んで言っても、若原はぜんぜん堪えた様子もなく、

「かもね」と笑う。

「あたし、そんなに暇人じゃないんだけど」

「ま、いーからいーから」

結局、暖簾に腕押しな感じの若原に根負けして、あたしは駅の裏側にある喫茶店に連れて行かれた。駅を挟んで逆方向にあるせいか、あんまりうちの学校の生徒はいない。

頼んだアイスコーヒーとクリームソーダが来ると、若原はストロ―でアイスをつつきながら「そーいやさー」と切り出した。

「亮輔に久々に会ったけど、けっこう元気だった。電話してくれたんだ？」

その言葉で、本宮が何も言ってないことに気づいたけど……どう

しよう。

「うん、まあね。……本宮と連絡とってないの？」

「あいつ、そーゆーコト言わねーもん」

まあ、確かに……愚痴るタイプじゃないよね。ましてや若原に。軽く頷くと、クリームソーダを見つめてた若原が急に顔を上げてあたしを見る。

「あ。今なんかオレのことけなしたでしょ？」

「……心で思ってることにまで言及しないでよね」

「せめて否定しろよ、否定を！ あーあ、オレってかわいそう」

そう言ってテーブルに突っ伏した若原の頭を軽く叩くと、「痛っ！ 骨折れた！」とバカな反応が返ってきて、あたしは思わず笑った。その体勢のまま、ちらりと若原があたしを見上げてくる。何か、言いたげな視線。

「なんか、あった？」

「え……うんと……」

思わず目を逸らして言葉を濁す。どうせわかることだし、相手は若原だし……

でも、言ってもいいのかどうか……迷う。

「何」

「……付き合って欲しいって、言われた」

ぶっきらぼうにもう一度催促する若原に、あたしは事実だけを言った。

「誰——亮輔に？」

予想に反して、若原は驚いてあたしをまじまじと見る。そのまっすぐな視線が痛くて、あたしは目を逸らしたまま「うん」と短く答えた。

若原は十数秒、たっぷりあたしを見つめて——そして、何度か瞬きをして、視線をゆらゆらと泳がせる。

「でも、だって——いいの？ ゆーこちゃん」

今、若原が言葉にしなかった事実、あたしもわかってる。若原も、

たぶんわかってるんだろう。

本宮はきつとまだ、亜矢のことが好きなんだろう。あたしに、付き合ってくれて言ってくれたのはとっても嬉しいけど——でも、本宮の心にまだ亜矢がいるのを、あたしは知ってる。

亜矢のことを、今までと同じようにちよつとまぶしそうに見つめる仕草は変わっていない。本宮がまだ亜矢と付き合う前から、その視線は知ってた。本宮の視線の先が、亜矢しかないことも。……まさか、若原もちゃんとわかってたとは思わなかったけど。

あたしはちよつと苦笑を漏らしながら、ゆっくりと頷いた。若原はちよつと目を細めてしばらくクリームソーダに集中し、ざくざくと氷をつついていたかと思うと大きく息をつき、「そっか」と呟いた。

「まあ、オレが言えた義理じゃねーけど……なんかあったら言えよ」「若原に？」

その気持ちが嬉しかったけど、素直に頷くのがしゃくで、あたしはにやりと笑いを治えて切り返す。

「オ・レ・に！　　ったく、天邪鬼め！」

「うわあ、たよりがいありそお」

ニツコリ笑って言うのと、若原がじつとりといやあな目つきでストローをくわえながらぼそりと言った。

「……棒読み」

24…意味ありげな宣告

昨日のぎくしゃくした感じにまだ慣れないけれど、なんとかかなりそうだ、と思った。

若原が気づいてたのは意外というべきかすがというべきか――まあ、本宮の一番の友達だからこそ、かな。今日本宮とは、朝挨拶したのと、休み時間にちょこっと喋っただけだったけど……これも少しずつ慣れてくるんだろう。

亜矢には、まだ話せていない。チャンスをうかがってはいるんだけど、今は亜矢、自分の新しい恋愛でいっぱい、彼の話ばかりであたしのことや本宮のことを話題に上げなくても充分過ぎたから――まあ、あたしもこんな慣れない状況だから、もう少し時間を置いてからのほうがいいかなとも思ってるんだけど。相手が本宮なだけに、余計に気が重い。

「ねえ」

そんなことを考えながら放課後の渡り廊下を歩いていたあたしは、突然そう呼び止められた。

一瞬、あたしに向かって言ってるのかわかんなかったけど、すれ違いがわだったし、他に人はいなかったし……反射的に振り返ると、厳しい顔があたしを見据えていた。

ええと――あの子だ。若原の彼女。内……沢雪緒、さん。

「……あたし？」

「昨日、希と会ってたわね」

鋭い声が鋭い指摘をする。昨日……そうだ、クリームソーダ。

「ああいうこと、しないで」

「ああいうことって……」

だって、昨日は若原がいきなり誘ってきたんだもん、別にあたしが誘ったわけじゃ……

「本宮ちゃんと付き合うんでしょう？」

言い返そうとした瞬間、内沢さんがすばりと言った。それに驚いて、あたしは黙ってしまふ。……なんで知ってるんだらう。

「ああいうことしないで」

「あれは……若原が」

「わかってるわ。希が誘ったにしろ、しないで」

語調を強めてそう言うのと、内沢さんはきりと眉を吊り上げる。いつもあたしのときつく睨んでるけど、それ以上に怒りのこもった視線。

「本宮くんと付き合うなら、希には近づかないで」

「どういう意味？ 別に、若原とはそういうんじゃないで」

あたしが問い返すも、内沢さんは何も言わずにくるりと踵を返していつてしまふ。追いかけて——とまでは気持ちがついてこない。なんなんだらう。

あたしが若原のこと好きなんじゃないかって勘違いしてる……。のかな。でも、本宮と付き合うことになったの知ってたし……。なんなんだらう。

それにしても若原、内沢さんに言ったのかな、あたしと本宮が付き合うこと。昨日の今日だもんね。まあ別に隠すわけじゃないけど、そんなペラペラ喋らなくってもいいのに。それに——自分の彼氏が他の女の子誘うのがそんなにイヤなら。

「首に縄でもつけときなさいってのよ」

そうひとりごちずにはいられない。若原の方からちよっかい出して来るんだもん、あたしが好きであいつに近づいてるわけじゃないのに。

25；無責任な噂の真実は

あたしがそれを耳にしたのは本当に偶然で——偶然てコワイ、と思った。

無責任な女の子の噂話は面白い。あたしもときどきはそれに混ざるから、楽しさもわかる。それに、噂話なんてすぐにくところと変わる。真実が混ざっているのかもしれない。根も葉もない話なのか、それすらわからなくてもただ唇に乗せてさえいればいいのだ、女の子は。

トイレの個室を出ようとしたところで、隣が空いた気配がした。手洗い場で数人が喋っている輪へその人が混ざったのもわかった。複数の声が華やぐ。

すんなりとドアを開けなかったのは……亜矢の名前が聞こえたから。

昔から亜矢は女の子の噂的になることが多い。わかってたし、亜矢自身も気づいてるけど気にしない、というスタンスなのを知ってからにはあたしも気にしないようにしていたけど……今日は、違う。「あたしも聞いたー！ 笹木さんが別れたのはまあ予想出来たけど、まさかねえ」

「伏兵現る！ だよーねー」

きやははははは、と無邪気な笑い声が上がる。

「別れるの待ってたのかなー」

「そりゃあさ、傷ついているときに優しくされれば、ねえ？」

「良くあるパターン、王道」

「落ち込んでるところをつけこむってやつ？」

あたしの、こと——？

ごくりと唾を飲み込み、動かない手をじっと見つめる。笑い声はいっそうからからと高く上がり、そしてトイレからだんだん遠くなっていく。

声がすっかり消えて人氣がなくなったのを確認してからドアを開け、手を洗いながらあたしは大きく深呼吸をした。

そうだよ。傍から見たらそういう風に見えておかしくない。それに……半分くらい事実かもしれないし。

自分が噂の槍玉にあげられているっていうのは初体験で、居心地の悪さにあたしは溜息をついた。ハンカチで手を拭きながら、あたしは鏡を見る。

亜矢、偉いなあ。こんな中でよく頑張っていると思う。……あたしも、頑張らないと。

「ね」

鏡の中の自分へむかって念を押すように呟くと、あたしは今日、亜矢に言おうと決心した。

「よし」と言いながら教室へ戻る――途中で、亜矢に捕まった。

「ちょ、ちよつと結ちゃん！ あたし……！ あいたっ」

言いかけたところへ、担任教師が教科書で亜矢の頭を突つつく。

「いたーい！ もう……」

「授業終わったらいくらでも喋れるだろ、早く中入れ」

「あーもう！ 痛いんだから」

担任に、教室へと押し込まれながら亜矢が頭をさすりながらぶつぶつと文句を言いつづけていた。

授業終了後、お昼休み。亜矢が真っ先にあたしに駆け寄ってくる。

「ねね結ちゃん、中庭行こうよ、中庭！」

日が差す中庭でのランチはときどきするけど、今日はちよつと暑いと思う……。

あたしの視線だけで言いたいことを感づいたらしい亜矢は、「大丈夫、日陰があるもーん」とお弁当箱を手にしてあたしを引っ張った。仕方ないかと亜矢についていき、中庭の端にある大きな木の陰を陣取る。さすがに涼しいとまでは言えないけど、まあ、耐えられない。ない。

「あのね結ちゃん、あたし……」

他愛ない話でお弁当を食べ終え、お茶を片手にのんびりしていると、亜矢が妙に改まった口調で切り出した。

「あたしのことはいいんだけど……」

ちよつと言いだすほどむその仕草で、あたしはぴんと来た。さつきトイレで聞いた噂、亜矢も聞いたんだ。

「結ちゃんのことまで悪く言われてるみたいなの、あたしのせいかもしれない」

「えっと……亜矢、あの……」

どうやら亜矢は、自分のせいであたしが根も葉もない噂を囁かれてるって思っているらしかった。

まあ確かに、亜矢の彼氏が変わるときはいつも亜矢を悪く言う噂が飛び交ってる。笹木さんがすごい我侂だったみたいよとか、単なる遊びだったって言ってたらしいとか、そのほとんどが根も葉もない、事実とはまったく違う話だった。

今回も確かにそういう話もちろほら聞こえていたけど、それにあたしを巻き込んだと思ってるらしい。

「ごめんね。あたしと亮くんことは、結ちゃんには何の関係もないのに」

「亜矢、あのね、聞いてほしいんだけど」

すまなさそうに謝る亜矢に、あたしはまずそう切り出した。切り出してしまえば、あとは言うしかない。亜矢がこくと頷いてあたしの次の言葉を待っている。

「えっとね、あたしと、本宮。あの……付き合ってるの」

亜矢の大きな瞳がより大きく見開かれ、みるみる顔が笑顔に満ちる。

「本当?! ほんとなの? 結ちゃんと亮くんが?」

嬉しそうに笑ってそう訊ねる亜矢に、あたしはこくこくと頷く。すると亜矢はにこっと笑って「良かったねっ」と言った。

たぶんその言葉に深い意味も裏もないのだ。亜矢は単に、あたし

に彼が出来たことを喜んでくれているだけで。例えばそこになにか思うところや厭味など、まったく入っていない。そういう風にすぱりと割り切って考えられるのはすごいと思うけれど、誤解されることも少なくない。

ただ、あたしは亜矢と付き合ってきて、それを良く知ってる。亜矢は、本当に喜んでくれているのだ。

「うん……まあ、ね」

「びっくりしたなあもお！　で、いつから付き合ってるの？　あーでも教室じゃ全然そんな素振りないんだもん、気づかないよー、あ、希くんにも内緒なの？　朝とか一緒にくればいいのに」

にこにこ顔であれこれ質問を織り交ぜながら、亜矢は上機嫌だった。

予鈴が鳴ったのを機にあたしたちは腰を上げ、教室に戻る。亜矢があたしと並んで歩きながら、さらりと言った。

「噂なんて放っとけば飽きるから」

やけに真面目な声音だったせいであたしがまじまじと亜矢を見ると、あたしの方を向いた彼女はいつもの笑顔で「ね？」と笑った。

噂が流れているのを知っていると、人の視線やささやき声がわかるようになる。あたしは努めて聞いていない振りをしていただけ、その日の放課後、あたしがぶつけて倒した椅子が本宮に当たったことで周囲の視線が集まったのがわかった。

「ご、めん」

「いいよ、大丈夫」

本宮はちよっと素っ気無くそう言うと、無言で椅子を直してくれる。その素っ気無さで本宮の耳にも噂が届いていることを感じると、あたしは小さな声で「あの……」と切り出した。

けれど本宮はあたしにその先を言わせず、ちよっとこ強張った顔で一瞬あたしを見て「気にしないでいいから」とだけ言った。

それが椅子のことなのか噂のことなのか——判断がつかかねたあたしが返事が出来ずにいると、周囲の視線がふわりと揺れて、釣ら

れてそっちへ目を向けると若原が近づいてきていた。

「亮輔、今日部活だっけー？」

あたしに軽く手を掲げて挨拶を寄越した若原は、いつもどおりだ。話してあるとはいえ、噂が耳に入らないことはないだろう。

「じゃ、あたし帰るね」

「おお、じゃーねー」

「じゃあな」

軽く挨拶だけすると、あたしは二人から離れて教室をあとにする。視線はもう散会していて、あたしはちよつとほつとした。

なんていうか……針のむしろ？

せめて直接聞くとか何とかしてくれたほうがラクなんだけどなあ、とちよつと溜息をつくも、あたしは垂矢のことを思い出して気にしないことにして、昇降口へ向かう。

向こう側から歩いてくる人に気づいたのはそのときだった。内沢さんと、そのとき目が合った。この間言われたキツイ言葉が蘇る。

また何か言われるか、とあたしはちよつと身構えていたけれど、内沢さんは完全にあたしを無視して通り過ぎた。その無視の仕方があからさまで、あたしはまだ彼女が何かを怒っているのに気づいてもう一度、溜息をついた。

もう……あっちもこっちもホント、面倒くさいなあ。

26..秘められし想い

どんよりした気分で昇降口に下りると、「紺野先輩」と声がかかった。一瞬、テニス部の後輩かと思って振り返ると……知らない子がぺこりと頭を下げた。

「一年の、伊東といいます。いきなりすみません」

いとうさん……部活じゃなければ委員会？　そう思ってあれこれ記憶を手繰るもどこで会った子か出てこない。

「噂は本当ですか」

「え」

いきなりのストレートな質問に、あたしは一瞬戸惑った。

「本宮先輩が傷ついているところにつけこんだって、本当ですか」
ストレート過ぎるその質問は、やはり言葉にされたショックでちよつとの間、答えが出来なかった。違う、と言い切れない自分が腹立たしい。

「そういうわけじゃなくて、色々事情があって」

なんて言えばいいんだろう。一言で済ませることが出来なくて、あたしは言葉を搜す。

「誤魔化さなくていいです。だって、本宮先輩はずっと笹木先輩のこと好きだったじゃないですか」

その一言が、あたしの胸を突く。

——そんなの、知ってる。言われなくたってわかってる。本宮が亜矢のことをどれだけ好きだったか、そんなの、あたしが一番良く知ってる。

「笹木先輩に振られて傷ついてるところにつけこんだって本当なんですか」

質問が繰り返される。噂されることに慣れてなくてイラついてた気持ち、じわりと大きくなる。強く言い返そうとしたとき、唐突に「紺野」と名前を呼ばれた。

あたしだけじゃなく、伊東さんも振り返る。その声が、今話にあがっていた人物のものだとわかっていたから。

「一緒に帰ろう」

本宮の声はいつもどおりだったけれど、顔は笑っていなかった。さつきもそうだったけど、今はどちらかというと我慢している感じだ。

「……うん」

あたしの返事に頷くと、本宮はさっさと自分の上履きをしまつて靴を取り出す。それに倣って、あたしも急いで靴を履き替える。さつきから完全に無視されている伊東さんは、唇を噛んで俯き加減に本宮を見ていた。

「伊東」

あたしが履き替えたのを見届けた本宮は、そこで初めて伊東さんに向き直った。

「今日一年は基礎練だろ。休むなよ」

あ、なるほど。伊東さんて弓道部の子だったんだ。

「……はい」

「それから」

か細い声の返事に被せるように、本宮は続けた。

「くだらない噂を鵜呑みにするな」

完全に俯いてしまった伊東さんを置いて、本宮はあたしをちらりと見て促す。それに沿って、本宮と一緒に昇降口を出た。

あの子……伊東さん。本宮のことが好きなんだ……

誰かを好きになる気持ちにはわからなくはない。もしその相手が意図的に傷つけられたりすれば、確かに腹が立つのもわかる。例えば内沢さんがあたしにああいう態度を取るのもわからなくはない。まあ、彼女の場合はピントがずれてる気がしなくもないけど。

ちよっとかわいそうに思いながら歩いていると、本宮が「ごめん」と言った。

「ん?」

「あいつ、弓道部の後輩なんだ。……ごめん、気にしないで」

「うん……」

気にはなっただけどさすがに振り向くことは出来なくて、あたしたちは黙ったまま校門を抜けた。

27…ひたむきなストレート

噂なんて放っとけばいいというのは確かにそうかもしれない、とあたしは考えていた。あたしと本宮がわかってればいい、あ、あと亜矢も。全員に細かい事情を話すわけにいかないし、都度都度説明するのも面倒だもの。

そう考えたあたしは、翌日もまだ衰えない好奇の視線を完全に無視して一日を終えた。幸い、亜矢を初めとして部活の友達も、他のクラスの友達も、あたしと仲の良かった子はちゃんとわかってくれた。それがわかってちょっと嬉しかったのもあって……昇降口でいきなり伊東さんに会ったときもあたしは強気な気分だった。

じっと数秒見つめあったあと、あたしは黙ったまま自分の靴箱へ向かい、靴を履き替える。伊東さんは何も言っていない。……ま、別にあたしから何か声をかけるようなことじゃないし。

そう思って気にせずに帰ろうとしたとき、やっと呼び止められた。

「紺野先輩」

「……なにかな」

振り返ったあたしは、伊東さんの出方を伺うように、毒のない声でまずそう返事をした。きゅっと唇を結んで、どこか怒っているような顔は昨日と一緒だ。

「昨日はわたし、言い過ぎました。ごめんなさい」

怒ったような声のままですらう一気に言うと、伊東さんはぴよこんと頭を下げる。

予想外の行動にあたしが正直驚いて黙ったまましていると、伊東さんはひつくとしゃくりあげて頭をあげた。――涙。そうか、泣くのを堪えようとしてたから。

さっき、彼女が怒ったような表情と声とをしていた理由がわかって、あたしは「うん」と短く答えた。伊東さんは素早く両目を手の甲でこすると、赤い目であたしをまっすぐに見る。

「すみませんでした」

そして伊東さんはもう一度、軽く頭を下げた。頭をあげた伊東さんと視線を合わせたままあたしは数秒見つめて、そしてゆっくりと口を開いた。

「好き、なんだよね？」

「……はい」

低い声がかしたら届かないかも、と思っていたのは杞憂で、あたしの問いに伊東さんはゆっくり頷く。

やっぱり、と息をついたあたしの前で伊東さんは下唇を少し噛んでから、目を逸らした。

「入部したときから、ずっと、本宮先輩が好きです」

細い、細い声。

そうだね、本宮、モテるもん。それはあたしも良く知っていた。弓道部でも人気があるっていうのも知ってた。たぶん、伊東さん以外にも本宮を好きな子はいらんだらう。

あたしが黙っていると、伊東さんはぐっと顎を上げて、あたしを見る。その強い視線について、数回瞬きをしてあたしは目を伏せた。

「わたし、諦めませんから。……失礼します」

最後はぺこりとまた頭を下げて、伊東さんはバタバタと走っていった。

昨日のことを謝りに来たのかと思ったら……宣戦布告、だったのかな。それとこれとは別でもまあ、いいんだけど。

あたしは伊東さんが去った方向をしばらく眺めてから、ゆっくりと校門へ向かう。のんびりと駅までの道を歩きながら、溜息が続く。本宮は……伊東さんのこと、どう思ってるんだらう。もしも亜矢と別れたあとで本宮を慰めたのが伊東さんだったら？　もしも今、伊東さんが本宮に告白したら……どうなるんだらう。

自分でその答えはわかっていて。だって、本宮はまだ――亜矢のことが、好きなんだから。

例えば毎日かわされる幾つものメールも、夜にたまにかかってくる

る電話も、亜矢を失った淋しさを紛らわせているんだってことに、あたしも気づいてる。本宮もきつとそれをわかってる。だからじゃないけど、あたしからは何も言えない。

普段愚痴も弱音も言わない人が、あんな風に自分のことを情けないって言うなんて。あたしが傍にすることで本宮の気が紛れるんだったらそれでもいい、と思っていた。それがとても不毛なんだということは……わかってた。最初からわかってた。

どうしたらいいんだろう。どうしたらよかったんだろう。

今更亜矢にこんなことは言えない。あの子はあれでいて考える子だから、自分のせいであたしが、って考えちゃうだろう。若原にだって言えるはずない。あたしは若原に、それでもいいのかって念を押されていいって答えたんだもの。今更、そんなこと言えるはずがない。

ぐるぐると、答えのないクエスチョンマークが回っている。

28..誰にも言えないSOS

翌日、あたしは初めて学校をサボった。

制服だと目立つかと思っていたら街中には結構制服の子がいて、あたしはほっとしつづぶらぶらと過ごした。別にどこに行きたいのもなかった。ただ、学校に行きたくなかった。本宮にも亜矢にも会いたくなかった。そんな風に考える自分が偽善者みたいでもっと嫌で、あたしはファストフードとCD屋と本屋を幾つもしごししていた。

街はランチタイムが過ぎると往来の人通りが増えてくる。あたしはすっかり疲れきって表通りを避け、裏通りの公園でしばらくぼんやりしたあとで、さすがに疲れてコーヒーチェーンの店に入った。店内の広さと客のまばらなところがちよつと落ち着く雰囲気、あたしはほっとして壁際の目立たない一角を陣取った。

ポケットからケータイをテーブルに出すと、じゃらりとストラップが音を立てる。その中の白いパールがやけに光って見えて目を細めた。

……そういえば本宮のケータイには、これ、ついてなかったな。そりゃそうか、本宮にとってあれは亜矢とのおそろいであって……あたしと、じゃない。

例えばそんな小さなことがいちいち刺になってくるのにも疲れて、あたしはケータイを開きもせず鞆に押し込んだ。

午前中、暇つぶし用にと買った本をぱらぱらめくりながら、目は文字なんて一文字も読んでいなかった。何を考えればいいのか、どうすればいいのか、思いつきもせずただ機械的に紙をめくるだけの作業を続けていた。

お代わりを買おうかな、と思ったのはどれくらい経ってからか、目の前の空のカップに気づいたあたしが本をしまおうかとしたその瞬間、アイスコーヒーのグラスがごとりとテーブルに置かれてあた

しはその主を見上げる。

「な……にしてんの？」

「コーヒ―」

若原が、無造作に向かいに腰掛けてストローを差し込む。慌てて時計を見るけど……まだ、授業中のはずの時間だ。それに若原も、制服。

「若原、学校は……？」

「学校はって……お前もだろ」

ちらりとあたしを悪戯っぽく見上げて答えた若原に、そういえばそうかとあたしは苦笑を漏らす。

「あー……あたしは……初サボリ、しちゃった」

「バーカ」

若原が言うのへ軽く足を蹴っておく。くるくる回していたストローでコーヒ―を半分ほど飲み干すと、若原は「あー……」と言いながら背もたれに背中を預ける。

「なあーんで言ってこねえんだよ！」

「……へ？ なにを？」

話の意図がわからず、きょとんと間拔けな返事をしたあたしを軽く睨んで、若原が苛立たしげに言う。

「なにも、か・も！」

「なにもかもって……だって……」

言いよどんで目を逸らすと、若原がちよつと真面目な声で尋ねる。
「雪緒がなんか言ったのか？」

ゆきお。――内沢さん。彼女の冷たい横顔が頭の中に蘇る。

「ちがうよ、そうじゃなくて」

慌てて否定するあたしに、若原がぴくりと眉を吊り上げる。

「そうじゃねーならなんでオレに頼らねーんだよ。何ひとりで考えてんだよ、このバカ！」

真面目な顔で言われて、あたしはぐつと唇を噛んだ。

内沢さんには確かに若原に近づくなどとは言われたけど、そのせい

だけじゃない。あたし自身が自分がみつともなくて、嫌で、嫌いだ
ったから――

若原が真剣な表情であたしを睨んでいる。それを感じると、あた
しは堪えていた涙がぼろりと一粒、こぼれるのがわかった。

一粒こぼれると、次から次へと溢れてきて、慌ててハンカチで目
を覆う。

「……それでいーんだよ」

ぶっきらぼうな若原の言葉に、あたしは大きく呼気を吸い込んだ。

「若原が、泣かせた……」

言ってちらりと若原を見ると、じとーつとあたしを睨む。

「てめ、責任転嫁か？ いい性格だなー」

「だって事実だもん。若原が泣かせたんだもん」

まるで子供みたいだと重いながらそう重ねると、若原は不快そう
に眉をひそめていたけど、あたしがちよつと笑うと、ふうつと息を
ついてあたしの髪をくしゃくしゃと撫でまわす。

「ま、今日は許してやろう。……これくらいで」

「やだーもう、くしゃくしゃにしないでよ！」

別に、若原は何か相談に乗ってくれたとかそう言うんじゃない、
ただコーヒーを飲みながらいつも通りのくだらない話をしていただ
けだったけど、あたしはすっかり気分が晴れていた。……まぶたは
腫れちゃったけど。

夕方、暗くなる前に送っていくと強硬に言い続けた若原に根負け
して、あたしは家の近くまで送ってもらうことにした。

このあと何かあったら後味悪いから、とは言ってたけど……心配
してくれてるのがわかったから、あたしはいつものようにふざけて
恩着せがましく了解したのだ。

「ねえ、あのさー」

「うん？」

と答えて若原を見上げるけど、前を向いたままだった若原がいき
なり、左手であたしの右手を掴んで、そしてその掴んだ手を掲げて

あたしに向かってニツと笑う。

「手、つないでいい？」

「もうつないでるくせに何言ってるの！」

強引に振りほどこうとすると、ぐっと力が入れられる。

「いーじゃん、少しだけ」

「スケベ！」

「おおっ、差別的発言。男は皆スケベだっつの」

あたしの抗議を笑いながらスルーする若原にそれ以上何やかや言うのが面倒になって、あたしは半ば諦めてそのままつながれていた。そしてここを突っ切るともうすぐそこが家、という公園に入ったとき、あたしは改めてつながれてる右手を掲げる。

「ねえ、いー加減放してよ。もう家、そこなんだけどー」

「えー、冷たいなあ…」

そう言いつつ、さっぱり放す気のない若原に、公園を横切りながら何度かそのやり取りをしたとき。

誰かがいるのが見えた。あたしの視線と足が固定されたのを見て、若原も足を止めてあたしの視線を追う。

……本宮、だった。

今までに見たことのないような真面目な、怒ったような顔をしてあたしを見ていた。若原は気づいたにもかかわらず、手を放そうとしない。あたしが解こうとすると、ぎゅっと強く握って放さない。

本宮がゆっくりと近づいてくる。

29：本当のことと本当じゃないこと

本宮はあたしを見たまま近づいてきて、正面で足を止めると強張った頬を少し緩めた。

「今日、来なかったから気になって……来てみたんだけど」

穏やかに訊ねるそれが、怒りを押し殺しているのがわかってあたしはちよつと怖かった。てのひらを拳に握り締めようと、つい力が入る。

「あ」

そうだった。手、つないでたんだった。

意図せず、若原の手を握り締めたみたいな形になったのに気づいて、あたしは慌ててつながれてる手をもう一度強く振り払う。今度は解けた。その右手を、左手で包むようにして、胸の前で握り締めた。本宮の視線がその手に注がれているのを見て、あたしは慌てて後ろに隠す。

その仕草を見ていた本宮が、今度はゆっくり若原を見る。

「希」

本宮の低い声に、若原は何も言わずただじっと本宮を見ていた。

「説明、しないのか？」

「何を？」

若原が悪びれた風もなく聞き返すと、本宮の眉間に皺が寄った。

「説明しろよ」

「だから、何を？」

若原がもう一度聞き返すと、本宮は黙ってしまふ。あたしはいたたまれなくて、思わず本宮の右腕にそつと触れて「ごめん」と言った。

「あたし今日ちよつと落ち込んで。たまたま、若原に会っただけの。で、送ってくれるって——」

言いながら、あたしはうまく説明できないことをわかってた。若

原がなんで学校サボってあたしといたか、説明出来ない。あたしもわからない。偶然なのか探してくれたのか、わからない。

「ごめん。ケータイも電源切ってて。……ごめん」

それでも言うしかなかった。こんなの嫌だ。こんなのって……

「紺野、俺今、希に聞いてるんだ」

やっとあたしを見て答えてくれた本宮の声は震えていた。たぶんその裏にあるのは怒り、だろう。あたしはそれ以上はもう何も言えなくて、本宮の腕からも手を放した。

「八つ当たりすんなよな」

若原の声はいつもと同じだ。飄々として、ちよつとふざけた感じの。でも目は違う。さっきと似たような、真面目な視線。

「希」

「オレに怒ってんでしょ？ 彼女に八つ当たりすんなって」

あたしを顎で指して、若原が言う。本宮はちよつと唇を噛んで黙ったと思うと、小さく何度か頷いて、そしてもう一度同じ台詞を繰り返した。

「希、説明してくれ」

「だーから、なーにーを？」

若原がふざけた調子で再度聞き返すと、本宮はギロリと上目遣いで若原を睨む。

「なんで紺野と一緒にだった」

「途中で会ったから」

「お前、今日昼前にいなくなったけど、それからずっとか？」

「違いますー」

「じゃあいつから」

「……あのさ、亮輔」

若原がちよつと呆れたように溜息をつくと、軽く肩を竦めてポケットに両手をつっ込んだ。

「はっきり言ったら？ それとも言えねーの？」

本宮が黙ったままで若原を見る。その目がほんとに怒ってて……

あたしはつい、口を挟んだ。

「若原、あの」

「ごめん、ちょおっと黙っててくれる？」

あたしに向かって笑顔でそう言うと、若原は「ね？」いうようにと小首をかしげた。仕方なく唇を噛むと、若原が「ゆーこちゃん」とあたしを呼んだ。

頭をあげて若原を見ると、いつもの笑顔であたしを見返す。

「オレ、ゆーこちゃんのこと好きだから」

「……え？」

一瞬、何のことかわからずに瞬きを数度繰り返すと、若原はにこっと笑って、今度はそのまま本宮に向き直った。

「これが聞きたかった答え。……に、なってる？」

「……ああ」

え——ちよっと待って、あたしだけ話が……見えてない。

本宮はそれを聞くとふうっと溜息をついて、怒りの瞳を引っ込める。ちよっと軟化した雰囲気にあたしがほっとしてるところへ、若原が「亮輔」と本宮を呼んだ。

反射的にあたしも若原を見上げたんだけど……その表情はさっきまでの笑顔はない。厳しい視線をまっすぐに本宮に向けて、若原は続けた。

「おまえに文句言われる筋合いないと思うんだけど」

「……友達の彼女でも、気にしないってことか」

本宮が返したその声は酷く悪意がこもっていて、あたしは口を開きかけ——黙ってて、って言われたことを思い出して声を飲み込んだ。

若原は数秒、黙った。その表情は何を考えているのかわからない真顔で、あたしは二人の顔をチラチラと見比べていた。

「悪いけど、言わせてもらおうわ」

ふっと息を吐いて、若原がそう言った。特にきつくもなく刺もなく、普通の声で。

——でも、顔は怒ってた。あたしが初めて見るような……以前、若原を怒らせたときよりも強い、視線。

若原はざっざっと大またで本宮に近づくと、その胸倉をぐいと掴み上げる。本宮が、咄嗟に若原の腕に手をかける。

「っざけんなよ、付き合うんだったらちゃんと相手を見てやれよ！」

おまえの目はいったいどこ見てやがんだよ！」

若原はそう怒鳴りつけると、勢いよく本宮を突っぱねた。よろけた本宮にあたしが思わず手を伸ばすと、若原がそれを見て苦々しくそっぽを向く。

少しの間、誰も喋らずしんとした中で、若原がぼそりと「帰るわ」と呟いて、顔を背けたままくるりと背を向ける。

あたしは——若原を呼び止めることも、その背に何かを言うことも、出来なかった。本宮の顔を見ることも。

若原が言ったこと——それは真実を突いていて、きつと、本宮には堪えているだろう。いちばん、自分がわかってるはずだ。本宮自身が、自分に嘘をついていたこと、誤魔化してたこと。……亜矢のことをまだ、好きなこと。あたしはそれをわかっていながら傍にいた。若原もずっと気づきながら見守ってくれた。それはたぶん、あたしも若原も、本宮のことを大事に思っているから——その気持ちの種類は違っても、きつとそうだ。だから……言った若原の方がきつと、辛いと思う。

俯いたままでいるあたしに、頭の上からそつと本宮が「紺野」と呼んだ。

ゆっくり顔を上げると、本宮があたしから目を逸らす。目が合うまではあたしを見ていたのに——。

眉間に皺が寄せられて、苦しそうな、泣きそうな顔の本宮が細く息を吐いた。

「ちよつと……距離、おかせてくれる。ごめん俺、今のままじゃ——」

語尾はもう、力がなかった。あたしはそんな本宮を責めることも

出来ずにただ、小さく「うん」とだけ答えた。

その夜はいつもより早くベッドに入った。眠れそうになかったけれど、起きていてもぼんやりと考え事をするばかりで——しかも、あたしが考えてもどうしようもないことばかりだったので、もう寝ちゃおうと半分不貞寝だったのだけど、案の定眠れそうにはなかった。

真っ暗な中で浮かぶのは、やっぱり本宮のこと。あたしにはどうしようもないってわかってるけど、それでも考えずにいられない。明日から……あたし、普通にしていられるかなあ。

仰向けの姿勢のまま大きく息を吐くと、肺が大きく膨らむのがわかる。例えばそんな小さなことで生きてるんだなあとか、実感してみたりする。

ふと、暗い中に青白い光が現れたかと思うと着信音が鳴った。寝たまま手を伸ばしてケータイを開くと……若原の名前が表示される。何故か、ほっとしたのがっかりしたのと半分半分の気持ちであったしは通話ボタンを押した。

『……こんばんはもう寝てる？』

「……寝てます」

『うわあ、予想以上に冷ややかな反応』

けらけらと笑う若原の口調はいつもと同じだ。……あ、ちょっとだけ大人しいかな？

『あのさあ、ちょこつと言ったときたいことがあるんだけど』

「うん」

短い返事のあと、若原は沈黙する。珍しく躊躇しているような、間。

「どしたの？」

『あー、えーとー』

「らしくないね、言いよどむなんて若原らしくない」

くすっと笑うと、若原は『あのさ』と妙に真面目な声になった。

『今日言ったこと、オレ、冗談じゃないからね?』

「今日言ったこと?」

鸚鵡返しに問い返ししながら、若原の厳しい表情を思い出す。

「本宮に言ったこと?」

『ねえそれとだけ天然? ……罰ゲームかよお……』

呆れたような声で言う若原に、あたしはむっとしたのを沈黙で伝える。

『ちゃんと思い出しといて。オレ、本気だかんね』

「思いだせったって……」

『んじゃ、そゆことだから。おやすみーん』

言い返そうとしたところへ若原は早口にまくし立てるとあたしの返事も待たずにぷつりと電話を切った。

……ったく、なんなのよーもう!

あたしはぶつぶつ言いながらケータイを閉じると考えた。ええっと、本宮と会って、怒ってて——そこでやっと、気がついた。

あたし……すっかりスルーしてた。本宮のことばかり気にかけてて。

若原は言ったんだ。“オレ、ゆーこちゃんのこと、好きだから”

あれのこと……? わざわざ若原が電話かけてきて『本気だから』

って念を押すことを考えると、あれって、やっぱり、そういう意味……なの、かな。……そうだね。

あたしはもう一度、若原のあのときの表情を思い出す。真面目な顔。いつもふざけてばっかだったのに……

なかなか寝付けず寝返りを打ちながら、あたしは明日、もう一度若原に聞いてみよう、と思った。

30…すれ違う、偶然

あたしは妙に、おどおどとしてしまっていた。通学路はまだ良かったけれど校門をくぐるあたりから心臓がばくばくいい始めて、昇降口に入ると緊張は最高潮だった。本宮の姿がどこかにないかどうか――そればかり気にして挙動不審だったと思う。

「おはよー結ちゃん！ ……なに、どうかしたの？」

教室の前で後ろから亜矢に声をかけられて振り向くと、亜矢が不思議そうに瞬きを数回繰り返した。

「う、ううん、別に。――おはよ亜矢」

「おはよー。昨日はどうしちゃったの？」

席につきながら屈託のない笑顔で訊ねる亜矢に、あたしは目を泳がせながら「うん、ちょっと」と語尾を濁す。そんなわかりやすい反応にも亜矢は気にすることなく「ふうん」とスルーしてくれた。

亜矢のこういうところは本当、ありがたい。

「あのねえ昨日ねえ、希くんも三限終わったら帰っちゃったの」

「あ……そーなんだ」

「ふふーん、でもねえ、昨日の五限自習だったの。ラッキー」

「数学？」

「そ！ 得しちゃった」

他愛もない会話をしながらあたしは、目の端で本宮を探していた。その視界の隅に若原が見えたとき――あたしは慌てて目を逸らす。

「希くーん、おはよー」

「はよーっす」

あたしの視線を知ってか知らずか、亜矢がすぐに気づいて声をかけ、若原は返事をしながらあたしたちに近づいてくる。

「お、はよ」

「おっはよー、おサボリちゃん」

ぎこちないあたしの挨拶に、若原はニヤリと笑ってそんなことを

言う。亜矢が「おサボリちゃん」と若原の言葉尻を捕まえて嬉しそうに繰り返した。

「希くんはおサボリ魔王だね」

「フフン、王子と呼んでくれたまえ」

「えー王子ー？ 似合わないーい」

亜矢と若原がいつもどおりの軽口を言い合っているその雰囲気癒され、あたしも少し心の警戒を解いた。二人のやりとりにくすりと笑みを浮かべたそのとき、後ろの扉から本宮が入ってくる。

「あ、亮くーん。おはよ」

いち早く亜矢が声をかけると、反射的に本宮は笑顔を浮かべて「おはよう」と言う。けれどすぐそばにあたしと若原がいるのに気づくと明らかに顔を強張らせた。

「はよー」

「……ああ」

若原の挨拶には顔を背けて曖昧にそう頷いただけだった。あたしに関しては既にこっちから声をかけられるような雰囲気じゃない。

ちょっと妙な空気が漂ったその場から、若原が「さあて寝るかー」とふざけ半分の台詞付きで離れていってちょっとほっとする。本宮は近づいて来もせずそのまま自席についたままだった。

大きな瞳で本宮と若原と、そしてあたしを順番に見ていた亜矢は、あたしの耳元に身体を乗り出してくるところこそそっと囁く。

「どうかしたの？ 亮くんと喧嘩でもした？」

「うん、まあ……そんなもんなかな」

苦笑気味に頷くと、亜矢はちょっと眉を寄せて「そっかあ」と肩を落とした。

結局、本宮は一日あたしたち——若原も含めたあたしたちを避けるようにしていた。若原は気にしていないようにいつもどおり振舞っていたし、元々本宮と若原が二人一緒にいることってそんなに多くないから不自然ではなかったんだろうけど、あたしたちにとってはあからさまにおかしな態度だった。

亜矢は、「喧嘩した」という簡単な説明で納得しているらしく、ホームルームの前に自分の席に戻りながらちょこっと舌を出して「ま、仲良くネ!」とだけ言っていてそれきり触れてこない。

お昼休みの終わり際、屋上へ向かう階段へ消えた若原の後姿を見つけて、あたしは小走りにそれを追いかける。階段を見上げると、ちょうど若原が屋上の扉を細く開けようとしているところだった。

「若原」

低い声で呼ぶと、若原は手を止めてあたしを振り返った。表情は逆光に消されて見えない。

あたしが眩しさに目を細めると、光の扉が閉まって、若原の顔が見える――いつもどおり、ちよつと笑みを浮かべた口角。

「どういう、つもり?」

あたしは他にも色々言いたかったいろんなことを綺麗さっぱりすつとぼして、いきなりそう訊ねた。自分でも不躰だと感じたのといくら仲が良くても礼儀は必要だと思って言い直そうとする前に、若原が答えを滑り込ませる。

「そういうつもり」

「そういうって……」

半ば呆れてあたしはがっくりと肩を落とした。あたしの様子をにこにこしながら眺め下ろしてた若原は、扉を開く手に力を込める。また、光で表情がかき消えた。

「ゆーちゃんが好きだよ」

若原の、いつものふざけ半分の口調。あたしは光を見つめながら自分の心臓がどきんと跳ねるのを感じた。だから……じゃないけど、何も返せず、光は若原の姿ごと消える。

ガタンと閉じられた扉を、あたしはぼんやりと見つめていた。

職員会議で部活がなかったのもあって、あたしは亜矢と街中をぶらぶらとしていた。若原はいつもの如く女の子――今日は、内沢さんじゃない子が迎えにきてさっさと帰ったし、本宮は……いつのま

にか教室からいなくなっていた。

お喋りに興じていると束の間でもいろんなことが忘れられる。亜矢はあたしを気遣ってくれているのかいつもどおりなのか、くると表情が変わってそれにつれて話もころころと変わっていく。

強張ってしまっていた心が少しずつほぐれてきて――ほぐれてきたことで、自分が随分と強張ってたことに気づく。亜矢には感謝だな、とあたしは心の中でお礼を言った。帰りにちゃんと言おう、と。

「結ちゃん、あたし裏通りのクレープ屋さん見に行きたいな―」

「……見るだけ？」

「たぶん？」

「嘘つき亜矢」

「ひっどおーいー!」

ぷくつと頬を膨らましたのをからかうと、亜矢はふんつと顔を逸らした。綺麗な髪がさらりと揺れるのをくいつと引っ張って「ほら、行こ」と言うのと、亜矢はほったたを膨らましたままですいてくる。

……もう、こういうところは本当に可愛い。あたしなんて逆立ちしても絶対敵わない。あたしが理想とする女の子像そのままの亜矢が羨ましくて、あたしはこっそり小さく溜息をついた。

「あ」

裏通りに続く小道の途中で、亜矢が立ち止まる。振り返ると、亜矢の視線はあたしを通り越していた。無意識に、その視線を辿って――その先に、本宮の姿を見つけた。

本宮はちょうど喫茶店から出てくるところで、笑っていた。正確に言うと、出口の扉を開けて支えたまま、そのあとから出てきた女の子に向かって笑っていた。あたしが好きだったその本宮の笑顔は、ここ最近ほとんど目にしていなかった。

本宮と伊東さんはあたしたちに気づかずこちらに向かって並んで歩いてくる。本宮を見上げる伊東さんの赤く染まった頬と、車道側を歩く本宮のその笑顔は、どこから見てもカップルのものだった。

あたしは動けなかった。その場を逃げ出すことも、声をかけるこ

とも出来なかった。二人があたしたちに気づいたとき、本宮の顔からさっと笑顔が消えるのだけを、見ていた。

「亮くん！」

その場の氷付けの空気は、亜矢の怒声で溶かされていく。本宮はあたしたちから目をそらせ、伊東さんは笑顔の代わりに何かを守るような――毅然とした表情に変わった。亜矢はつかつかと本宮に歩み寄ると、正面で止まって目を逸らしている本宮を睨み上げる。

「これ、ということなの？」

怒気を抑えてるのがわかる亜矢の質問に、本宮は答えない。あたしは亜矢の小さな後姿を見つめているだけで、何も出来なかった。

31…あたしのために怒ってくれる人

黙ったままの本宮の隣で、伊東さんがキッと眉を吊り上げる。

「わたしが誘ったんです。いけませんか」

「亮くんに聞いているの」

伊東さんの毅然とした態度もそうだけど、亜矢の切り返しも見事だった。あたしはそこでやっと頭の回転が現実を追いついて、ゆっくりと本宮を見る。

あたしの視線を感じてか、本宮が僅かに顔を上げ、あたしを見た。一瞬。

本宮が先にぎゅっと目を瞑り、顔を逸らした。あたしはやけに冷静にその仕草を見ていて、本宮を責めるわけでもなく目を伏せる。

「亮くん、結ちゃんにどう説明するの？」

その、視線だけのやりとり一部始終を見ていた亜矢が、再度本宮に向かって言った。本宮は顔を逸らしたまま僅かに首を振ると、何も言わずあたしたちの横を早足で歩き過ぎた。

伊東さんが、その後を追う。

「亮くん！」

亜矢の声が本宮と伊東さんの背中に飛んだけれど、二人は振り返らなかった。あたしも、振り返れなかった。すぐ脇を、本宮がすいと通り過ぎたのに、何も言えなかった。

本宮を縛るつもりはない。友達付き合いは必要だしそこまで縛るつもりはなかった。けれど、状況が状況だ。距離を置かせてくれて言ったのは本宮であたしも了承はしたけれど、こんなときに、よりによって、伊東さんが相手だなんて。

あたしはのろのろと視線を上げ、どきりとした。亜矢が――

「……亜矢」

「あんなのって……ないよ。あんなの、酷い」

大きな瞳から、ぼろぼろと涙を溢れさせている亜矢に歩み寄り、

あたしはポケットからハンカチを取り出す。亜矢は無意識なのだろう、差し出されたそれを受けとると目尻に当てて涙を吸い取らせる。

「亜矢」

「酷くない？ あんなのって、酷いよ……」

「うん」

亜矢の肩をぽんぽんと叩いて、あたしは、じわりと浮かびかけていた涙が緩やかに落ち着いていくのを自覚する。本当は、泣きたかったけれど……亜矢の涙を見たら、そんなこと出来なくなってしまった。

俯いてしまった亜矢の背中を押して、ゆっくり歩きながらあたしは小さく「ありがとう」と言った。

その夜、初めて亜矢がうちに泊まっていくことになった。

ぼろぼろ泣きやむまで結構な時間がかかったのだけど、泣き止んだ亜矢が唐突に「お腹空いた」と呟いて、あたしは苦笑しつつちょっと考えて「うち来る？」と聞いてみた。

亜矢が予想外に素直に頷いたのと、無事家のOKが取れたのとで、あたしの部屋に急遽、布団が一組運び込まれた。亜矢は、お風呂上にバジャマ代わりに貸したあたしが中学の頃のジャージを着て「それでもおっきーい！」と悦に入っていた。

「ねえ結ちゃん、今日のこと、なんだけど」

枕を抱いて、ちょこんと布団の上に座り込んだ亜矢が言う。あたしは「うん」と返事をして横向きに寝転がった。

「ホントは結ちゃんのほうがもっともっと、怒りたかったよね。ごめんねあたし——すっごく頭にきちゃって」

言いながら、ちよっとむくれた顔をする。思い出したんだろう、枕をぎゅっと抱きしめてた亜矢は、枕の上に顎を乗せてあたしを見た。

視線が合って、あたしは小さく首を振る。亜矢がちよっただけ、口角を上げて笑った。

「大丈夫」

「うん」

あたしがしっかりと言葉で返事を返すと、亜矢はニツコリと笑って頷いた。そして枕を放り投げると、悪戯っぽく笑ってあたしのベッドへ擦り寄ってきて、今度はベッドの上に顎を乗せる。

「でもなーあ」

「なによ」

亜矢の意図がわからなくてあたしが聞き返すと、ちらっとあたしを横目で見た。

「あたし、結ちゃんと希くんの方がピッタリくるんだけどなあ」

「若原？」

思いがけない言葉に、あたしは眉を寄せる。その次の瞬間、若原に言われたことを思い出して――ちよっと、頬が熱くなる自覚があった。だから、わざと寝返りを打つようにうつぶせに身体を捻って上体を起こした。

亜矢はその体勢のままであたしを見上げる。……まるで、子犬みたいに。

「うん。っていうか、希くんはぜーったい、結ちゃんだと思ったんだけどなあ」

「どっから見るとそーなるのよ、あたしより内沢さんのほうがいつも一緒じゃない」

思わず具体的な名前を出して言い返すと、亜矢は笑みを引っ込めてじろりと睨む。そしてはあっとわざとらしく溜息をついた。

「結ちゃんてかなりニブいよね。どっからどう見てもじゃない」
んもう、ともうひとつ溜息をつくど、亜矢はあーあ、と呟いてから手を伸ばし、さっき放り投げた枕を再度抱きしめる。

「でも正直、今日の亮くんにはあたし、幻滅」

枕に顔を突っ伏してぶんぶんと振りながらそう言うと、亜矢は顔を上げて天井を見上げる。

「悪く言いたくないけど、あの態度はないよね」

言いながら、亜矢は再度怒りにほっぺたを膨らましていた。思い

出し怒り……とでも言うのかな。

あたしはどちらかというと醒めたように感じていて、亜矢ほど怒りの感情を露に出せない——本宮が辛かったの、わかってるからかな。それでもあれはないと思うけど。

「結ちゃん、大丈夫？」

ぼんやり考えていたら亜矢が心配そうにあたしを覗き込んでいた。慌てて笑顔を作って頷く。

「うん、まあ、なんとかね」

「亮くんから謝ってくるまで口利いちやダメだよ！」

「はいはい」

笑って流すと亜矢が「結ちゃん！」とムキになって食いついてくるのかわしながら、あたしは本宮のことを考えていた。もしかしたら、このまま——って可能性もなくはないだろう。元々、距離を置きたいって言われてたし、それならそれで仕方ない。こうやって、待っている間が一番苦痛だ。

亜矢が投げた枕がぼんつと顔に当たって、あたしはそこで思考を中断し、「やったな！」と自分の枕を亜矢に投げつける。

「ちよつとお、テニス部ずるい！」

「関係ないでしょ！」

亜矢が枕を避けながら防戦する。笑いあいながら、あたしは久しぶりに笑った気がする、と考えていた。

32：雨降って地固まる？

翌朝、あたしは亜矢を急かしながら支度をして家を出た。幸い亜矢の家よりうちの方が学校に近いから、亜矢は「いつもより余裕！」とかかましてたけど、結局ドライヤーとの奮闘をあたしに中断されて膨れっ面のまま家を出る。

「もー、髪サイアクっ！ 今度結ちゃんちにマイドライヤー、置かせてもらお」

「二度と泊めなーい」

朝からじゃれあいながらいつもの道を学校へ向かう途中、公園の人影に気がついた。あたしの視線の先を追うように、亜矢もそれに気づく。

「おはよう」

本宮があたしを見て、ちょっと照れくさそうにしながら言った。咄嗟に返事が出来なかったあたしの背中を拳でぐりぐりつとすると、亜矢が先に「おはよう、亮くん！」と公園へ駆けていく。

「おはよう、笹木」

「先に行くねー、チコクするなよ？」

ウィンクしてそう言い残すと、亜矢は手を振って小走りに駆けていく。その背中へ本宮が苦笑しながら「笹木じゃあるまいし」と言うのと、亜矢は振り返ってイーっと歯を剥いた。

「―― 一緒に行こうと思って」

本宮はあたしに向き直る。あたしはぎこちなく頷くと、いつもの道を歩き始める。隣に、本宮。視界の端っこに本宮の足が時々見える。

「笹木、泊まったの？」

「あ……うん、心配してくれて」

「……ごめん、昨日は」

本宮に謝られて、初めて自分の失言に気づいたあたしはぱっと本

宮を見上げる。

「そっ、そう言う意味じゃなくて……！」

「いや」

あたしの否定を本宮が再否定する。真面目な横顔は、ちょっと緊張気味に見えた。

「昨日は、ホントにごめん。ちゃんと話す時間、もらえるかな」
「ん」

あたしは短く返事をして、にっこり笑った。目が合った本宮も恥ずかしそうに笑って、「あ、でも」と照れくさそうに目を逸らす。

「今週末、試合で時間取れないんだ。——来週末、大丈夫？」

「あたしも今週末は大会だから」

頷きながらそう答えると本宮はほっとしたように笑って、「じゃ、来週」と繰り返す。なんだか久々にくすぐったい気持ちになって、あたしはひとりでにこりと笑った。

これでいい——多少ぎくしゃくしていても、こうやって仲直りをしていけばいい。少しずつの積み重ねを続けていけば、いつかそれが真実になるだろう。それを、本宮と一緒に出来るのなら、それでもいい。

教室では亜矢が満面の笑顔で待っていた。あたしがなにか言うよりも早く察したようで、すすっと近づいてくると小声で「良かったねっ」と囁いた。微笑して頷くと、亜矢がちらりと周囲に視線を走らせて、再度にこりと笑う。

「話題になってたよ、亮くんと結ちゃんのこと」

「え……？」

亜矢にしては珍しく、低く声を落としたその台詞を聞き返すと、亜矢はあたしの耳元に唇を寄せて囁いた。

「皆びっくりしてたけど、ああやっぱりそうなんだーって感じ？」
担任が姿を現したのと予鈴が鳴ったのと被りながらも亜矢は早口でそう言うのと、ウインクを残して自分の席に戻っていった。

33…木陰のキス

その日から、本宮は毎朝うちの近くの公園であたしを待っていてくれるようになった。最初は緊張していたあたしも三日もするとやっとなつてきて、それに反比例するように周囲の好奇の視線はなくなつていったのがあたしにもわかった。亜矢はそれを現金だと言つて膨れたけれど、噂が収まればそれはそれでありがたいのでスルーしている。若原の態度はまったく変わらずで、それもまたありがたかった。

朝のお迎え以外、本宮に変わったことはない。お互い週末の試合に向けて部活ばかりで、日に数通のメールをやり取りする程度だった。それでも以前より気持ちはかなり穏やかで、あたしはやつと『本宮と付き合っている』という自覚を得つつあった。

だから――わからなかった。あたしは、何故それがそんなにシヨツクなのか。

大雨は、うちの学校のテニスコートには大敵だ。全天候型のコートにするお金をケチったせいで、土のコートは雨で緩むと使い物にならない。放課後、雨はやんでいたけれどコートは水浸しのままで、仕方なく短いトレーニングだけで終わった。

亜矢は帰っちゃったし、本宮は部活。ぽっかり空いた時間を久々にまっすぐ帰つてのんびりすることに決めたあたしは、帰り際にひとつ忘れ物に気づいて教室へ戻る。当然、誰もいない。どうせ帰りがけにも通るから置いていこうと鞆を席に置いて、あたしは職員室へノートを出しに行った。……ホントは昨日までに、って言われたやつなんだけど。

職員室から教室への帰り道、中庭が良く見える渡り廊下であたしは見慣れた人影を見つけてふと立ち止まる。木陰に隠れるようにして見えた茶髪、あれって……

ちらりと見えた姿を探したあたしは、その主が一人じゃないこと

に気がついた。確かに若原はいつも女の子と一緒にだもんな、と苦笑を漏らしかけたところで、見慣れた茶髪の後姿と、その傍にいる女の子の横顔が見えた。

内沢さんだ、と気づいてはっと身体を固くした瞬間、彼女の横顔が若原にゆっくり近づいて――重なった。それがどういう意味かなんて、あたしにだってわかる。

咄嗟に壁に張り付いてしまった自分の動作がまるで隠れているみたいだと気づいて、あたしは気づかれないようにとそっと渡り廊下をあとにする。

教室へ戻ると、心臓の音がやけに大きく聞こえてあたしは深く息をついた。……別に、若原が誰と付き合おうかなんて知ったこっちゃない。内沢さんだけじゃなくていろんな女の子を連れてるのは良く見かけたし、噂はそれ以上に良く聞いた。知り合う前から若原はそういう人だったし、今でもそうだ。

好きだよ、って言われたとき。本気だからね、って念を押されたとき。若原はそれ以上何も言わなかった。だから……じゃないけど、あたしは若原に何の返事もしないし、それに、今は……本宮。

そこでやっと、あたしの頭の中に本宮が浮かんだ。そうだ、今あたしは本宮と付き合っているんだもの。それは若原も知ってることだ――あの公園で若原は、『付き合ってるならちゃんと見てやれ』って言うてくれた。あれは、本宮に対して言うてくれたこと。それなら――

ああ、なんだか混乱する。何がホントで何が嘘？ 若原があたしを好きだって言ったのは、あいつのいつものおふざけのひとつ？

そうだよ、そうじゃなきゃ内沢さんとあんなこと――

何度か、大きく深呼吸をする。ひとりの教室の中に響いていたあたしの鼓動が少しずつ、収まってくる。けれどそれは――落ち着いたわけではなくて、何故か涙に変わっていた。

じわりと浮かぶ涙を、あたしは手の甲で何度も拭った。涙の理由が怒りであることとその怒りが理不尽なものであることがあたし自

身への苛立ちとなり、ますます涙が止まらなかった。若原への怒りなのか自分自身への怒りなのか、もしかしたら哀しみなのかもしれないとか、あたしの気持ちはめっちゃくちゃで、口を開いたら子どもみたいに声を上げてしまいそうで怖かった。

中途半端な放課後は人気が無いのが幸いで、あたしは俯いたまま鞆を引っつかんで昇降口に向かう。さっさと帰って不貞寝しちゃうに限る――そう思っていたあたしに、その声は容赦なく背後から注がれた。

「あれ、ゆーちゃん、部活終わったの？」

身体がぞくりとした。全身の皮膚の内側に一気に鳥肌が立ったような嫌な感触が瞬間的に発して、あたしは強く唇を噛んだ。

「ゆーちゃん？」

振り返らないあたしの名前を、若原がもう一度呼んだ。瞬きをした拍子に、涙が一粒溢れて爪先に落ちた。

「……どした？」

声に心配そうな色加わる。若原が近づいてくる足音がしたと思ったら、あたしの左の肩がそっと掴まれる。無言でその手を外して、あたしは顔を背けた。

「べつに」

涙声にならないようにと押し殺した自分の声は、酷く邪険に聞こえた。慌てて「なんでもない」と付け加えると、今度は声が震える。靴を取り出した右手に、涙粒がぽたぽたと落ちた。若原が今度は強くあたしの左肩を掴んで振り向かせるも、顔だけは背けたままだった。髪が、涙で濡れた頬にへばりついて表情を隠す。

「どしたんだよ」

「なんでもない」

若原が何か喋るたびに苦痛だった。唇が、さっきの光景を嫌でも思い出させる。繰り返し、繰り返し――耐えがたいその場から逃れるために、あたしは無理矢理若原の手を払いのけた。

「なんでもなくねーだろ、言えよ」

靴を履き替えるあたしの背中に、苛立った若原の声が降る。無視して帰ろうとするあたしの腕を掴む若原の手を、あたしは思い切り跳ね除けた。

ばん、と若原の鞆が床に落ちる音がする。思いのほか大きく響いたその音の後、妙にしんとした空気の中であたしは顔を背けたまま、くると若原に背を向けた。

言えるわけがない。あたしが若原に何か言えるはずがない。縛ることなんか出来るはずがない。そんなことはわかってる。今までそんなこと、望んだことすらなかった。なかったはずだった。若原が誰と、何をしようと、あたしが何か言える権利もなければ、言える立場でもない。言える――わけがない。若原に、他の女の子が触れて欲しくないだなんて。そんな馬鹿なこと、言えるはずなんてない。背後からは、何の声も、音も、しなかった。

34…あんたってサイテー

家に帰ると、まっすぐベッドに突っ伏した。枕がふんわりと涙ごとあたしを受け止めてくれるのをいいことに、あたしはそのまま少し泣いた。

自分が何を感じているのか、わかっていなかった。泣き疲れたあたしは恐る恐る、自分がしたことを思い返し始める——なんで、そんなにショックだったんだろう。

ぼんやりと、考え始める。ここには誰もいない。誰もあたしを責めたりなんかしないから、だから、本当のことを、考えてみてもいいんじゃない？——そんな風に言い聞かせてあたしは、目を閉じる。

うとうとと、気持ちのいいまどろみから現実に取り戻されたのは着信音だった。そのまま放っておくとしばらくたって鳴り止み、それからまた鳴り始める。うっすらとした記憶の中でその繰り返しを聞いていたあたしは、ようやく手を伸ばしてダークレッドのケータイを手で開くと見もせずそのまま耳に当てた。

『ゆーこちゃん？』

その声に、とろとろとした眠りは潮が引くようにさっと消えた。予想をしていたはずなのにいざ若原の声を聞くと頭の中は真っ白に消去されて返す言葉が出てこない。

『どーしたんだよ、なんかあったのか？』

何も言わないままあたしは、ケータイを閉じる。ぱたんという軽い音と一緒に電話は切れただろう。そのままの体勢で大きく深呼吸をすると——今度は耳だけじゃなく手にも着信の震動が伝わった。あたしは、突っ伏していた枕からことさらゆっくりと顔を横にずらすと、手の中のダークレッドを見つめた。白いパールがころんと揺れる。

サブディスプレイに浮かぶ名前を見ると、また視界が滲んでくる

——涙なんてもう、すっかり出尽くしたと思ったのに。無意識の動作であたしはケータイを開くと、ゆっくりと耳に当てた。

『……ることないでしょ、どーしたんだよまったく』

最初の声は聞こえなかったけれど、予想はつく。『ゆーこちゃん、いきなり切ることないでしょ』だろう。若原はあたしを呼ぶとき、いつもちよつとからかうような声音でゆーこちゃん、と言う。そういえば会ってすぐにそう呼ばれていたような気がする。

『泣いてた理由、聞いてもイイ？』

そんな風に、優しく揺るような聞き方はずるい。ずるいずるいずるい。若原はずるい。あたしが困ってるときにいつも傍にいてくれるなんてずるい。落ち込んでるときに笑わせてくれるなんてずるい。あたしのことを好きだって——嘘つくなんて、ずるい。

ふうっと、ケータイの向こうで息をつく気配がする。あたしはその気配を聞き取りながら声を出さずに涙を枕に染み込ませつづけていた。

『二十時半、こないだの公園まで行くから。オレ今日バイトで、そんくらいの時間じゃねーと抜けらんなくって。気をつけて出てきてね』

若原の声は、いつもどおりの普通の声だった。あたしの返事を聞かずに——というより、待たずに、若原は短く『じゃね』と言うと、あとは無機質な音だけが耳に残った。

二十時、四十分。あたしは家を出た。本当は、二十時を過ぎた頃からそわそわと時計ばかり見て落ち着かなかったのをなんとか引き伸ばして、でも十分は我慢した。その十分で若原が諦めて帰ってくれたらいいと考えてたあたしは、人気のない公園に半分がっかりした。

それでも半分はほっとしていた。若原に会って、今更何を——言えるんだろう。若原が内沢さんと付き合ってたって、それは若原の自由。あたしには何も言えない。そんなわかりきったことを今更、

どんな顔して言えるんだろう。

泣きはらした目が赤く見えないように、あたしは外灯を避けて公園に入ると、ゆっくりブランコに近づいていった。若原は……もう帰ったんだろうな。そりゃ、そうだよ、あんな風にそっけなく手を振り払って電話もろくに出不くて、しかも時間に遅れて——見切りをつけられてもおかしくない。

ブランコに腰かけてゆっくりと揺らし始めると、ブランコが小さくキイイ、と音を立てる。規則的なそれを聞きながら揺られていると、遠くエンジン音が響き、そして——原付バイクが公園の入口で止まった。キイ、という音を最後にブランコも止まる。

もどかしそうにメットを外して、若原があたしを見つけた。蹴飛ばすように原付から降りると前カゴにメットを放り込んで駆けて来る。『シャンテ』で見た、白いシャツに黒のジーンズ。撫で付けられた茶髪と——まとわりつく煙草とアルコールの匂い。

「悪い、店立て込んだじゃってさ。モリさんに原チャ、無理くり借りてきちゃった」

息を切らせながらそう言って、若原の声に笑いが滲む。あたしは若原が近づくにつれて伏せてしまっていた顔を、今は完全に俯けて座っていた。その視界の隅に、靴が入る。

あたしの正面に立った若原が、ぽんつと頭に手を乗せる。くしゃくしゃくしゃ、と撫でられたあたしは、こみ上げる涙を堪えるために息を止めた。

さっき、涙と一緒に沸きあがってきたのは、怒り。でも今は——それとは違うこと、はっきりわかる。哀しい。淋しい。そんな言葉の方が良く似合う心情をあたし自身が許せるはずもなく、ごくりと涙ごと、飲み込んだ。

「ゆーこちゃん？　どーしたの？」

優しい声は、反則だ。何もかも喋ってしまいそうになる。頭を撫でられるのも、ゆーこちゃん、ってあたしを呼ぶのも、何もかも反則だ。ずるい。若原はずるい。——違う。ずるいのは、あたし。

「なんだよー、泣くなよー」

わしゃわしゃ、と髪を撫でる若原は、どうしてわかるんだろうか。見えていないはずのあたしの目が、涙でいっぱいだってこと。さっき最初の一粒が地面に吸い込まれたってこと。それから。

突然、若原が膝を折ってあたしの前にしゃがみこんだ。かと思うと、いきなり両手で頬を包まれて、俯いてた顔が正面を向かされる。
「……やっ……！」

「だーめ。ほら、顔見せて」

身じろぎした途端に、頬に涙が落ちて若原の手をも濡らしていく。あたしの頬を包んだまま、若原があたしを覗き込む。目を合わせたくなくてぎゅっと睨れば、涙は溢れるばかりだった。

「泣かないの」

若原の親指が、涙に沿って拭われる。ダメだよ、若原、ずるいよ。優しくなんかしないで。あたしに優しくなんかしないで。他の女の子とおんなじように優しくなんか——しないで。

「も……いいよ」

あたしの声は、涙で震えていた。

「いって、何が」

若原の声は、いつだって優しいままだ。

「もお、いーよ。からかわないでよ」

涙声は予想以上にきつく響いた。拒絶が匂う声音に、若原がつと手の動きを止める。

「なんのこ——」

「見たんだ、今日。中庭」

若原が聞き返すのを遮って、あたしは口火を切った。涙に濡れた目を上げて、若原をまっすぐに見る。それは自分でもわかる、憎しみの視線だった。理不尽だ、と頭ではわかっていた。けれど切り出した口は、感情は、もう元には戻せない。一旦吐き出してしまったら、もう飲み込むことは出来ない。

「内沢さんと若原が、キスしてた」

あたしが吐き出した声は、思ったよりも震えていなかった。

「それ、は」

「いいんだ、別に。あたしがそれでどうこう言う権利もないし。別に若原と内沢さんが付き合っとうと何しとうとあたしにはぜんっぜん関係のないことだもん」

若原の声には迷いがあつた。それが肯定のしるしのように思えてあたしは最後にかけられたかもしれないブレーキをかけるタイミングを完全に逸して、立て続けに強い口調を繰り返す。

「好きだなんてからかわれたのがちよつとムカつくけどね。大体あんた、そんなこと言うんならもうちよつと考えて言いなさいよ、親友の彼女相手に言っていい冗談と悪い冗談があるでしょ？」

「ちよ、つと……」

言いながら、あたしはぼろぼろとこぼれる涙を止められなかった。自分でも、言い過ぎてゐることは充分わかつてた。それでも止められない感情は、なんて呼べばいいんだろう。

胃の中のものまで吐き出しそうになるのを堪えながら、あたしは若原を責めつづけていた。

「つていうかそれが若原の手？ こーゆーのにたくさん女の子が引つかかるつてわけ？ やだなーもう、あたし免疫ないんだからさあ、あんまり本気っぽいジョークでからかうの、や」

突然、頬から若原の掌の温もりがなくなったのと若原が立ちあがつたのと、あたしの腕が強く引かれたのが同時だった。驚いて続ける言葉を飲み込んでしまった唇が、唐突に塞がれる。

若原があたしの唇を自分のそれで塞いでいた。何が起きたのかあたしの頭が理解するまでたつぷり三秒そのまま停止する。

若原が、あたしにキスをしてる――

無意識の一瞬。右手にじんわり痺れる感触と、若原の打たれた横顔。

「……サイッテー！」

涙と自己嫌悪でいっぱいになったあたしは、吐き捨てるようにそ

う叫ぶとその場から駆け去った。

35..つながらない

あれ以来、若原は学校に来ていない。

あたしはまだ、若原に対して何かを説明出来るとか、謝るとか、どういう態度に出るべきなのか自分でもわからなくて、散々考えた挙句にやっと、とりあえず最低限の挨拶だけはしようという結論に至って登校したのだけれど……若原はお休みだった。

ちよっとほっとしたのは事実で、あたしは空席をときどき見つめては小さく溜息をつく。

いろんなことをきちんとしなければいけないのはわかっていた。若原のしたことも、あたしの気持ちも、本宮の思いも——だけどあたしは、ぐずぐずとそこから立ち上がれないでいる。はつきりとさせるのが怖いのは、あたしだけなんだろうか。

本宮は、穏やかに約束の日を待っているように見える。あたしはその優しさに甘えて、若原が登校しないことをいいことに明言を避けていた。そんなずるい自分が嫌だった。

そして週が明けても若原は来なかった。先週から数えると、今日で四日目——

「あの、さ、若原と連絡……とってる？」

「いや」

朝のホームルーム前、本宮にそう尋ねると彼も眉をしかめて首を振った。本宮も心配しているのはその表情でわかる。

「どうしたんだろーね、希くん」

亜矢も不安げにそう呟いて、ふと気づいたように「電話してみよっか!」と背をピンと伸ばす。

「コールはするけど出ないんだ、あいつ。メールしてもなしのつぶてだし」

「そっかあ……病気とかじゃなければいーんだけどねー」

「ま、前も似たようなことあったから、そのうち来るんじゃないか

な」

本宮がにっこり笑って言ったそれはあたしたちを安心させるためのものだっていうことはわかった。亜矢は知ってか知らずか、「そうだよー」と素直に頷く。

あたしは——苦笑を口許に刻むので精一杯だった。勿論あの夜のことは亜矢にも本宮にも言っていない。当然だ、言えるはずがない。だからあたしは、それ以上若原のことを気にする素振りさえ、見せることは出来なかった。

その夜、あたしは自分の部屋でケータイとにらめっこすること一時間——若原に電話をするかどうか迷っていた。本宮からの電話には出なかったって言ってたけど……あたしからならもしかしたら出るかもという期待があったのは確かで、それは恋愛感情とかそういうもののせいではなく、若原が休んでいるのがもしあたしのことが原因なら——出てくれるかもしれない、と思ったからだ。

アドレス帳から若原の番号を呼び出して、しばらくじっと見つめていた。そのうち液晶のバックライトが消えて真っ暗に切り替わる。あたしは真っ暗な画面をしばらく眺めて——そしてゆっくりと通話ボタンを押した。

一度目で明るくなった液晶に、若原の名前が浮かび上がるより前にもう一度通話ボタンを押した。半分勢いで。あたしはそのままケータイを耳に当てる。電子音が続く。

十数回目のコールで、唐突に電話は切れた。電話の向こうにいないのか、もしくはあたしの名前表示を見て出なかったのか……あたしはぱたんとケータイを閉じると、溜息をついてそのままベッドに横になる。なかなか寝付けない理由が、若原からのコールバックを待っているんだと、わかっていた。

翌日、若原が休み始めて五日目、朝のホームルームのあとで本宮が職員室に呼ばれた。今朝も亜矢と本宮と三人で、若原来ないねーとここ数日のお決まりの台詞を言い合ったばかりで、嫌な予感がし

ていた。それは亜矢も同じらしくて、不安げに自分を抱きしめるようにしてあたしを見上げてた。

「どうしたんだろうね、希くん」

「うん……まあ、本宮が戻ってくれば何かわかるでしょ」

意識的ににこりと口角を上げたあたしの笑顔でも、亜矢はほっとしたように頷く。そのとき後ろの扉から本宮が入ってきたことに、あたしたちは同時に気づいて振り返った。

「なんだったの？」

亜矢が我慢し切れないように本宮に訊ねた。本宮の表情は真顔で、いつもの柔らかそうな雰囲気は消えている。それが怒っているようにも見えて、あたしは何も言えずにただ本宮の返事を待った。

あたしたちの注視の中、本宮は呆れたように溜息をつく。その仕草で、深刻な状況ではないんだってことが伝わってきて、あたしはまずほっと息をついた。

「停学、十日間だって」

「停学？」

亜矢が鸚鵡返しに聞き返すのへ、本宮が頷く。真顔が崩れて、不愉快そうに歪む。

「例のバイト、バレたらしい。学校サボってまでバイトに詰めてたみたいでさ。ったくあいつ、何考えてんだか」

本宮の、ここまで不機嫌な顔は初めて見た、とあたしは考えながら『シャンテ』を思い出す。うちの学校がバイト禁止じゃないとはいえ、あの立地条件にあの雰囲気じゃ……バレるだけでもまずいのに、学校サボってバイトじゃフォローのしようがない。本宮もそれがわかってるから、不愉快なんだろう。

それでもあたしは、ずっと刺さっていた刺を抜くことが出来なかった。バイトもそうだけど、若原が学校に来なかったのはあたしに会いたくなかったからじゃないか——そんな考えが頭から離れない。そんなの、自惚れてるだけかもしれないのに。

「ったく、だから気をつけろってあれだけ言ったのに」

「でも、十日で済んでよかったね」

にこやかに笑って言った亜矢の言葉にも、本宮はあくまでも不機嫌なままだった。それは本宮と若原が仲がいいからこそその不快さなんだろう、と思う。本宮は亜矢の笑顔を数秒見つめてしかめた眉を僅かに緩めると、ふうっと息をつく。

「俺今日、担任と一緒にあいつんち行って来る。あの馬鹿、そろそろシメないともうどうにもならないな」

眉を寄せたまま溜息をついて、本宮が言ったのへ、亜矢が反応して手を上げた。

「あ、あたしも行きたい！ 結ちゃんも行くよね？」

笑顔で振られたあたしは、ぎこちなく笑顔で受け取ると、「あ……」と目を逸らして首を傾げてみせる。たぶん、あたしは行かないほうがいい。特に本宮と亜矢と一緒になんて。

「ごめん、今日はダメなんだ、予定があって」

「えー、ざんねーん」

しゅんとなる亜矢に、あたしは「ごめんね」と今度は本当に苦笑を治えて謝った。本宮が複雑な表情をしていたのが視界の端に映ったけれど……あたしは気づかない振りをした。

36…彼女が守りたいもの

本宮と亜矢に「じゃあね」と手を振って、あたしは昇降口へ向かった。試合明けで部活は今週いっぱい休みだし、用があるからって断った手前早く帰っちゃおうと昇降口に向かう廊下を曲がって――足を止めた。

あたしを待っていたんだ、ってすぐにわかった。廊下の向こう、いつもの厳しい視線があたしの足音に反応して、内沢さんとあたしの目が合う。じっと見つめられる中、あたしはゆっくりと歩き始め、内沢さんに近づいていった。

彼女は何も言わない。ただじっとあたしを睨んでいるだけで――そういえば彼女が笑ったところなんてほとんど見たことがないな、とあたしは場違いなことを考えていた。

「どういうつもりなの」

語尾を上げない聞き方で、内沢さんが口火を切る。いつものことで何か責められるだろうことは予想していたけれど、内沢さんが何を知りたいのかわからない。どういうつもり、と問われてもそれが何を指しているのかすら――彼女がどこまで、何を知っているのかもわからない。

「希のこと、どうして信じないの」

「……え」

内沢さんの二つめの質問にあたしはその意味がつかめず、つい、間拔けな声で聞き返した。答えを探すより前に、何を言われているのかわからなければ答えようがない。信じないの、って……あたしが若原を信じていない、っていう、意味？ あたしが若原を信じていないなんて、そんなこと、ない……よね？

そこまで考えて思う、あの夜のやりとり。あたしは若原に、からかうのは止めてって言った。言っている冗談と悪い冗談があるって。若原がジョークであたしに好きだなんて、そんな嘘は言わないでっ

て——内沢さんの指摘を正確に理解したあたしは、彼女から目を逸らす。それでも彼女があたしを睨み続けていることが感じられるほど、視線は強かった。

顔を伏せて、あたしは唇をかみ締める。若原を信じていないと詰られるよりも、あのときのことを若原が内沢さんに話したんだっていうことの方が嫌だった。あれきり学校に姿を見せず本宮からの電話にもあたしからの電話にも出ない若原が、内沢さんには話したっていう事実——彼女の方が、若原に近い場所にいるっていう、事実が、嫌だった。そんな醜い嫉妬心があたしを初めて内沢さんに対峙することを選ばせる。顔を上げてきゅっと表情を引き締めると、それにカチンときたらしく内沢さんが眉を吊り上げる。

「好きじゃないならきっぱりそう言えればいいじゃない、どっちつかずの態度が一番、希を傷つけるのよ」

冷たい水を一気にぶちまけられたような、ってこう言うときに使うのかもしれない。その言葉は見事にあたしの心の中、一番奥に隠していた恐れを現実引きずり出す。怒りに頬を紅潮させた内沢さんは、大きな瞳でずっとあたしを睨んでいた。強く、強く——たぶんそれは、若原への思いに比例して。

一番痛いところを突かれたあたしは呼吸さえをも飲み込んでしまっていた。咄嗟に何も言い返せない。ううん、咄嗟じゃなくてもあたし、何か言えるはずがない。今は何を口にしても全部、言い訳に聞こえてしまう。内沢さんに対してというよりもそれは、自分自身に対して。

ゆるゆると傷つくことから逃げてきたあたしがどれだけのるかっただか、今更ながら痛感する。あたしは言及されないのいいことに沈黙を選んだ。現状維持が誰かを傷つけることより、選択によって何かを失うことを——怖がってたんだ。

「希の優しさを利用しないでよ……！」

内沢さんはあたしから目を逸らさなかった。そしてあたしも、内沢さんから目を逸らせなかった。責められているのにそこから逃げ

ることも出来ず、ただただあたしはその場に立ちすくんでいた。人間が次々に涙を溢れさせていく不思議に魅入られたように、あたしはじっと内沢さんの涙を見つめていた。

「あなたなんか、希を傷つける権利なんか——ないんだから！」
内沢さんは最後にぼろぼろと大粒の涙を溢れさせつつ強い声を保ったままそう言うのと、くるりと踵を返していく。その背中では、あたしの言い訳や説明や自己弁護の言葉をすべて跳ね返した後姿は、ときどき嗚咽のために小さく肩を上下させていた。

あたしは泣くことさえも許されないような気がして、内沢さんの足音が廊下の向こうに消えるまで、ただ呆然とそこに突っ立ったままだった。

37 コール・コール・コール

ぼんやりと夜が進んでいくのを、あたしはずっとベッドの中で感じていた。何を考えているのか自分でもわからなかった。内沢さんのことなのか若原のことなのか本宮のことなのか――ただうっすら感じているのは、何もかもをはっきりさせるべきだということだけ。そのきっかけは内沢さんだったけれど、彼女のせいじゃない。あたし自身が――

ふと、ケータイが設定している着メロを鳴らす。あたしはのろのろと手を伸ばして耳に当てる。緩慢な動作が、その着信があたしの待っていたものではないことを表していた。

『紺野？　こんばんは。今平気？』

「――うん」

本宮の声は、いつも同じだ。優しくて穏やかで、そして控えめな口調。

『希に会って来た。あいつ、親と担任と俺とそれから笹木にも説教喰らって、結構めげたっぽい』

「そっか」

本宮がわざと茶化した言い方をするのに気づいていた。だからあたしは声に僅かな笑みを含ませる。

『残り皆勤で登校しないとマジ留年させるって脅されてたよ。さすがに来週からは来るだろ』

「そうだね」

『で、さ』

本宮にしては珍しくあたしの返事に重なるように次の言葉が続けられ、あたしは黙ったまま次の言葉を待った。

『明日、飯食いに行こうと思うんだけど……いい？』

きちんと話をするよ、と言った本宮の声が蘇る。そう、伊東さんのこと。言われて脳裏に蘇るのは、あたしの横を素通りしていく、

本宮の横顔。

他のことに囚われていたことを気取られないように、あたしは小さく「うん」と返した。

『なら、十七時半に駅で。改札前の自販機のとこな』

あの日から本宮とあたしの間には、穏やかな時間が流れていた。伊東さんと本宮に遭遇したあの時間がまるで嘘みたいのに、穏やかで、優しく、幸せで——それが偽りだったことに、あたしも本宮も気づいていたけれど言及しなかった。本宮が整理出来たときに言ってくればよかった。あたしは、決定的な何かを聞きたくなかっただけなのかも知れない。

「うん、わかった」

何を——本宮はあたしに、何を告げるんだろう。伊東さんと一緒だった言訳なのか、それとも別な思いを？ あたしは本宮に、何を告げるんだろう。まだ自分の心さえもわかっていないのに。

優しく切れた電話を握りしめると、まるでそれに反応したかのようブルブルと震える。メールの着信を認めてあたしは再度ケータイに向きあった。

「あ……」

差出人を見て、あたしは思わず呟いた。若原、からだ。一瞬強張った指が、ゆっくりと確定キーを押す。

『明日十八時、ブランクにて待つ。返事は要らないよーん』

いつもと変わらないメールの文面にあたしは苦笑を漏らしつつ、指定の時間を見て手が凍る。十八時って……本宮との約束は十七時半。どうみても、間に合いそうにない。どうしよう。

本宮に事情を話して時間をずらしてもらうか、もしくは若原に？ それともあたし、ここで何らかの決断が必要なんじゃないか——ぐるぐると考えてるあたしの右手で、ダークレッドがまた鳴った。着信音におそるおそる、あたしはケータイをのぞき込む。

「あ」

思わずそんな安堵の声が漏れてしまう。ちょっぴり救われたよう

な気持ちであたしは通話ボタンを押した。

『あ、結ちゃーん?』

耳に明るい亜矢の声。その柔らかな雰囲気にとほとして、あたしは「どーしたの?」と明るい声で返事をした。つい、笑顔も一緒に。もちろん、電話の向こうの亜矢には見えていないだろうけど。

『うん、大丈夫かなーと思って』

たとえば、亜矢のことを凄いなと思うのはこういうときだ。あたしはなかなか弱音を吐くことが出来ない自覚があるし、亜矢は普段特にそれに言及することはない。けれどこんなとき——あたしがどうにもならなくて迷って困っているのを何でわかるんだろう。どうしてこのタイミングであたしに電話をくれるんだろう。

「ねえ、亜矢」

普段、立て続けに自分の話をする亜矢の声は電話の向こうから聞こえてこない。あたしの次の言葉を、声を待っているんだってこと……わかってる。うん、亜矢、わかってるよ。

「あたし……いろいろ、考えないと、いけないよね」

自嘲気味になったのは自分でもわかってる。あたし自身、大きく頷くしか答えのないことを知っている。

僅かな沈黙の後、電話の向こうでふふっと小さく笑う声が聞こえた。

『考えなくっていいんだよ。結ちゃん、考えるのはちょっとおあずけしよ?』

意外な亜矢の言葉に、あたしは咄嗟に返事に詰まる。亜矢は気づいてるのかいないのか、気にせず続けていく。

『考えるより先にさ、感じるじゃない? 気持ちいいとか、なんか気に入らなーいとか。それでいいと思うんだ』

「亜矢……」

亜矢は、物事を深く考えることをしない子なのはよく知ってた。その場の感情で動くタイプなのも知ってる。……だからこそ、亜矢の彼氏はコロコロと変わるのだけだ。

けど、それでいいのかもしれないって思ったのは初めてだった。感情を優先してしまって、それでもいいのかもしれない。今あたしがどの選択がしたいのか——それを優先してしまっているのかもしれない。

でも、あたしにそれが、許されるのだろうか？

『いーんだよ？』

絶妙のタイミングで亜矢がそう言った。電話の向こうではたぶん、いつもの亜矢スマイルを浮かべているんだろう。

まるで心の中を見透かされてしまったみたいで、あたしは電話を持つ手をびくりと震わせる。ごくりと喉が鳴ったかもしれない。

『結ちゃんはさ、結ちゃんのしたいようにしていいんだよ。あたしとか、亮くんとか、希くんとか——あと内沢さんとかも含めてね、他の人のことは考えなくていいんだよ』

亜矢の声は、いつもどおりだった。ちょっと楽しそうな、悪戯っぽい亜矢の声。それが紡ぐ言葉が、すんなりとあたしの心に沁み込んでいく。

亜矢の声を聞きながら、あたしは静かに泣いていた。悲しいとか辛いとかじゃなく、嬉し涙でもなく、ただ泣けるのだ。ただ、涙が溢れていくのだ。

『結ちゃんがね、結ちゃんらしくいてくれるのがあたし、好きだよ』
どうしてわかるんだろう。あたし、一度も亜矢に悩みを相談したことなんてない。いつも亜矢があたしに頼って、相談して、あたしはいつも、亜矢の面倒を見て、アドバイスしたり話を聞いたり——ときどき、亜矢はあたしのことを本当に友達だと思っているのかわかって考えてしまうこともあったのに。

亜矢、あたし——あなたに降参だよ。

そう、深く考える必要はない。亜矢はきっと、自分がいて気持ちいい場所にいて、自分が気持ちいい人に囲まれることを選んできている。その選び方が素直な分、あからさまな分、周りからの誤解も嫉妬も多いんだろう。そういうば亜矢はあれだけの中傷を受けてい

でも自分は誰かの悪い噂をしたり嫌な風に言ったりすることは一度もなかった。亜矢はいつでも裏表がなくて、自分に素直だった。

「……ありがとう」

静かに涙を拭ったあたしがそう呟くと、亜矢はちよつと嬉しそうに『どういたしまして!』

と返してきて、『じゃあ、またね!』と唐突に電話を切った。

ついさっきまで迷いに迷っていた心はきれいに晴れていた。あたしは久々に迷うことを止めて、まずは自分の感情に正直に選択してみようと思いながらケータイをぎゅつと抱き締めた。

38…彼女の向こう側

翌日、あたしは――駅に向かった。十七時半、本宮との約束の間、ちょうど。

探す間もなく、本宮はもう待っていてあたしを見つけて軽く右手を上げる。

「ぴったりだな」

本宮がそう言って微笑みながら腕時計を確かめた。――あたしは、今日、時計をしてきていない。そしてケータイの電源もさっきオフにした。それが、今日のあたしの選択だった。

好きにしているんだ、感情のままに行動しているんだと思うと、心の枷がすつと軽くなった気がした。選択は悩んだものの、今居たい場所にあたしはいる。ひとつを選択したのなら、もうひとつが永遠に手に入らなくなることも――わかつている。

そう考えると、選択しなかったもうひとつが急にあたしの心で大きくなった気がした。急激に膨らんだそれに心臓が押しつぶされそうにきゅうと痛むのを、あたしは目を閉じて深呼吸をひとつするこゝとで抑えこむ。

本宮は、いつもどおりだった。さりげない仕草であたしをエスコートして、何気ない会話を続けている。そんな自然な動作がとても心地いい。あたしが本宮を好きになったのは、こんなところを知っているから、あつた。

案内されたのは、リーズナブルなコース料理で最近人気のあるお店だった。待っている人もいたけれど、本宮がそつなく予約を入れてくれていたおかげでするりと席に着く。

「なんか……緊張する」

苦笑混じりに言くと、本宮はくすつと笑う。

「へえ、紺野でもそうなんだ？」

「あ、ひどい。人を鉄仮面みたいに」

悪戯っぽい言い方はまるで亜矢に対するからかい口調のようだと一瞬感じたけれど、本宮の楽しい笑顔は屈託がなくてあたしをほっとさせた。

食事が始まった頃は本宮の左腕の時計が気にかかって仕方なかったけれど、あたしは意識的にその感情に蓋をしてにこやかに会話を続け、コーヒーとデザートが出される頃にはすっかり腹を括っていた。

香りのいいコーヒーは、気持ちもお腹も落ち着かせる。陶器が触れ合う乾いた音も耳に心地良い。

「紺野」

その声音だけで、本宮が何を言おうとしているのかわかってしまう。何も言わなくていいよ、と思わず声に出してしまうそうなのを呼気と一緒に飲み込んで、あたしは目線を上げた。

優しいまなざしが、痛みのせいで僅かに歪んで見える。本宮が抱えている痛みは、最初からあたしもわかっていたものだった。あたしは最初からそれを知っていて、本宮の共犯になったのだもの。

「俺……亜矢を、忘れられなかった」

押出すように、けれどあたしにしっかりと伝えるために本宮が僅かに掠れた声で呟く。あの日以来、本宮が初めて亜矢のことを名前ですわ呼んだのも、もちろんわかっていた。

「紺野が、全部理解してくれてたの、わかってた——いや、わかってる。それに、俺、甘えてて」

あたしは穏やかな気持ちで微笑み、小さく首を振る。ううん、本宮は最初から甘えてなんていなかったよ。ずっと亜矢を思って、その向こう側のあたしのこともちゃんと見ててくれていた。

——ただ、亜矢の存在が、亜矢への思いが大き過ぎただけ。

「……伊東にも」

本宮はしっかりとあたしを見据えたまま、伊東さんの名前を口にする。目を逸らしたのはあたしの方が先だった。カップを見つめながら、伊東さんの健気な涙を昨日のことのように思い出す。

「伊東にも、悪いことしたと思ってる。俺の甘えが紺野も、伊東も、傷つけることになって——本当に、ごめん」

そっと視線をあげると、本宮と目が合う。穏やかな笑みを浮かべたいつもの表情じゃなく、例えば弓を引いて的を睨んだときのような——ひどく真剣な顔。

あたしの目をじっと見つめ、本宮は小さく、でもしっかりと頭を下げた。いつもは見えないつつむじが見える。

「本宮」

彼の名前を呼ぶと、本宮がゆっくりと頭をあげてあたしを見る。きりりと引き締まった表情に向かってあたしが僅かに微笑むと、ほんの少しだけ、本宮の気持ちが緩んだように見えた。

「あたし、楽しかったよ。本宮が傍にいてくれて」

浮かべた微笑は、最初は意図的だった。あたしは大丈夫、きっと大丈夫と何度も心に言い聞かせながら、唇を弓形にしならせ、言葉を喉から押出していく。

「本宮があたしのことを見てくれて、ホントにね、嬉しかったんだ」
本宮が、下唇を噛むのをあたしは見つめていた。それでも本宮は、あたしから目を逸らさずにじっと次の言葉を待っていてくれる。それは本当に本宮らしくて、あたしの微笑は意図的なものから自然なものへとスライドしていった。

「ずっと……一年の、委員会のおかげで、好きだったから」
「一年……？」

驚いて、本宮が目を瞠る。記憶を手繰るように何度か瞬きをした本宮は、ちょっと耳を赤らめて、口許をてのひらで覆う。照れたときの、彼の癖。

「ごめん、俺、気付かなくて……」

「ううん」

例えばそんな風に照れる表情とか。伏せられるまつげの影とか。照れくさいのを隠そうとする大きな手とか。あたしは本宮の、そういう小さな仕草も好きだった。

「だから、本宮があたしを見てくれたとき、本当に本当にね、嬉しかったの」

本宮は耳を赤く染めたまま、口許を覆っていたてのひらで前髪をかき上げる。その仕草は本宮が照れて困っているときのものだってことも——うん、わかってる。

「……俺、さ」

数秒、沈黙したあとで本宮があたしを見る。耳の赤みはもう、消えかけている。

「紺野のこと、好きだったのは——ホントだから。今更じゃ……説得力ない、けど」

真剣な口調と視線に対して、あたしは僅かに目を伏せる。本宮と一緒に過ごした時間は短かったけれど、そこに気持ちが無かったわけじゃないことは、あたしにもわかっていた。

触れた手や、唇や、向けられたまなざしの柔らかさ——今でもまだ、思い出せる。そのすべてがあたしだけに向けられていた時間は確かにあって、あたしはその間、とても幸せだった。

思いを馳せて目を閉じていたあたしは、胸の奥からこみ上げてくる痛々しい切なさに思わず一粒だけ涙を溢れさせてしまい、つい「あ」と声を上げてしまう。

「紺野」

「違うの、大丈夫——幸せだった、って思ってた」

掠れる本宮の声にあたしは慌てて手を振ってそう言ったけれど……本宮はきゅっと唇を引き結ぶ。

「紺野と一緒にいて、俺、楽しかった」

本宮は真面目な顔でそう言うのと、ふと、唐突に笑みを浮かべる。

「カラオケ、意外な曲知ってたりとかさ、映画観たあと弾丸トークしたりとか。一緒に花火やったときは俺たち二人とも夢中になっちゃって、夜中なのに随分騒いだよな」

くすくすと思いきや笑いをする本宮につられて、あたしも思わず笑い出す。

そうだね、たくさんあったね、楽しかったこと。一緒にたくさん、笑ったよね。

「紺野の笑った顔、俺、好きだよ」

付け加えられたその言葉に、あたしはどきりとさせられる。思わず笑いが止まって本宮を見つめてしまったあたしに向かって、彼は笑いながら小さく頷いた。

「ありがとな」

そして微笑んだ本宮の顔は、あたしが今まで見た中で一番――穏やかで、柔らかくて、優しかった。

39：君へのプレゼント

沈黙は、苦にならなかった。本宮は穏やかな表情でいたし、あたし自身も何かを脱ぎ捨てたように身軽ですっきりとした気分でした。ちょうどそこへ新しいコーヒーのお代わりが注がれ、あたしたちは目を合わせてふふふっと笑う。

今までと同じようできて異なる、別な意味での共犯の笑み。

「ねえ、あたしね」

自然に言葉がついて出るような感覚は初めてだった。伝えたい、と思った。今、あたしが思っていること、大事に思っていることを伝えたい――本宮はもしかしたらちゃんと感じ取ってくれているかもしれないけど、でも、あたしの気持ちをあたしの言葉で、声で、伝えたい。

「本宮のことも、亜矢のことも、大好きだよ」

今までのあたしならきっとこんな台詞、素直に言うことなんて出来なかっただろう。自分の気持ちを言葉で相手に伝えることがずっと恥ずかしいかと思っていた。

もちろん今もそうだけれど……今は恥ずかしさよりもなによりも、伝えたい気持ちの方が強い。

「大好きな友達のことはいつだって信じてる。本宮とも、亜矢とも、みんなで笑っていたいなって思ってるよ」

笑おうと意識するよりも胸の奥のほろがかったかくなってきた、それが涙の代わりに笑顔に広がった感じがした。本宮はあたしをまじまじと見つめていたけれど、やがてちよっと耳を赤らめて、言った。

「紺野さ……そういうとこ、可愛いよな」

「え」

今までそんなこと、一度も言われたことがなかった。本宮に、さえも。

ああ、亜矢にはたまに言われてたけど——それとは全然違う。

「俺が亜矢よりも紺野が可愛いって思うのはそういうところ、かな」
本宮は屈託なくさりとそう続けたけれど……あたしにしては想定すらしてなかったことで、心臓がときどきと跳ね始める。

「亜矢……より？」

「そう。亜矢より」

亜矢の姿を遠くから見つめるときのように、本宮は僅かに眩しうに目を細めた。——そうだ、知ってる。それはいとおしげに相手を見るとき、本宮の表情。

「そのくせ素直じゃないところとかも、可愛いけどね」

「ちょ……ちよっとやめてよ！」

慌てて制すも、本宮はにっこりと笑ってあたしを見ているばかりだ。いつのまにか彼の耳の赤みは消えていて、照れた表情は悪戯っぽいそれにすりかわっている。

焦るあたしを見てその笑みを顔中に広げる本宮はますます楽しげだった。肩を揺らして笑いながら「ごめんごめん」と謝ると、急にまっすぐあたしを見つめる。

「素直じゃない紺野に、俺から、プレゼント」

本宮はそう言って、ちよっと座りなおす。そしてあたしを見つめ
たまま、緩やかに微笑む。

「今日、実は待ちぼうけかもって思ってた。……紺野が来てくれて、嬉しかった」

「そんなこと……」

軽く首を振って否定する。ちらっと頭をよぎるもうひとつの約束のことは押し殺しておいた。

僅かに頭を左右に揺らしたあたしに気づいた本宮は軽く頷いて、続けた。

「行って、いいよ」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

重ねるまばたきの先で、本宮はにっこりと笑ったまま大きく頷く。

いつもの穏やかな笑みをたたえた本宮が告げた言葉を、あたしは何度も繰り返していた。そう、昨夜の亜矢のように、いいんだよって、言ってくれた。いいよって——行って、いいよ。

急速に胸が締め付けられて、呼吸が苦しくなるような気がしてくる。思わず胸を抑えたあたしの手のひらの先で、心の中の一番奥に押さえ込んでいた小さな箱の蓋が、開いた。

「あたし……」

「素直じゃない紺野は可愛いけど」

くすり、と本宮が笑みを浮かべる。

「時々素直になるのはもっと可愛い」

「本宮、あたしで遊んでるでしょ」

じろりと上目遣いに見ると、本宮はおかしそうに笑って、そしてすいと真顔に戻る。

「ごめん。——でもさっきのは、本気」

行って、いいよ。もう一度、本宮の声が蘇る。そしてもうひとつの約束も。迷って視線を落とすあたしに、本宮が追い討ちをかける。「いいよ」、と。

40…たまには素直に笑うのも

途中で見た時計は、ゆうに二十一時を回っていた。何度かケータイを使うことを考えたけれど、あたしは意図的に電源をオフにしたままで公園へ急いだ。

今日の選択を、あたしは間違ったものにしたくない。ひとつを選んだら、もうひとつは失ってしまうということをしっかり自分にも刻み付けておきたい――もし失ったとしたら、また頑張ればいい。

電車から降りて、駅から歩いて十分。つい早歩きをしたせいで数分早く見えた公園に人気はない。鼓動がどきどきと逸るのは急ぎ足のせいだけじゃないだろう。

「あ」

公園の入口が見えて、あたしはついそう声を漏らす。こないだは原付が止めてあった場所にはなにもない。どくと、周りに聞こえそうなほど心臓が跳ねる。ブランコはもちろん揺れていない。急ぎ足のまま目をこすって見つめ直すと、片方のブランコに黒い影があるような気がする。

無意識につい駆け足であたしは公園に入り、ブランコへ向かう。靴の下で砂がじゃりっと思いのほか大きな音を立てて、あたしははっとして速度を緩めた。

ブランコの影は、人のかたちに――見える。

心臓がどくんどくと跳ねている。緊張で指先が震えてくる。瞬きが増えるけど、目を閉じた瞬間に黒い影が消えてしまうんじゃないかと思ってあたしはそこから目が離せない。

目が慣れたのか距離が縮まったからなのか、黒影に茶色の髪が見えた。伏せた頭は、眠っているかのようにも見える。

あたしの足音が聞こえる距離になると、ゆらりとその髪が揺れた。胸が、痛い。ごくりと唾を飲み込んで、あたしはゆっくりと影に近づいていく。

声の届く距離であたしは立ち止まる。茶髪はゆっくりと頭をもたげ、そして――若原とあたしの目が合った。

いつもの余裕のある若原の表情とは打って変わった、驚いて見開かれた目の中に、あたしが映っている。

――ああ、やっぱり若原って、綺麗な顔してる。長いまつげ。通った鼻筋。肌なんて、あたしより綺麗なんじゃないかってくらい。「えと」

大きな目がひとつまばたきをすると、やっと時間が流れ始めたかのようにぼそりと口火を切った。

「あ……オレ……」

二度、三度。まばたきを続ける若原の目に浮かぶ戸惑いが動揺に変わっていった、若原はぱくぱくと口を金魚のように何度か開く。その仕草がいつものと違って随分幼く見えて、あたしは思わずすっと笑いを浮かべた。

その笑いは、若原の感情を動揺から安堵に導いたようで、やっと若原の綺麗な唇が弧を描く。弓なりに。

「……おっせーよ、腹減った」

ぎこちなく笑みを浮かべて、若原はそんなことを言う。いつもの余裕をなんとか取り繕ってる感がありありの顔。当然、今のあたしにそんな厭味は通用しない。

「ごめん、あたし満腹」

「……酷え」

おどけて言うのと、若原は大きさにがくりとうな垂れてみせる。あたしの視線から外れた表情は、見えない。

数秒後、ゆっくり顔を上げた若原はにやりと笑う。

「許さねえ」

その顔はやつといつもどおりの若原で――取り戻したいいつもの顔つきに余裕が浮かんでいた。

でもここは、あたしに断然アドバンテージが、ある。

「ごめーん」

「許さねえっつの」

「んもう、ごめんってば」

笑いが堪えきれず、くつくつと肩を揺らしながら言うあたしに、若原がムツとしてフイとそっぽを向いた。

「ゆるさーないー!」

「えー?」

軽く返しても、若原はそっぽを向いたままだ。

「じゃ、いいや」

楽しげな声で、あたしは言った。いつも若原にばかり余裕のあるところ見せられてた身としては、こんな風にからかえるチャンスは滅多にない。子どもみたいに表情の変わる若原が可愛くて、あたしは続ける。

「帰っちゃおっかなあ」

「オイコラ」

さすがに若原があたしへと視線を戻す。ニヤニヤ笑いのあたしと目が合うと、一瞬いやあな顔をする。

「お腹もいっぱいだしなあ」

「……オレ、愛されてないのね」

さすがにその台詞には笑いを堪えきれなくて、あたしは高らかな笑い声を上げた。ああ、幸福ってこういうこと言うのかなって、ちらり、頭を掠めてく。

笑うあたしを、若原は最初こそ不満げに見ていたものの、そのうち穏やかに笑みを浮かべる。笑いが収まったあたしと目が合うと、ふわりと表情を綻ばせた。

「ね」

「うん?」

優しい時間、って、きつとこういう瞬間なんだろう。柔らかくて穏やかで、でも泣きそうで。若原もあたしも、優しい気持ちで目を合わせたまま。

「抱きしめて、いい?」

「え？」

次の若原の台詞は意外なもので――あたしはつい、即答で聞き返していた。ふわふわな空気が、まるでシャボン玉みたいにはちんと弾ける。

「……なんだよ」

「いや、ちゃんと聞くんだなあって思ってた」

まじまじと若原を見つめていたあたしは、思わず思ったままの事を口にしていった。

――だって前は有無を言わせなかったし、それに今までの若原の性格からしたらそういうときって何も言わずにそうしちゃうんじゃないかって、思ってたから。

「つとにうるっせーなー、あんときはあんどき！　今は今！」

心なしか、若原の頬が赤味をさしてるように見えた。照れくさいを紛らわすようなぶっきらぼうな台詞の癖に、視線はまるで子犬みたいにあたしを見つめている。

「……ダメに決まってるでしょ」

「なんで」

「付き合ってもない人と、そんなこと出来ませーん」

「ちえっ、がっかりー」

口で言うほど若原の表情はがっかりしていなかったのが、あたしには嬉しくて同時に淋しかった。脳裏に蘇るのは、中庭の二人。そう、淋しさの原因は、きっと、それ。

「ねえ、若原くん」

「……なに？　紺野サン」

わざとクン付けで呼ぶと、若原もわざと合わせてあたしの名字を呼んだ。真顔に戻りつつある若原にあたしはにっこりと笑ってみせてから、軽い口調を心がけて聞いてみる。視線は、合わせたままで「中庭の若原と……内沢さんのことなんだけど」

若原はぴたりと動きを止める。瞬きが増える。目が泳ぐ。何かを探しているような、考えているような仕草をひとつおり繰り返して、

そして若原は片手で口許を覆い隠しながらあたしから目を逸らした。
「えと、あの、あれは……ちょ、ちょお待って」

目を逸らしたままそう言っていると、じっと見つめてるあたしをちらっと見てから今度は手で目元を覆う。頬から首筋、耳がさあっと赤くなっていくのがわかる。

ちょっと長めの沈黙のあと、若原は俯きながらあたしに向き直った。目元を覆っていた手は今度は首元を隠すように置かれている。

「……見られてたんなら、何言っても言い訳になっちゃうんだけど」
悪戯をした子どもが叱られているように、犬が耳と尻尾を垂らしてしょんぼりしているような殊勝な声音で若原はおずおずと続ける。
「あのオレ、えっと、あれはあの……雪緒曰く、『記念』だったこと」
「記念？」

一瞬、意味がわからなくて聞き返すと、若原はまた目を泳がせて焦った風が続ける。

「記念、そう、えっと、そーゆー対象に見られないってオレ、最初っから雪緒には何度も言ってたんだけど、えっと、あいつ、じゃあ最後に記念に、って」

若原の言葉を、あたしは脳内でもう一度咀嚼しなおす。ええとまず、若原は内沢さんのこと――？

「けっ、けど、してない！ 寸前で止めたし、オレ――！」

「わかった、わかった、わかりましたー」

整理する前に、若原が焦り顔で続けるのをあたしはまず止めた。
ええっと、まず？

『そーゆー対象に見られないってオレ、最初っから』

若原の必死な声が、一瞬あたしを微笑ませる。ふうん、なんだ、そっか。――でも、内沢さんは、本当に本当に若原のこと、好きだったんだね。最後に記念に、って言いたくなるくらい。

ちよっと切なくなると、あたしは俯いてゆっくりと視線をずらす。
「ゆーこちゃん」

どきりとする、若原の真面目な声。ずるい、こんなときに。あたしは黙ったまま視線を動かさない。

「オレ」

「ねえ、若原」

若原の声と、あたしの声が重なる。視線を上げた先では若原が妙に真面目な顔をしていて、あたしの心臓はまたもどきりと跳ねる。それを押し隠そうとあたしは大きく息をつく、口許をゆるませるにつっこり笑う。

「……握手、しよう」

「握手？」

「そう。ありがとうと、よろしくねの、握手」

若原は、差し出されたあたしの右手をしばらくじっと見つめる。震えるな、あたし。

ちらりとあたしを見るのへも笑顔で返すと、若原はちょっと肩で息をついた。そしてブランコから立ち上がってやっといつもどおりの余裕ある笑顔を浮かべる。

「しょうがない子だね、ホントに」

あたしの手を、若原の手が包む。大きな、あったかい手。若原はぶんぶんぶんと三回振ってからぎゅっと力を込めた。

「オレをどれだけ焦らせばいいワケ？」

「え？」

思わず真顔で見返すと、若原もいつのまにかまた真面目な顔に戻ってた。いつもの遊び半分じゃないその表情にどきどきするのを顔に出ないように、あたしは吐息と一緒に唾を飲み込む。

「一年の夏休みから、ずっとオレ、ゆーちゃんを見てた」

一年の……って、まだあたし、若原のこと、知らない。ううん、本宮ともまだ知り合っていないときだ。

あたしが考えてることがわかるかのように、若原は「そゆこと」と短く言う、握手の手を離す。ふんわりと風が手のひらを通る。あたしは、若原から目が離せない。

「それからずっと、ゆーちゃんを見てたよ。オレって結構一途じゃね？」

茶化した言い方はたぶん、あたしのためだと思う。思わず息を止めてたあたしは、ふうっと大きく息をつく。

「……バカ」

「バカで結構」

若原の、余裕じみた笑顔が憎たらしい。あたしはちょっとムツとして、わざと続ける。

「バカね、ホント」

「あんま繰り返し返すなよ、傷つくのよ、オレも」

「バーカバカバカバカ」

軽いやり取りはまるで、いつもと同じだった。ときどきも緊張もなく今までどおりの若原とあたしの立ち位置は心地よくて、あたしはムキになって続ける。

「あのね……可愛くないねえ、そゆとこ」

溜息と一緒に吐かれた、ちょっと呆れたような若原の口調にあたしは「いいもーん」と、つんとそっぽを向く。

「でもさ」

ちらりと横目だけ若原に向けると、その視線の先で若原が首を傾けながらにっこり笑う。

「そーいうところも、好きなワケ」

と言うと、いきなり視界いっぱいには若原の、胸。握手のときは手のひらに感じていた温もりが、今はあたしの背中に回っている。

「抱ーきしめちゃった」

頭の上で、そんな楽しげな声がして、あたしは頬や耳が熱くなるのを自覚した。

それを若原に気取られる前にと、

「もう！」

と、ちよっと乱暴に腕を振り解き、文句のひとつでも言ってやろうと見上げたあたしの目の前に、「ホイ」と若原が自分の手を差し

出した。

「……なによ」

「手」

あたしは思わず、不機嫌な声で聞き返す。上目遣いで睨んでも、若原はにこにこ顔のままだ。

「なんでよ」

「手！」

差し出されたままの手を見て、あたしはちょっと躊躇する。いや、ともだめ、とも言えず、なんて返していいかわからなくて困ったあたしがさすがに表情を解いて若原を見上げても、にこにこして手を差し出しているだけで。

……もうホント、バカなんだから。

あたしは耳が熱くなるのを感じながら、勇気を振り絞る。——素直になれる勇気を。亜矢に分けてもらった勇気を、どうか。

少しずつ、その手に向かうあたしの動きを、若原は急くこともなくずっと待っていてくれた。指先が触れて、そしてそのてのひらの中に自分の手を滑り込ませて、きゅっと握り締める。あったかい、若原の体温。握手とは全然違う、柔らかな感触。おずおずと緩めかけるあたしの手が、確かめるように握られた。

「送ってったげる」

「ん」

若原がどこか恥ずかしそうに言うのへ、あたしも素直に頷いた。その反応にちよつとびくりしたように一瞬若原は瞠目するけれど、嬉しそうに笑って、頷きを返す。

頬が熱くなる自覚があった。きつとあたしのほっぺたは勿論、耳も首筋もみんな、赤く染まっているだろう。明るい陽の下ではもしかしたらこんな風に出来なかったかもしれないと考えると、亜矢の怒った顔がまぶたに浮かぶ。——亜矢、ありがとう。

つないだ手から、若原の温もりが伝わってくる。あたしの体温も、若原につながっていく。気持ちがつながるのは、きつとそんな遠く

ない明日なのかもしれない、と、あたしはもう一度、きゅっとな
いだ手に力を込めた。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0655g/>

彼女の向こう側

2011年10月11日03時20分発行